

コウタリ・リアル  
03



鈴木カラス

とべないぼうし

こみやま蘭子

海辺柊路

表紙イラスト／とべないぼうし

「収録作品」

しおひがりなつみかん

羊水奇談

入れ墨の城の姫



しおひがりなつみかん

作 鈴木カラス

挿絵 とべないぼうし

(1)

筆で刷いたような薄い雲が浮かぶ冬空に、警報のようなサイレンが鳴り響いた。

気にした様子もなくナツミは洗いたての白いタオルを広げ、力強くはたいた。パンツ！という乾いた音と共に細かな水しぶきが顔にかかった

が、冷たさよりも、澄んだ空気の清々しさを感じた。

確か寒い時は音が大きく響くって誰かが言ってたっけ……。

全く同じ色合いをした平屋建ての仮設住宅が建ち並ぶ空き地の一角で、ナツミは鼻歌まじりに手際良く洗濯物を干していく。あちこちで洗濯機の回る音や、ラジオやテレビから流れる音、それらを動かす電気を供給する発電用モーターの駆動音が聞こえてきた。

「時報代わりだって、何もあんなけたたましい音流さなくてもいいのに。いくらなんでも時計くらい皆持つてるわよ」

非難区域の各所に設置された灰色のスピーカーを、傍らのエミコは不満げににらみつけた。

ナツミは作業を続けながら、

「でも結構便利な時もあるよ。外にいる時とか、うっかり昼寝しちゃった時とか。慣れれば気にならないよ」

と言つても、

「そんなもの携帯電話のアラーム使えば済む話でしょう。役所のやる事つてホーント、どん臭いわ」

冬だというのに以前にまして体格の良くなつたエミコは、額に浮かんだ玉のような汗を拭きながら不満を続ける。自分は震災で壊れた一戸建てを建て直した両親の元に二ヶ月前に引っ越したというのに……。

「旦那さんに頼んだら何とかならないの？ 役職なんでしょ？」

「うーん」

白いワイシャツに洗濯バサミを付けながら眉間に皺を寄せつつナツミは小首を傾げる。

「そういう仕事の担当じゃないと思うし……」

「日曜にも出勤しなくちゃいけないほど忙しい部署の管理職なら力あるんじゃないの？」

「どうかなー」

歯切れの悪いナツミの反応に、エミコは大袈裟なため息をついてみせ、ナツミの顔の前に人差し指を突きつける。

「アンタねー、会社クビになってまで結婚した旦那なんだから、フル活用しなきゃ！」

「だからクビじゃないって、何回も言ってるのに……」

古い付き合いながらもエミコの勘違いと極端な意見に、さすがのナツミも辟易し、顔をそらして小さくぼやいた。

一年前。クリスマススイブの夜。

二年前の半島戦争勃発時より緊張が高まっていた半島に隣接する共和国南東部の大都市で、共和国人民軍のクーデターが発生。同時に、数発



の長距離弾道ミサイルが海を隔てた「仮想敵国」の首都に向けて発射された。

最初に海上で警戒中だった合衆国海軍艦艇のレーダーがそれを捕らえ、ついで知らせを受けた国防軍のイージス艦が迎撃行動に移り、空軍の迎撃機が緊急発進した。

ほとんどの国民にとって寝耳に水な非常事態の発生は、ラジオやテレビで緊急放送が流れるよりも早く、以前から駐留する合衆国軍との間で共同開発し共有化していた最新鋭の防空システムによって、何度と無く多彩にシミュレーションされた通りに撃ち落され、たった一発だけが首都圏を西へ離れた沿岸部へ落下しただけで済んだ。

問題はその後、首都圏の端から西の沿岸地域を、マグニチュード七、震度六強の地震が襲ったのだ。ミサイルの落下が要因となったのか、はたまた驚くほどの不幸な偶然だったのか、一年経った現在も依然として

発生の原因は突き止められていないが、とにかくにもその天災はミサイルとは比べ物にならない甚大な被害をもたらした。

津波によつていくつもの漁港が、地割れと揺れによつて首都圏から中部地方へ向かう高速道路が寸断され、沿岸都市の多くの建物が倒壊して死傷者が出た。

ナツミの住む街も、深刻な被害を受けた。

震災で、ナツミの勤めていた街中の酒屋は、三階建ての店舗と事務所を兼ねた母屋は十分な耐震建築によつて施工された建物だったので無事だったが、古かった倉庫は全壊し、配達用のトラックも四台中三台が廃車になった。

幸い火事は起きず社長夫妻と息子である専務家族に人死には出なかったが、古参の番頭さんは自宅の下敷きになり亡くなってしまい、一人暮らしの若い従業員はアパートが潰れ、アルバイト配達員の男の子は行方

不明となった。先輩事務員のセーコさんは一人息子と共に街から離れた実家にいた為無事だったが、同じ郊外のナツミの家は木造で古かった事もあり半壊してしまった。

人だけでなく会社としての被害も大きかった。失った倉庫、商品、車などは保険で補償は効いたが、取引先である飲食店が軒並み潰れ、仕事をしたくても買ってくれる相手がおらず、商売にならなくなった。

元々斜陽な業界でもあったし、まして震災前には近い将来の廃業の話もあった会社である。何にせよ、続けるには色々と整理する必要がある。た。

アパートが潰れ住む所を失った若い社員はそれを察したのか、自分から退職を願い出て郷里へ帰っていったが、問題はナツミだった。

ナツミは十年近く勤めてきたし、社長は孫のようにナツミを可愛がってくれた。従業員は勿論、問屋の営業マンや馴染みのお客さんたちにも

人気があり、仕事に関してはドライな専務も、さすがに面と向かって辞めて欲しいとは口に出せなかった。

だからといって女手一つで一人息子タイチくんを育てるセーコさんを解雇するのはもつと難しい。ナツミが自発的に身を引くのが最善ではあったが、ナツミとて収入の当てを無くすわけにはいかなかった。

震災後の後処理に追われる体力的疲労と、余所余所しい空気が漂いだした職場に勤める精神的な疲労が全員のピークに達しようとした時、解策は思いもしなかった方角からやってきた。

ナツミは、プロポーズされたのだ。

「不自由は絶対させません。一生、アナタを守ります」

半年ほど前、銀縁メガネの奥にある角ばった顔つきに似合わない小さ

くつぶらな瞳で、真つ直ぐにナツミを見据え、モチダさん——今の夫はプロポーズしてきた。

中背だが痩せているせいでひよろ長い印象がある三十代半ば。ナツミの十歳年上で、駅の南側に建っていた古いマンションの一室に一人で住み、週に一、二度のペースでナツミの勤める酒屋に珍しい洋酒やワインを買いに来ていた常連客の一人であつた。ナツミも何度と無く接客した事があり、上品な身なりや落ち着いた物腰から堅い仕事に就いている人間という印象が初めにあつた。

やがて少しづつ会話を交わすうちに親しくなつて役人である事が分かり、仕事終わりに食事に誘われるようになり、休日に遊びに出かけるようにもなつた。

しかし、恋愛対象として、まして結婚対象として見た事は一度も無い人だつた。穏やかで博識で包容力があり、兄弟といえは弱弱しい姉しか

いなかっただナツミにとって頼れる優しい兄のようなもので、向こうにとっても自分は妹みたいなものだろうと、歳の差もあつて一方的に思つていた。役所に勤めているのは聞いていたが、どんな仕事をしているのかは詳しく知らなかつたし、それほど入り込んだ会話は無かつた。つまりその程度の関係だつたのである。

だからこそプロポーズは唐突に感じ、ナツミには戸惑いしかなかつた。いつまで経つても子供っぽいと言われる見た目と重なる「君はどこか浮世離れしているね」と笑いながら社長に指摘された性格のせいか、モチダのそれらしい話を聞き漏らしていた可能性は大きかつたが、それを差し引いても突然すぎた。

しかし、周囲の反応は違つた。

あの歳で副課長ならエリートつて事だろう、役人は不況に強いからねー、世の中が安定するまではまだまだ時間がかかりそうだしな、良いご

縁だと思うよ——。

モチダからプロポーズを受けた話を社長に告げると、社長夫妻は勿論、結婚なんてするものじゃないと公言していたバツイチのセーコさんだけでなく、普段プライベートにはほとんど口を出さなかつた専務までもがナツミに結婚を勧めた。

それが遠まわしな退社勧告である事は、のんびり屋のナツミにも十二分に理解できたが、なんとなく自分が花街の女郎にでもなつた気がし、子牛を荷馬車に載せて市場へ運んでいく様子を描いた曲が頭の中で流れ、その時は言いようのない寂しさを感じた。物静かな専務の奥さんに「ごめんね、ナツミちゃん」と言われた時には、本気で泣きそうになつたものだ。

唯一の肉親である父親もまた、もう大人なんだからナツミ自身が良ければ構わないよと、あっさりしたものだつた。もつとも、母を亡くして

からの父は、残った家族に対して少しづつ関心を失っていった気がするが。

ともかく、勧める者はいても否定する者は周囲に一人としていなかった。確かに、悪い話ではなかった。モチダに対して胸を焦がするような思いは無かったが、嫌悪する気持ちも生理的な拒否感も無かった。

それでも事が事だ。その時のナツミは人生で最も悩んだと言って過言ではなかったが、「嫌なら別ればいいじゃん？」という親友の一言が答えに繋がった。

「向こうがアンタにお願いしてきたわけで、アンタはまだ向こうにお願いするカードを残しているわけだし」

その親友はまるでゲームのアドバイスのように軽く言い放ったが、その軽快さがかえってナツミの悩みと不安を吹っ切った。

結果として、ナツミの選択は今のところ世間一般的に正解だった。



家庭で仕事の話はほとんどしない。ただモチダはそれなりに有能な役人らしく、復興を急ぐ街の事情もあって毎日多忙を極めているようだが、知り合った頃からの鷹揚で優しい態度は一緒に暮らし始めてからも何一つ変わらなかつた。逆に仮設住宅暮らしでナツミにストレスが溜まつていないか心配してくれるほどである。当然ケンカなど一度も起きていない。老け顔で色白な線の細いモチダだが、体はいたって健康で精神的にもたくましかつたし、適度に明るく茶目っ気があって二人の生活は平凡ながら順風であつた。

火花の散るような熱さではなく、炭火のような温かさを感じさせる人だとナツミは思った。そんな人柄を反映するかのように交友関係も広くて多彩だつた。人脈の豊かさも能力の一つである。モチダは社会人としてまぎれも無く優秀で、絵に描いたような理想的家庭人でもあつた。

二年前の戦争から自分の周りにはドラマチックな出来事が多かつた。

けに、それに慣れてしまったナツミには、今の平々凡々な生活が逆に非現実的なように感じ、わずかな戸惑いが心の片隅にいつもあるのだった。自分自身に直結する二年前と変わった事といえば、歳を取った事、髪が伸びた事、結婚した事くらいだ。しかしどれも劇的な変化とは言い難い。夏に二十六歳になったが歯が生え変わるとか背が伸びるとかあるわけもなく、髪は切るタイミングを失って伸びたもののほとんど誰も気に留めない。自他共に気付く分かりやすい違いは、薬指に付けていた指輪が変わったくらいだろうか。右手から左手へ、安物から高級ブランド品へ。そんな程度だった。

幸せな結婚生活って、こういう事なのかな……？

モチダから贈られたプラチナ製の結婚指輪は、シンプルながら飽きの

こない細かい意匠が刻まれており、装着しての日常作業にも全く支障を及ぼさない値段相応の逸品だった。

贈り物には選者のセンスが如実に表れると言うが、モチダのそれは完璧に近い。派手過ぎず地味過ぎず、装着者を浮かせるのではなく際立たせ、それでいて機能的でもある。首都圏の下町で古くから続く玩具問屋に生まれ育ったモチダには、自然と審美眼が備わったのかもしれない。実感がわからないと言いなながらも、普段の生活の中で指輪を眺める時間が何度となくある事に、かつては婚約指輪を贈られニヤついていた姉の姿を気味悪がっていたナツミは若干の照れ臭さを感じていた。

あの指輪は、もっとゴツゴツして派手な感じだったっけ。

姉がしていた婚約指輪は、姉の恋人であったイージマが誕生日に贈ったもので、新聞記者時代に知り合ったデザイナーに特注させた物だったと聞いていたが、新進気鋭の若手デザイナーが作ったそれは、さながら

ロックバンドのボーカルに似合いそうな中々に奇抜なデザインでもあった。姉ほど浮世離れしていなかったナツミにはイージマのセンスは受け入れ難く、喜ぶ姉の姿は何だかとても奇異に見えた記憶がある。とはいえ、少しずれた姉ハルミにはお似合いだったのだろう。

二人があのまま順調に入籍していたら、どんな家庭を築いていたのか？ 時折ナツミは考える事があった。

ナツミの記憶の中にあるイージマは、どこことなく夫であるモチダと被る。大都会からやってきた余所者で、年頃や背格好、自信に溢れた振る舞いなどは特に似ている気がした。ただ、モチダと違ってイージマの自信には自らの行動を必要以上に誇示する部分があり、それが職業柄なのか生まれながらの性格なのかは、今となっては良く分からなかったが、とりあえずプレゼントのセンスが良くないのは間違いなく、そこは決定的に差があったと思う。

無論、イージマに対して悪意など欠片も無く、人としても決して嫌いなタイプではなかったが、モチダと比べるとやはり何か「劣っている」ような気がしていた。

「ちよつとナツミ、聞いてるの？」

その幸せな結婚を決断させた親友のやや険のある声が、ナツミを引き戻した。

「アンタっていつも話の途中でどっかに飛んじやうのね。旦那もよく怒んないわねー」

「ごめんごめん」

苦笑しながらナツミはエミコに顔を向けた。心なしか最近のエミコは以前にまして攻撃的になった気がする。美容師の彼氏と別れた後、独身

仲間が次々と結婚した辺りからそれが顕著になった。

根が社交家で行動派という事もあり、震災後だろうが恋愛と名のつくものには人一倍力を入れているエミコだが、その精力的活動とは裏腹に、あまり成果は上がっていないようだった。今日も今日とて最近知り合った男の愚痴を言い、ナツミを訪ねてきたのだから。

「山に行きませんか？とか言い出すのよ。ハイキングってやつ？ なんて山なのよ。登ったら降りなきゃいけないじゃない」

ナツミが洗濯物を干し終えて、割り当てられた住居に戻る間もエミコの話は止まらなかった。

「何が美しい景色とおいしい空気よ。アタシは空気よりおいしいお酒が飲みたいわよ。仙人じゃあるまいし」

「山が好きな人なんだねー」

適当に相槌を打ちながら、ふとナツミは山という言葉に気を留め、思

い出したように北の方角を向いた。震災で駅中心部の建物が軒並み倒壊した為、ナツミが住む駅の南側の非難区域からも『クレーター』のある高台がよく見えた。

「そういえば山はうんざりって言ってたっけ……」

『クレーター』のある高台で、守人のように佇む隻腕の男の姿が、ナツミの頭を一瞬よぎった。

(2)

男は時間通りに高台の記念公園管理事務所に現れた。地味めの黒いロングコートに身を包んでいたが、頭にかぶった深緑色の徽章付きベレー

帽と磨き上げられた編み上げの革ブーツのせいで、軍人である事は遠目にも分かった。背丈は中背のシオよりわずかに高い程度だったが、広がっしりとした肩幅と厚みのある肉体が外套越しにも見て取れた。

「よお、まだ生きてたか」

男の大きな丸顔に備わった細い双眸は射るような鋭さをたたえていたが、その言葉には親しみが込められていた。

「しかしあれだな」

いつもの決まり文句で、シオを訪ねてきた軍装の男——アキヤマは口を開いた。

「この辺はまだまだ復旧が遅れてるんだな」

肩口に担いでいた子供一人くらいなら簡単に入りそうな大きなバッグを無造作に床に置き、アキヤマは応接室の窓から見える外の景色に目をやった。



「ずいぶん殺伐としてる」

「いや、この辺りは前から全然変わってないんだ。向こう側の病院が地震の時に火事になっただけで」

ソファアに腰掛けたアキヤマの前に、シオはコーヒーを注いだ紙コップを置いた。

「昔から荒れているんだよ」

「じゃあ、あの崩れた教会みたいなのは？」

紙コップを口元に運びながら、アキヤマは首をひねって窓の向こうに見えるかつての大聖堂を顎で指した。

自分の分のコーヒーを金属製のカップに入れながら、

「あれも元からああいうデザインなんだよ」

と、シオは皮肉っぽい笑みを浮かべながら返し、それが過去の軍用機墜落事故による犠牲者への慰霊塔である事とその建立に至るまでの経緯を

簡潔に説明すると、ふん、と鼻を鳴らし、コーヒを啜りながらアキヤマは眉間にしわを寄せた。

「あれだな、慰霊碑というものをゲージツ家なんぞに造らせるのがそもそも間違いだな。連中は一瞬の中にしか生きてないからな。墓石に必要なのは不変性だ。頭の良いはずのお役人様には、そんな事も分からないのかね」

「さあな」

口元をほころばせながら、シオは適当な相槌をうった。昔と変わらぬアキヤマの口の悪さが懐かしさを感じさせた。

国防軍東部方面隊第十二旅団第十三歩兵連隊の基地は、首都圏からわずかに外れた四方を山に囲まれた山間都市の郊外にあった。千人近い人間が働くその基地には本部管理中隊の他に三つの中隊が駐屯していて、かつてシオはその第一中隊第一小銃小隊に所属し、第二分隊員として

二年余りの軍隊生活を送った。愛国精神に燃えて、ではなく、単純に生活に困って入隊したのだが、その時タコ部屋と呼ばれた営舎の四人部屋で寝食を共にした同じ分隊仲間の一人が、アキヤマだった。

軍事機密から噂話まであらゆる情報に精通していると恐れられた古参の分隊長エビス、赤字で所属団体が潰れた元プロレスラーのサカイ、ケツ持ちのギャングの女に手を出して逃げてきた元ホストの色男タカクラ、将来を誓い合った教え子に裏切られ自暴自棄になって世を捨てた元高校教師のフジ、拳銃より大きな武器を撃ちたくて転職した元警官のオキタ、犬を虐待する飼い主を怒りのあまり半殺しにして職を失った元トリマーのアキヤマ――。

シオと共に教導師団から配属された同期以外は、よくもまあこれだけ揃えた后感心するほどの曲者ぞろいの分隊であり、二年の間にはその多彩な個性派集団故に数え切れないほどの衝突があった。だが、その衝突

があつたからこそなのか、あの連隊史のみならず国の歴史にも刻まれた「高地事件」を経験し死線を越えた仲間だからなのか、彼らは分隊が再編成され各人が転属したりシオのような除隊者が出た後も、互いに連絡を取り合い交遊を続けていた。

今日も伍長昇任試験の為に東部方面隊の教導師団で研修を受ける事になったアキヤマが、事前にシオに連絡を寄越して都合を聞き、予定より一日早く基地を出て寄り道してきたのである。

「おう、そうだ。頼まれてた物だけど、これでいいか？」

紙コップをテーブルに置き、アキヤマはバッグを開けて紙袋を取り出した。

「確認してくれや」

すまない、と断りを入れながらシオはテーブルに置かれた紙袋の口を開け、中を覗いた。

「オマエが選んだにしては良いセンスだな。助かったよ、ありがとう」

袋の中身を確認しながらシオは言った。

「PX（基地内売店）で売ってる物にセンスもクソもあるかよ。どれも一緒だろ。だいたい何でそんな物必要なんだよ？」

ベレー帽を脱ぎ、短く刈り込まれた頭を掻きながらアキヤマが尋ねたが、シオは微笑んだだけで答えず、紙袋の口閉じるとソファアの端に静かに置いた。

「まだ時間あるだろ？ 少し歩かないか？」

街の中心部から少し離れた小高い丘の上の不自然に窪んだただっ広い地面。そこを人々は『クレーター』と呼んだ。

かつて国防軍の大型輸送機墜落事故により高台に穿たれた『クレーター』は、事故後、辛うじて骨組みと僅かなコンクリートの外壁だけが残った教会の脇には事故で亡くなった犠牲者の慰霊碑が建てられたが、市から依頼を受けて慰霊碑とその周辺施設を設計した外国の高名な建築家の思惑は、死者への誠実なる鎮魂という謳い文句とは裏腹に完成すると派手な夜間のライトアップによって滑稽であまりに場違い過ぎる雰囲気を作り出し、そこはまるで悲劇の現場というよりも恋人たちのデートスポットに相応しかった。

当時の市長は市民やオンブズマンのみならず他都市の首長からも税金の無駄遣いだと不評を買い、急遽慰霊碑とは反対側に記念病院と記念公園を設立してバランスを保とうとしたが、最新設備を備えた病院にはそれに見合うだけの医師が集まらず、静寂と自然の豊かさをうたった公園は手入れが行き届かず廃墟のように静まり返る無用の長物と化し、ほど

なく市長はその完成を市長として見る事無く選挙に敗れて交代した。今からもう十年近く昔の話である。

比較的穏やかな冬の日の午後。『クレーター』を周回する閑散とした遊歩道を歩きながら、シオとアキヤマはお互いの近況を話した。

いつの間にか兵長として良好な成績を作って選抜試験を通り伍長候補として本格的に軍人としての道を歩むアキヤマに対し、シオの方は不穏な空気が流れていた。勤務する記念公園管理事務所の閉鎖話が出ているせいだ。

もともと地方官僚の天下り先として設立された施設管理公社隷下の職場である。記念公園と大層な銘を打っているものの事務所の職員はシオを含めて四人だけ、運動公園のように体育館やグラウンドのようなスポーツ施設を設置しているわけでもなく、舞台やコンサートといった芸術活動を行える建物も無かった。有るのは今や市民のほとんど誰も足を運

ばない悲劇の慰霊碑と、『クレーター』を囲む全長約三キロメートルの遊歩道だけだ。さらに現在は震災で負傷した所長が長期入院中で不在な上、シオ以外の職員は人手の足りない別の事業所へ出向しており、事務所を預かっているのはシオ一人だけであった。

それでも業務に差し障りは無かったし、だいたい業務自体が元から無のような職場なのである。ただでさえ速やかな都市の復旧を市だけでなく国を挙げて取り組んでいる時に、利益の出ぬどころか万年赤字の無駄な公園事務所など取り潰されても何ら不思議ではなかった。

実際一ヶ月に一度は公社から視察にやってくる幹部職員から、シオは異動の可能性を最近よく示唆されていた。

「クビになる事はないだろうけど、次はどこに流れていくのやら、という感じだよ」

自嘲気味に笑って紫煙を吐き出し、シオは『クレーター』が見渡せる



ベンチ横の灰皿に煙草を捨てた。

「食い扶持と寝床さえあれば贅沢は言わないけどさ」

震災で住んでいた安アパートが倒壊してしまった為、シオは管理事務所に寝泊りしていた。事務所には宿直用の狭い四畳半が備えられており、シャワー室と給湯室があったので生活するのに問題なかった。元々週末は交替で職員一人が宿直する事になっていたし、常駐していたところでそれを咎める者はいなかった。

「まあ、こんなご時世だ。なるようにしかならないだろうけど」

話が途切れ、沈黙が流れる。しばらくして、静寂をさえぎるようにアキヤマの腕時計のアラームが短く鳴った。

「時間、大丈夫か？」

それを合図に、シオも胸ポケットの携帯電話を取り出して時刻を確認した。

「ああ、そろそろ行くよ」

黙って煙草を吸い続けていたアキヤマは腕時計を見やり、大きく息を吐き出した。

「次に会う時は分隊指揮官殿だな」

鹿爪らしい表情を作って姿勢を正すと、おどけ気味にシオは左手で敬礼をした。

「アキヤマ分隊長殿！」

「よせよ、ガラでもねえ」

アキヤマは苦笑しながら小さくかぶりを振ったが、満更でもない口ぶりだった。立場が人を作るとは言うが、アキヤマの場合は元から組織人としての素養があつたのだろう。粗野を装いつつ、要領よく頭を働かせ抜けば目無く動く事ができた。裏表が無く厭世的なシオとは性格の本質から違つた。似ても似つかぬ、傍から見れば相容れぬはずの両者であつ

だが、寝食と厳しい訓練を共にし戦地という特殊な環境において互いの命を文字通り預けあつてきた経験が、すり合わせるように積み重ねてきた信頼が、一般論的な相性の良し悪しを超越した強固な関係を構築していた。

そしてそれは孤独で先行きも不安なシオにとって、無骨ながら心地よい安堵を与えてくれる唯一の寄る辺のようなものだった。

人気の無い遊歩道を、事務所へ引き返すべく二人は歩き出した。互いに無言だったが、計ったような同じ歩調が、二人の友情の証であるかのように見えた。

「体に気をつけて」

「お互いにな」

「わざわざすまなかった」

「何を言つてやがる」

別れ際、向かい合った二人の間に、再び短い沈黙が流れ、どちらからともなく互いの左手を差し出した。

「暖かくなったら、あいつの墓参りに行こうぜ」

「……そうだな」

一拍遅れて、シオは答えた。脳裏に、懐かしい、今はもう会うことの出来ない、ここの風景に良く似た異国の地に散った戦友の顔が浮かんだ。

公園の出入り口までアキヤマを見送った後、シオは「そういえば」と小さく呟いて顔だけ振り返り、視線を遊歩道とクレーターを隔てる柵の遠くへと飛ばした。その先、傾き始めた太陽の下に、まだらに煤けた記念病院だった建物が見えた。

「今日はあっちの墓参りは忘れてたな」

(3)

年の瀬も押し迫った十二月の最終週。かつて記念病院と呼ばれていた建物の前で、シオとナツミは久しぶりに顔を会わせた。数日前に行われた慰霊祭には二人とも参列していたが、シオは主催側の職員として忙しく、ナツミは途中で退席した為、お互い姿は見かけたがろくに挨拶も出来なかつた。

「結婚おめでとう」

シオが開口一番に言った祝辞に、ナツミは少し面食らった。結婚した事はシオに伝えていなかったからだ。もつとも式すら挙げていないし、知らせた人の方が少なかつたのだが。

「何で知ってるの？ 誰かに聞いた？」

上目遣いにシオを見やるナツミの声に、怪しむような気配が混じった。しかし、シオは聞こえていないかのような様子で身を返し、

「ちよつと時間ある？ 渡したい物があつて」

と遊歩道をゆつくり歩き出す。ナツミは口を尖らせ一つため息をつく、その背中を追った。

傍から見れば怪しい事この上ない言葉と行動に見えたが、シオがナツミの問いかけに対しマトモに答えないのは昔からだ。そうかと思えば突然話をし出す事もある。その変わらないマイペースぶりに、ナツミの警戒心は逆に薄れた。同時に、シオに対して警戒心を持った自分自身に、微かな嫌悪感を感じた。もう十年近い付き合いになるのに。

「取ってくるから、ちよつと待ってて」

病院跡と管理事務所のちようど中間に位置する東屋に差し掛かると、

シオは東屋のベンチを指差しナツミが口を開く前に歩き去った。

「もう……」

小さく呟くとナツミは東屋に入りベンチに腰を下ろした。微かにキンモクセイの香りが鼻をつく。眼前に『クレーター』が広がり、真正面に厚い曇り空の下に建つ不恰好な記念塔が見えた。一瞬吹き抜けた寒風に、ナツミは小さく身を震わせたが、それは寒気のせいばかりではなかった。

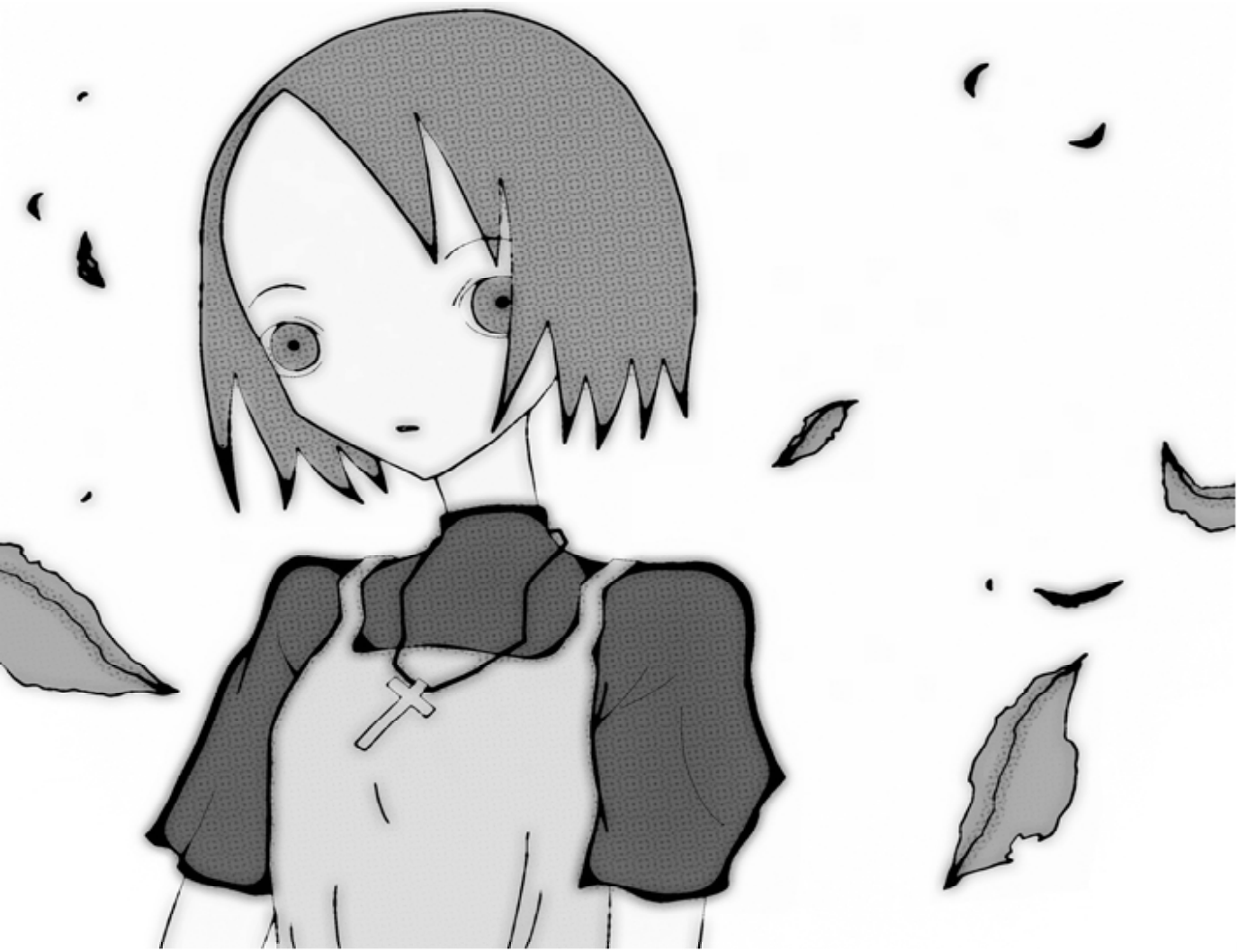
「やな天気」

赤い毛糸のマフラーに顎を埋め、ナツミは視線を伏せた。

一年前の震災で、ナツミは姉のハルミを亡くした。地震によつて記念病院地下から火災が発生し、ハルミはその犠牲になったのだ。姉だけでなく、入院中の患者の多くが亡くなつたと聞いている。大きな病院ゆえに火災対策も万全であつたはずなのだが、上手く作動しなかつたと聞く。それに、患者数に対する慢性的な病院職員の圧倒的不足と、高台という

郊外の立地が被害を広げてしま  
った。二年前、ジャーナリスト  
として戦地へ取材に出かけたま  
ま行方知らずとなつた婚約者イ  
ージマの後を追うかのように起  
こした自殺未遂の事故によつて  
下半身の自由が利かなかつた姉  
は、逃げ遅れて命を落としたの  
だつた。

震災、そして肉親の死、たて  
続いた悲報にナツミの心は一時  
千千に乱れた。ナツミだけでは  
なく多くの者が同じであつた





が、不幸である者が百人だろうと千人だろうと、一人一人の持つ悲しみの深さが軽くなるわけではない。悲しみは他者と同調する事で薄らぐ事はあつても、それは本質を誤魔化しているに過ぎないからだ。ただ、ナツミの心の中には悲しみと同時に姉から解放されたという気持ちが無かつたわけでもない。

ナツミとハルミ、決して仲の悪い姉妹ではなかつたが、性格はだいぶ違つていた。生まれつき体の弱かつたハルミは初子である事もあつて過保護に育てられ、おっとりとして依存心の強い気質だつた。特に父親からの愛情を深く受けすぎたからなのか、異性への甘えた態度は幼少時から少なくないトラブルを呼んだこともあつたが、それすらもいつの間にかうやむやの内に流してしまふ、どこか超然とした雰囲気を持つていた。ハルミをしつけ間違えたと感じた母親によつて比較的厳しく育てられたナツミには、そんな姉は軽い憧れであると同時に若干うつつとおしい存在

でもあった。そしてそれは年齢と共に姉妹の間にあらゆる面での差異が生じてくると、少しづつ、確実に、古い葡萄酒の底に溜まる澱のような感じで、ナツミの心の中に感情の濁りとして沈殿していった。

だからなのか、かつて姉が気に入っていたこの公園が、記念病院からほど近い『クレーター』を見渡せるこの東屋が、ナツミはあまり好きではなかった。いや、好きではなくなっていた。自分の体に付けられた醜い傷跡を、鏡で凝視させられるかのように感じる場所だったから。

患者と職員の多くを失い、記念病院は建て壊しが決定され、慰霊碑が建立された。「この場所は、もはや公園ではなく霊園のようだ」と慰霊祭に参列していた誰かが呟いた言葉が、ナツミには忘れられなかった。

だとしたら、シオは管理人というより墓守ね。ナツミよりも一才若いのに、シオはナツミの夫モチダよりもずっと老けた印象があった。白髪まじりの頭と、顔の右側に戦争によって刻まれた細かい傷跡が老人の皺

のように見えた。人間が死に絶えた地球で墓穴を掘り続けるアンドロイドの映画を、ナツミはふと思い出した。

渡したい物つて、まさか姉の遺品を見つけたんじゃない？…。

補強は入っているとはいえ立ち入り禁止になっている危険な建物内をシオが探索したとは思えないが、瞬間ナツミの脳裏に姉の死に顔が浮かんだ。煙に巻かれたことによる中毒死だったため目立った外傷は無く、煤や汚れを綺麗に拭われ死に化粧を施されたハルミの白い顔は眠っているかのようにだった。

目を瞑ったまま強くかぶりを振り、ナツミは映像を追い払った。そこにシオが戻ってきた。

「研修でこつちの方に寄った昔の仲間を買ってきてもらってたんだけど。PXで売っている物だから、地味だけど丈夫だよ、たぶん」

飾り気の無い紙のバッグをシオはナツミに差し出し、ナツミの左側に

少しを距離を置いて座った。

「包装とかそういうのは出来なくて、申し訳ないけど」

その言葉に一瞬バッグを受け取ったナツミはためらいながらも無言でシオの横顔をうかがったが、そこにはとぼけたような疲れたようないつもの雰囲気以外の表情は見つからなかった。

自分の思い過ぎしかな。意を決するように軽く息を吐き出し、しかしナツミは恐る恐る紙袋の口を開けた。

そこには、緑色の小さな角ばったショルダー紐付きのポーチが入っていた。

「小物入れ？」

ポーチを取り出し、さらにごついボタンを外してそれを開けてみる。かなり堅い芯が入っていて、材質は厚くざらついた肌触りをしており、中は空っぽだった。

「撥水ナイロンだから、雨に濡れても平気だよ」

言われてよく見ると、確かに上部のサイドに外からの侵入を防ぐ小さなカバーが付いていた。

「野戦用に使う物だから、そんな色しか無いんだけどさ」

どこか言い訳めいたようにシオは呟き、煙草を一本啜えて火を点けた。

「あ、ありがとう」

ナツミは少し拍子抜けした気持ちだった。同時に、先ほどからシオに對して変な緊張感を抱いていた自分が恥ずかしくなり、笑いながら後ろ手で頭を掻いた。

「今日も寒いね」

「雪が降らない地方で良かったよ」

「仲間って兵隊さん？」

「軍隊つてのは決して倒産しない会社だね」

「シオはお正月のお休みはどうするの？」

「年越しって何で世界中で祝うのかな？」

とりとめの無い、噛み合わない会話。でもそこには懐かしさが漂っていた。周りが、景色も他者も何より自分自身すらも変わっていく中で、シオだけは10年前から一緒だった。その不変さが、ナツミにとってはある種の安心の指標のように感じていた。もしかしたら、優越感だったのかもしれないが。

「もう、シオはここの主だね」

冗談めかしてナツミは言った。『クレーター』といい電気の点かない外灯といい壊れた病院といい荒れた歩道といい、この場所は昔観た戦争映画に出てきた街のように思え、それゆえに元兵士であつたシオの姿が

映えるのかもしれないとナツミは思った。多くの人にとって憂鬱な場所でも、シオにとっては軍隊時代の懐かしさを感じさせる快適な居場所なのかも。それはそれで幸せなんだろう。ナツミには理解できないし、したいとも思わなかったが。

「所長さんになったらもう少し花壇増やしてね」

「それは来年度以降に役所に言つて。たぶん都市整備課あたりがやつてくれると思うよ」

どこか他人事のような口ぶりのシオに、恐らく初めて問いかけにマトモに答えた事に、ナツミは思わず「えっ？」と声が出た。

「ここは……、今年度いっぱい管理事務所は閉鎖になるんだ。前から話は出ていたけれど、先日の慰霊祭の時に公社のお偉いさんから正式に伝えられた。まだ辞令は受けてないけど、出向している他の職員はそこで正式採用になって、オレもどっか他の職場に行くみたいだ」

「そう、なんだ……」

この人はここで朽ちていくのだ。ゆつくりと。寂れていく公園と共に、いつか一体化して。

そんな事を考えていた矢先のシオの話に、ナツミはわずかに動揺した。そこには自分のココロを見透かされていたような気まずさと、シオがいなくなってしまう不安のようなものが交じり合っていた。

それきり、話は途切れた。シオは煙草を吹かし、ナツミはクレーターに延びる東屋の薄い影を見つめていた。厚い雲越しに、二人の背後に太陽がゆつくりとした速度で沈み始めた。

「そろそろ日が暮れるよ。この辺り、まだ明かりが点かないから」

ベンチから腰を浮かし、シオは天井の蜘蛛の巣がかかった蛍光灯を見上げた。

「……そうだね。帰ってご飯の支度しなくちゃ」



いつの間にか握り締めていたプレゼントの紙袋をトートバッグの中にしまいながら、ナツミも立ち上がった。

「お祝い、ありがとう」

ナツミの謝意に、シオは口の片端を僅かに上げる。一見すれば皮肉っぽい微笑み。でも二人にとってはいつもの挨拶だった。

二段だけの東屋の低い階段を、ナツミは「えいつ」と声を出しながら飛び降りた。枯葉の潰れる音とトートバッグの中の物が擦れる金属音と共に、背後でシオが小さく笑う声が聞こえた気がした。

「さよなら」

「気をつけて」

ナツミは南西に、シオは南東に、ほとんど同時に歩き出す。

「ねえ」

急ぎ足で二、三步進んだナツミが不意に歩を止めた。ゆっくりとした

動作でシオの足が止まる。背を向けたまま、ナツミは眩いた。

「私ね、シオのこと好きだったんだ」

厚く重そうな雲がぼやけた太陽にかかり、また少し、冷たい風が東屋を吹きぬけ足元の枯葉を追いたてた。

「そう……」

舞っていく枯葉の重なり合う寂しげな音と重なるように、シオの聲がナツミの背中に届く。散りかけたボタンの花卉が微かに揺れていた。

「オレも、たぶん同じだったと思う」

始まりがあつて、終わりがある。始めるために終わらせる必要があり、終わらせるために始める必要もある。その必要さを、いつしか二人は理解できるようになっていた。ときに残酷であるからこそ、出来うる限りの誠意を持って答えようとする矛盾にも似た優しさを、シオとナツミは持てる人間になっていた。

「元気で……。お幸せに」

静かだが、はつきりとした口調でシオは言った。クレーターを一瞥し、ゆつたりと、それでいて確固たる足取りで去っていく。ナツミはその足音を確かめるように耳を澄ませていた。

「元気で」という言葉が、二人の間にだけあつた親しさへの決別のようにナツミは感じた。いまこの瞬間、完全に他人となつたのだ。この先死ぬまでずっとこの街に暮らし続けたとしても、もう二度とここにやってくる事は無いだろう。そして、シオに会う事も無いだろう。そんな気がした。

ふつと息を吐き出しナツミはコートの前をかき合わせ歩き出したが、突風と共に舞ってきた砂埃を浴び、目を瞑って顔を伏せて立ち止まった。風がおさまりわずかに薄目を開くと、視線の先に、クレーターは消え、飽きるほど眺めてきた赤茶けた凸凹の大地ではなく、優しい風に揺れる

緑の芝生が広がっていた。彼方に見える教会の大聖堂の白い壁が陽光を反射して輝き、鳴り響く鐘の音が届いてきた。白銀色のウエディングドレスに身を包んだ姉と純白のスーツを着たイージマさんが、ライスシャワーを浴びながら互いの手を携えて人の輪の中を歩いている。はやし立てる群衆の中に、父と母、従姉妹のアキコちゃん、セイコさんとタイチくん、キミちゃんとエミちゃん、多くの見知った人たちと、多くの見知らぬ人たちがいた。

視線が合い、ハルミが右手にブーケを抱えたままナツミの方に左腕を大きく振った。ティアラの下の小さな顔が、大きく口を開けてナツミの名を呼んでいる。遠く離れているはずなのに、その風景は鮮明に見えた。鷹揚に小さく頷いてナツミが姉に微笑むと、ハルミはブーケをふわりと投げた。

白いブーケはふわふわと揺れながら天に上っていき、やがて白い雲の

中に消えていった。

「はじまりのおわり、おわりのはじまり」

了



## 羊水奇談

こみやま蘭子

お昼前に、お義姉さんが訪ねてきた。おそうめんを茹でて一緒に食べることになった。すり鉢状のガラスの器に氷を浮かべて、その中で麺をかき混ぜながら

「この、透明でするするっと泳いでる感じ、なんか綺麗ですよね」

と言うと、お義姉さんは「へえ」と興味なさそうに相槌を打ち、すぐに、「そうだ、忘れてた」

と立ち上がった。持ってきた紙袋をこそごそして、

「この前ね、ランジェリーショップに寄ったらこういうの見つけたから  
…これから暑くなるからね、横の方がメッシュになっていて通気性がいいみたいだから」

と、ガードルタイプの腹帯を三枚手渡してくれた。私はそれまで腹巻タイプの比較的厚いものを使っていたので、素直に喜んだ。けれども、お義姉さんと長い時間話すのはいつも少し疲れる。決して、嫌いではないのだけだ。

お義姉さんが帰ると、キッチンに汚れた食器を放置したまま、寝室に行った。せり出してきた腹に軽く手を添えて、ベッドに横になった。時計は午後三時をさしていた。マットレスの感触を探りながら何度も寝返りを打っていると、

「りっちゃん、クジラみたい」



と、カンナがケラケラ笑った。

「クジラ？」

「ゆったり海の中を泳ぐ感じ。いい感じよ」

「クジラはやめてよ。人魚とか、せめてイルカとか」

蒼く深く、音のない海底をゆっくり進むクジラ。「まあ、なんとなく悪いイメージではないね」と言いながら振り返ると、もうカンナはいなかった。目を閉じて、昼下りの軽い眠気に身を任せた。

カンナが現れたのは、病院で妊娠を告げられた日だった。

彼女は、十六年も前に死んでしまった同級生。まだあどけない十代の面影のままふいに現れたその姿は、不思議と恐怖も違和感も運んでこなかった。

夫の敬介に話したところで、まさかと笑われるか、心配して大袈裟に騒ぎ立てるかのどちらかだと思ったので、ずっと黙っている。

子宮内膜症で十代の頃からきつい思いをしてきた私にとって、結婚十年目の妊娠は奇跡だった。治療に通っているいろいろな手を尽くしたが、何度も失敗した。最近では、親戚や友人たちも腫れ物に触るように子供のことは口にしなくなっていたし、夫婦二人だけの人生も悪くないよと、お経でも唱えるように自らに言い聞かせ、焦燥や絶望を薄めて、沈めて、息を殺すように暮らしていた。だから、「おめでとうございます」という医師の言葉は、闇を破る一本の矢のように胸を貫き、私たち夫婦は狂喜した。

その夜、長いバスタブに横たわって目を閉じていると、

「よかったね」

と、女の声がした。目を開くと、カナナが風呂の椅子にちよこんと座って笑っていた。ゴクツと唾を飲み込んで、おそるおそる話しかけた。

「幽霊？」

「うん、そんな感じ」

私にはカンナに化けて出られる理由は思い当たらなかった。そもそも、何年も記憶の隅に押しやられてほとんど思い出すこともなかった彼女が、どうして今になってここにやってきたのか、見当もつかない。祈り続けたことがやっと叶った、その喜びが私に幻を見せているのか。

車は敬介が通勤に使うので、昼間の移動はもっぱら徒歩とバスだ。定期健診のため、バスで二十分ほど揺られた。ラッシュ時を過ぎると人はまばらで必ず座れるから、毎回十時を回ってから家を出る。市内で一番大きな総合病院。その中にある産婦人科。ここは不妊治療にも定評があったので、もう何年もお世話になっていた。診察台に横になり、先生の説明を聞きながら調音波エコーで赤ちゃんの姿を見る。ドラえもんみたいな影がびよこびよこ動いていた。血圧は正常で、尿淡白も糖もマイナ

ス、浮腫もなし。

「順調です」

検診を終えると、同じ病院の中にある五階の病棟に足を運んだ。

ナースステーションを真中に、左が男性の病棟、右が女性ばかり。その一番奥にある四人部屋の右窓際が、私の母のベッドだった。他の患者さんたちに軽く会釈し奥に進むと、母はベッドを起こして週刊誌を読んでいた。見舞いに行くとじっと横たわっていることがほとんどだったから、今日はずいぶん楽なようだ。私に気がつくのと、細い老眼鏡の上からこちらをチラツと見て、すぐにまた目を落とした。

「今日は気分いいのね」

と言うと、それには答えず、

「そっちは順調？」

「うん、今二十四週だから、だいたい六カ月ぐらい。エコーではつきり

姿がわかるよ」

そう言いながら、丸椅子を引き寄せて座った。

「ああ、髪の毛染めたい」

と、週刊誌を閉じながら、母はいまいましそうに顔をしかめた。枕元にあつた手鏡を手に取り、

「見てよ、白髪がこんなに目立ってる」

「しょうがないじゃん、病気なんだから」

「うるさい。あんたにはわかんないよ」

若い時分から派手好きで、年取ってもいつも自分を飾り立てるのが好きだった母にとって、鏡に映し出される白髪でノーメイクの顔は耐えられないらしい。入院直後も、毎朝念入りにお化粧していたので、看護士さんにひどく叱られたらしい。せめてもの抵抗か、足の短い爪にペディキュアだけはしつかり塗っていた。

「あたしをお棺に入れるときは、ちゃあんとお化粧してよね」

「嫌あね、そんなこと言わないでよ」

「遠いことじゃないよ。だいたい、あと三ヶ月ぐらいの話じゃないか」  
そこで初めて私のお腹に目をやり、

「あんたには会えないかもね」

と、笑って見せた。

妊娠したことは嬉しい。でも、この母親を見ていると、果たして自分がちゃんとした親になれるのかどうか、不安もあった。それは低く這う霧のように、子供を授かった喜びを侵食していく気がした。

母は、父が亡くなった後、若い男を作って姿をくらましていた。私がまだ十代の頃だった。父の保険金で、私はなんとか大学まで行くことができたが、母は何年も音信不通で、再会したのは三年前のことだった。

粗末な身なりで、手には大きなポストンパック一つだけ。眼光だけは昔のまま、言葉も態度も気丈で高慢だった。私に謝ることはなかったし、寂しいともつらいとも言わなかった。私も、許さないとは言わなかった。かといって、一緒に暮らそうとは、口が裂けても言いたくなかった。やがて、母は私たち夫婦のマンションから二駅ほど離れた町で一人暮らしを始めた。さすがに、故郷に帰るほどの凶太さはなかったらしい。祖父母はもう他界し、地元に頼れる知り合いなど一人もいなかったのだから。

二カ月ほど前、胃と肝臓にガンが見つかり余命半年と言われた。

手の施しようがない：という状態だったので、延命治療はせずに、ただ鎮痛剤だけを投与していた。誰より本人がそれを望んだ。そうやって「待っている」のだ。その日が来るのを、静かに待っているだけなのだ。

「お母さん、昔から変わらないねえ」

と、カンナは笑いながら私の横に座った。

病院の中庭にあるベンチに腰掛けていた。木陰で風通しが良く、青々とした芝生が綺麗でとても和むから、帰りにはいつもこの場所に来ていろいろ眺めている。

「カンナ、昔、会ったことあったっけ？」

「一回だけ見たことある。卒業式に来てたじゃん。やったら派手で目立っていた」

「ああ、そうだったね」

それまで授業参観や親子面談の類には一度も顔を出したことの無い母が卒業式に勇んで出かけてきたのは、卒業間際になって担任の武藤先生が若くてかつこいいと聞きつけたからだだった。

「武藤に擦り寄って、嫌な顔されてた」

私は当時の自分に舞い戻って、吐き気を覚えた。母が失踪したのは、



その十日ほど後だった。

そして、カンナが死んだのはその一年半後だ。

「あたしは武藤なんて、全然好みじゃなかったけど」

カンナは茶色い毛に指を通しながら、けだるくつぶやいた。と、突然、

「あ！」

お腹の中で、何かもごもごと動く気配がはつきりと感じられ、私は小さく声を挙げた。

「今動いた。こんなにはつきり感じたの初めて！」

私が声を弾ませて言うと、

「ああそうだよね、それってすごく嬉しいんだよね」

と、カンナは私の腹に顔を近づけた。

「男の子だったら、面白いよね」

「なんで？」

「だって、自分の身体の中にオチンチンがあるんだよ」

「あはは」

私が笑うと、カンナは出っ張ったお腹に頬擦りして、

「心配しなくても、きつと男の子だよ」

と、ささやいた。

女の子は欲しくないという気持ちを、見透かされた気がした。仕方ないか、相手はカンナだもの。

男の子だったら、私に似る確率も少しは低くなる気がしたから。子供は敬介に似てほしい。太陽に向かう向日葵のようにまっすぐに育ってほしい。有名でも裕福でもなく特別なことは何もないけれど、家族の愛情を一身に受け、いつも笑っていられる暮らし。敬介に似てほしいのは、性格とか顔立ちとか言った表面的なものじゃなくって、人生の歩き方とか、生き様とか、そういう感触で貫かれるもの。人間の命がいろんな場

面で向かう「傾向」のようなもの。本人の意思とは無関係に、環境や条件に左右される、自分ではどうしようもない悪い導き、どうかこの子には、訪れませんかのように。私が味わった、体の芯にまとわりつくような重苦しい鎖は、どうかこの子には受け継がれませんように。

ふつと、母の顔がよぎる。若い頃の、美しいけれど、派手で下品で、私をひどくぶち、罵ることでストレス解消していたような鬼婆の表情。

そして、これからの私も、なのだ。あれを受け継いではならない。死んでも。自らを脅迫するように、心にナイフを突き立てて繰り返し返すようになっていた。

敬介が休みの日には、二人で必ず甘いものを食べに行く。つわりが治まったあと、とにかく毎日毎日甘いものが食べたくて仕方なかった。あんなこでもクリームでもいい。器から零れ落ちそうなほどたっぷりと盛り

上がっていて、少しでも舐めると頭の芯がズキズキするほどの甘ったるいスイーツが、食べたくてたまらないのだった。

「お義姉さんがね、正平くんを妊娠していたときすごく甘いものが食べたかったって。だから、うちも男の子じゃないのって」

駅裏にある老舗のパラーでメニューを見ながら言うと、敬介も、

「ふうん。そういうことってあるんだなあ。妊婦はすっぱいものが好き…って、思い込んでた」

と笑った。

「でも本当は控えないとダメなんだよね、妊娠糖尿病とかになったら、たまんないもん」

そう言いながら、チョコレートとバナナのパフエを頼もうと決める。

「羊水が水飴みたいになっちゃうぞ」

と、敬介は笑いながら、メニューをひったくった。

敬介は、子供ができたとわかってひとしきり喜んだあとは、妊娠によって少しずつ現れる私の変化を楽しんでいるようだった。つわりは、吐き気だけではなく、異常な眠気ももたらすと知ったときは、とても面白かった。

「ドラマとかでき、女が食事中に『うつ』とか言って席を立って行って、台所でゲエゲエやるのをみて、男が『おまえ…まさか子供が…』とかあるじゃん。食事中にいきなり箸持ったままグウグウ眠り始めたのを見て、『まさか』とかやればいいのに。おもしれえ。すんげえリアルだけど、間抜けだよ、絵にならないよなあ」と、一人で盛り上がっていた。

そんな敬介が、好きだ。

敬介も注文して少し落ち着いた頃、一人の女性が声をかけてきた。

「あの…りっちゃんじゃない？」

一瞬わからなかったが、すぐにそれが高校時代に同じクラスだった涼子だと気づいた。

「わお、お久しぶり」

私がこんな時あげる声は、意外と低い。でも、手をつかんだりして目を細めたりして、こみあげる感嘆を静かに伝える。

涼子は家族と来ていた。だんなさんと小学校低学年といった年頃の女の子一人。近くのマンションに住んでいると言う。

そこまで話すと、敬介が頼んだ抹茶ミルクフロートが運ばれてきた。爽やかな緑色のシェイクに、バニラと抹茶のアイスが二つ乗っかっている。バニラアイスの上には抹茶の粉が、抹茶アイスの上には練乳がふりかけられていて、ストローもソーサーも濃いグリーンに統一されている。美味しそうだ。こっちにすればよかった、と思う。

パーラーを出ると、涼子から「ちよつとうちにおいでよ」としつこく誘われた。最初はしぶつたが、考えてみればこのあと大した用があるわけでもないし、ひまつぶしにいいかと思つて、行くことにした。敬介は（観たいテレビがあるらしく）先に帰り、涼子の旦那さんも本屋に行くからと途中で分かれた。

涼子のマンションには歩いて五分ほどで着いた。入り組んだ複雑な佇まいで、茶色いタイルが張り巡らしてあり、オートロック。天気が良いのに、ベランダに布団など干している部屋は一つもなく、いたるところに緑があふれていて：いかにもという感じだった。

「駅にも近いし、いいとこだねえ」

と、言つた。あたりさわりのない言葉だ。パーラーでも歩く道すがらも、あたりさわりのないうわべだけの会話。お互い、大切なことは、もつと落ち着いてからじっくり語り合おうと、手薬煉ひいているように。自分

でも、それが楽しいのかつまらないのか判断しかねる。久しぶりに会ったクラスメイトなんて互いにそんなものかもしれない。ビジネスの相手じゃあるまいし、もっと二人してキヤアキヤアはしゃげばいいのに、と思いつながら、あきらめでも悲観でもなく、そういうことが肌でわかる年になったのだと思う。

落ち着いて、リビングで向き合い、お互いの近況を報告し合うと、そのあとはおきまりのパターン、私の知らないたくさんの同級生の話を聞かされた。たっちゃんが離婚したとか、夕子が国連に勤めているとか、田上さんが乳がんになって手術を受けたとか。最初は興味深く聞いていたが、途中からどうでもよくなって生返事ばかりしていた。こういった調子で、私が不妊治療をしまくり結婚十年目でやっと子供を授かったという話も、どこかで嬉々と語られるんだろうなと思うと、ちよつと苦々しく思った。



そんな流れの中で、涼子の口から、カンナの名前が出た。

カンナは、十八歳で妊娠して、結婚した。相手は隣町に住む二つ年上の先輩だった。

彼女と私は、高校時代三年間同じクラスになったことはなく、共通の友人を介して知り合い、学校帰りに二度ほど食事した：という程度のつきあいだった。彼女は先生から目をつけられているグループの一人で、髪を染めたり制服の丈をいじったりという典型的な不良女子高生だった。ある日、昼休みにカンナと廊下で出くわしたとき、彼女の方からこやかに近づいてきて、

「ねえ、一緒に来る？」

と、声をかけてきた。

「どこに行くの？」

「これ」

カンナは指をVサインのように二本立ててみせた。タバコのことだった。

「ああ、ごめん。私吸わないんだ」と、低く笑った。

私も少しとんがった言動や行動で先生たちに反発はすることはあつたが、カンナたちのグループに比べると可愛いものだった。タバコを吸ったり、男の子と遊び呆けて学校をすっぽかしたりする度胸なんてなかった。それに、定期試験や補修授業は欠かさず受け、大学受験にだってちやっかり臨む気でいたのだから。

「え、そうなんだ」

と、カンナは目を丸くした。そして、

「勘違いして、ごめんね」

と、神妙な表情になった。

「いいよ。こつちこそ、なんかごめん」

「ううん、変なこと言っつて、ほんとごめん」

彼女は何度も謝った。

それから、廊下で会えば必ず微笑みかけてきて、

「この前はごめんね。いつかまたご飯でも行こうね」

と、明るい調子で言った。

私を「自分とは別の人種だ」と興ざめしたり、サツと線を引いて他人行儀になったりという感じは全くなかった。私が告げ口するような子ではないと、信用しているのもわかった。

けれども、ただそれだけだった。それだけの交流で、他に彼女との印象的な想い出はない。

彼女が高校卒業後すぐに結婚したという話には、大して驚きもしな

った。よくあることだと流した。何より自分の周辺が慌しく、それどころではなかったのだ。母が失踪し、困惑と絶望の中で大学生活がスタートしていた。アルバイトに追われ、最初の頃は精神的にも時間的にも余裕は全くなかった。

だが、二年生の夏にもたらされた、彼女の訃報には肝をつぶした。人生の山坂を越えてきた高齢者ならいざ知らず、まだやっと二十歳になっただばかりの若い世代には、同級生の死はそれなりに衝撃を与えるだろう。さらに、カンナの場合は病気や事故ではなく、幼い子を道連れにした入水自殺…と聞かされたから、旧友の間に駆け巡った衝撃も半端なものじゃなかった。

涼子は、

「私ね、実家が近所だったから葬儀に参列したのよ」

と、言った。他の人たちの話を聞いているときと比べて私の目の色が変

わったのを察知したのか、涼子はその頃のことを詳しく話し始めた。

本当のところ、自殺・無理心中だと決めつけることもできなかったらしい。遺書はなかったと言うし、町外れのため池に一歳の子供を抱いて入って行くところは、誰にも目撃されていなかった。ただ、彼女が子供を虐待しているところを何度も目撃されていて、近所でも育児ノイローゼだと評判だったらしい。夫との仲も陰悪で、死の直前はギスギスした暗い表情ばかり目立っていたそうだ。

「お棺の中の顔は穏やかだったよ。なんか妙にね、それが焼きついている」

いずれにしても、廊下で見ていた、あの屈託ない笑顔からは想像できなかった。

そして、今になって、私の前に現れたカンナの様子からも、そんな無残な最期は想像できない。この世に未練や念を残して、化けて出たきた

怨霊：には見えない。そもそもなぜ私に会いに来たのか見当もつかない。お葬式に行かなかつたからかな、これまで一本のお線香すらあげてないからかな、といろいろ考えてはみたけれど。

涼子は、小学校も中学も同じだったので、私よりカンナとのつきあいは長かった。高校時代はバレエ部に所属していて、カンナとは全く毛色の違ったグループにいたのでほとんど話もしなかつたらしいが、それでもその死には相当なショックを受けたようだった。

「家庭を持って、妻として母としてやっていくって、大変なことだよ。今になってやっとわかるし、三十越えたいっぱしの大人でもあくせくしているのに、まだ十九歳で：どんな気持ちだったんだろうね」

ため息混じりにそう言って、涼子は二杯目の紅茶を注いでくれた。お茶請けはマロングラッセ。涼子の自家製だという。あんこでもクリームでもチョコレートでもない甘味に、心躍った。でも、家では、紅茶は飲

まない。もともとコーヒー党だし、妊娠してからは飲みたくなってもカフェインレスのインスタントしか飲まなかった。涼子は子持ちなのに、妊婦にはカフェインはよくないということを知らないのか、忘れているのか、もともと気にしない夕子なのか知らないけれど、なにも聞かずに紅茶を出した。まあ一日ぐらいいいか、と思う。我ながら寛大だなと、少しおかしくなる。紅茶を見ると、いつも「紅茶の美味しい喫茶店」で始まる流行歌がよぎる。安い発想だ。反対に、涼子の出してくれたカップはウェッジウッドの、高そうで品のいいものだった。部屋を見回しても、家具やインテリアなどどれも趣味が良く、テレビドラマのセットみたいに整然としていた。3LDKのマンションに家族三人、だんなさんは無口だけれど穏やかで、余裕ある大人の男性という感じの人だ。きつと安定した仕事を持ち、安定した収入を妻に届けているのだろうと察しがつく。色が白くて細くて可愛い女の子が、小鳥のようにさえずりなが

ら母親にまわりつく。

「利奈ちゃん、可愛いね」

と、微笑むと、

「赤ちゃんがいるんですか？」

と、私のおなかを見て小さく尋ねた。

「うん、そうよ。触ってみる？」

利奈ちゃんはうなづき、そつと手を近づけて触れた。答えるように、

赤ちゃんがモコモコと動いた。

「あつ、動いた！」

「ホントだね。おねえちゃんに触ってもらって嬉しいんだよ、きつと」

「痛くないんですか？」

「痛くないよ。時々元気がよすぎて、びっくりすることはあるけど」

「利奈もそうやって、ママのお腹の中にいたんだよね。懐かしいなあ…」



「そういえば」

涼子は利奈ちゃんの髪を触りながら、

「赤ちゃんってね、一歳ぐらいまでちゃんとお腹の中のことを覚えてる……って説があんのよ。お腹の中で見ていたものも、外から聞こえてきた音や声なんかも。うまくしゃべられないから黙ってるだけで。で、だんだん生まれたあとの記憶に押しやられていって、物心ついたときには、全部忘れてしまってるんだって」

「へえ」

医学的・科学的にちゃんと裏づけがあるのかな、それとも誰かのロマンティックな作り話なのかな……と思うが、口には出さない。

「利奈はどうだったんだろう。確かめればよかったな」

と、涼子が目を細めて言う。彼女がさっき言ったように「あくせくしながら」、でも、一生懸命築いてきた幸せな城……私には関係ないことなの

に、なぜか少しホツとし、心が落ち着く。ちよつと前だったら、もう少し違つた、どこか妬みのようなものを抱えた灰色の感情を押し殺しながら、ここに座っていたかもしれないと思う。

カンナのことには話を戻す。

「本当に無理心中だったのかな…」

「カンナの両親や親しい人たちは、そう思いたくないって言つてた」

「事故つてことはないのかな。ため池に落ちた子供を助けようとした、とか」

マロングラッセをほお張りながらつぶやくと、心の中で「本人に聞いてみればいいのに」と、もう一人の私がつっこみを入れる。でも、恐くて、ずっと聞けないでいることだ。私の前では、カンナはいつもおだやかでにこやかだ。核心に触れて、彼女と会話するときの心地よいものを壊したくないと思つてしまうのだ。

「子供を虐待してた…っていうのも、本当なのかな」

「りっちゃん、嫌にこだわるね」

「それが本当かどうかで、自殺か事故かだったのも、大きく分かれるかなあと思つて」

「うん、わかんないよね。一歳つていちばん手がかかるときだから、声を張り上げて怒ったり、たまにはぶつたり…つて、私でもやつてたもの」

「ねえ、変なこと聞いていい？」

私があらたまつて言うのと、「な、何よ？」と、涼子は身構えた。

「カンナのご両親つて、どんな人たち？」

涼子は視線をはずして、少し黙りこんだ。細くてあやふやな糸を手繰り寄せるように、幼い時分のことを思い起こしているようだった。

「カンナはあんな感じだったけど、お母さんはやさしくておとなしい雰

囲気の人よ。お父さんも真面目な感じの普通のサラリーマンだった。もう定年になってると思うけど：今でもね、実家に帰省したとき見かけるよ。庭に小さな畑作ってて、手入れしてる。二人とも元気にしているみたい」

「カンナが小さいときに、厳しくしつけられた：って感じじゃないのね」

涼子は、何かに気づいたようにふっと唇をつりあげた。

「そこを知りたいんだね。つまり：」

幼少期に親から虐待を受けた子は、自分が親になったとき知らず知らずのうちに、自分がされたことと同じようなことを子供に対してやってしまう、という話。

それは本当なのか：ずっと前から、いつか誰かにちゃんと説明してほしかったことだった。できれば、「決してそうとは限らないんだよ」と、

笑い飛ばしてしてほしいと思っていた。

いや、今、涼子と話している最中に、ずっと前から霧のように胸を覆っていたその想いがはつきりとした形となってわきあがったのかもしれない。

「あのお母さんはそんなタイプじゃないと思うけど、だからと言ってカナが何もしてないっていう証明にはならないかもねえ」

それもそうだ。

それで、カナナの話はおしまいにした。そのあとも一時間ほどおしゃべりして、涼子の家を出た。これからもときどき会おうね、とアドレスや電話番号を交換して別れた。

敬介に「買い物してから帰るね」と電話したら、

「んじゃ俺、晩ごはんは中華食べたい。えーつと…酢豚とか」

「オーケー」

私はバフエと紅茶とマロングラッセで胃がたふんたふん音を立てていて、とても酔豚なんて食べられる気分じゃなかったけれど。

駅を抜け、表側にある繁華街へ足を伸ばしてみた。駅と隣接したショッピングモールがオープンしてから十周年ということでイベントをやっていた。特設ステージが設置され、地元の人たちがいろいろな出し物をしていたり、福引コーナーや屋台が出たりしていつもより賑わっていた。

ステージの上では、老夫婦が二人でハーモニカの演奏をしていた。おばあさんの方がMCを担当、曲紹介をしていた。少し緊張した面持ちでたどたどしいしゃべりだったが、おじいさんとの二重奏はとても綺麗な音色だった。真剣に耳を傾けている客はわずかだったけれど、私もその中に入り、しばらく聴いていた。

『コンドルは飛んでいく』とか『月の砂漠』とかいったスタンダードなものから、『アメイジンググレイス』『世界に一つだけの花』などの最

近の曲もやっていた。老後の楽しみとして家でひっそり弾いているだけでなく、人前で演奏するために選曲し、一生懸命練習してきたんだなと思った。パラバラとした拍手のあと、おばあさんは短く、

「次は、ローレライです」

と紹介した。中学の頃、音楽で習った歌だった。

「なじかは知らねど 心わびて」

ハーモニカに、歌詞を乗せて心の中で唄ってみた。ライン川で聴こえる、妖精の美しい歌声。その甘い声に誘われて、たくさんの船乗りが引き込まれるように命を落とした、という伝説に基づいて作られた歌だ。何年も口づさんだりしてないのに、小さい頃覚えた歌って案外唄えるもんだな、と思っていると、

「さびしく暮れゆく ラインの流れ」

この部分でふと、昔何度か車で通りかかったことのある、あのため池

のことを思い出した。

町外れにある、深く大きな水溜り。表面のほとんどが水草に覆われていて、たとえ事件がなかったとしても、どこか薄気味悪い感じがする場所だった。ライン川は知らないけれど、月とスツポンだろう。

カンナ、自殺だったとしたら、どうしてあんなところを選んだの？

カンナは私のことを「クジラみたい」と言ってくれたけれど、それを

「良い意味だよ」ってやさしく言ってくれただけど、あんな所じゃどうあがいたって、クジラにもイルカにもなれないよ。：ため池と私の昼寝の様子と、全く別物だとわかっていながら、なんとなくそんな言葉をぶつけてみたい気になった。

ああ、聞きたいことがまた増えた。でも、きつと聞けないだろうと思う。

長い時間、ぼんやり佇んでいた。我に帰ると、ハーモニカ演奏はとつ



くに終わり、小学生のダンスチームがスタンバイを始めたところだった。

あたりまえのことだか、妊娠してからは生理とセックスには縁のない日が続いている。いつから子宮内膜症を発症していたのかわからない。

けれども、もう中学の頃から生理痛はひどく、どうかすると寝込んで登校もできないほどひどい時もあった。高校の頃、原因不明の熱が続いて、病院でいろいろ検査したけれど、結局わからずじまい：ということがあった。今思えば、それも子宮や卵巣の不調が原因だったかもしれない。当時は、婦人科で調べようとは夢にも思いつかなかった。

中一の時、わずかに下着を汚した茶色い下り物を見て自分ではすぐそれが初潮だとわかった。でも、母には言うことができず、一人で薬局に行つて、自分の小遣いで生理用品を買った。翌日になって、母がトイレに置いてあった私のポーチを開けてナプキンを見つけ出した。

「あんだ、生理がきたの？」

黙ってうなづくこと、

「どうして隠すの？」

と、目を吊り上げ声を荒げて言った。

「ごめんなさい」

私は二日目ですべての生理痛らしき腹痛が始まっていたので、母と口論するような気力はなかった。何もかもが不安で、泣きたいような気持ちでいっぱいだったのに、母は、

「どうして言わないの？ あんだ、私をなんだと思ってるの」

そう言うと、ナプキンのポーチを畳みに放り投げて、背を向けた。この人がよその母親のように想いをかけてくれないのはいつものこと。だからいつものように、心のシャッターを閉めた。そもそも、最初からこんなことがどうしてめでたいのかわからない、と思っていた。だから、

お赤飯を炊いてほしいとも一緒に喜んでほしいとも思わなかった。何も特別なことが訪れたわけではなかったのだ、と。腹痛に腰痛まで加わって、ベッドを一步も降りられず、学校にはとても行けない：というようにときも、母は「病気じゃないのにさ、甘ったれが」と、吐き捨てるように言って、学校へ連絡してくれなかった。いつも自分で電話していた。

父が生きていた頃は、母と私がぎくしゃくしたときも、父の存在が決定的な亀裂への歯止めになっていた。父が帰宅すると、母の機嫌は良くなり、私に向けられていた怒りも自然と鎮火したから。母は勝気で身勝手な人だったが、父のことはよほど好きだったのか、面と向かって逆らうようなことはなく、妻として主婦として普通に生活していた。あくまでも、傍目には…。建築会社に勤めていた父は、職人気質で無口な人で、外国人のように端正な顔立ちをしていた。若い頃はすれ違う人が振り返るほどで、一目ぼれした母がおしかけてきて夫婦になったらしい。私に

とっては、父親がかっこいいなんて、そんなことはどうでもよかった。どこかに出かけたとか、何か買ってもらったとかいった記憶は一つもない。それでも、一人娘の私をとて愛し、可愛がってくれていたと思う。仕事から戻ると、必ずビールを一本開け、いつも私を膝に乗せてテレビで野球観戦をしていた。けれど、母の仕打ちを、知っていながら止めてくれなかったという事で、私にとっては父もまた「よそのお父さんとは違う」と、寂しい不信を抱かせる存在だった。

一人になって、大学生になって、バージンを失ったとき、痛いばかりで何の喜びも感激もなかった。ただ、好きな人に嫌われたくないという想いだけ。相手は大学の先輩だった姫川という男。寂しいときにずっとそばにいてくれた人だ。でも、今思えばなんであんなつまらないヤツが相手だったのか、クリックして消去できればいいのに、と思っっている。堅実であることが唯一のとりえで、セックスは下手くそなくせに、嫉妬

深い蛇のような男だった。十代の私にとって、「女になる」「女である」という自覚を積み上げることは、やるせなく、面倒くさく、腹立たしいことが増えるばかりで、感慨などなにもなかった。結婚しないかもしれないし、子供も一生持たないだろうと思ってきた。

そんな感情も、敬介と知り合い、好きになり、結婚してからは忘れていた。不妊治療を受けているときは少し蘇っていた。そんな最中の、母の帰還。すべてが巻き戻しボタンを押されて過去に戻るようで、いたたまれなかった。

深夜のテレビで古い映画を観終わって、そろそろ寝ようかというとき、敬介が、

「今日、いい？」

と訊いてきた。

安定期に入ればセックスをするのは問題ない。けれど、万が一影響があつてやつと授かった子供を流産してはいけないと、敬介は妊娠発覚以来一度もしようとしなない。「今日いい？」は、手や口でお願いという意味だ。

「いいよ」

スタンドの茶色い光の中で、少しでも敬介を喜ばせてあげようとあの手この手を使って頑張る。せり出してきたお腹が少し邪魔になつてきたけれど、できるだけのことはしてあげたいと思う。昔、姫川に嫌われたくないと思つて自分を押し殺し、背伸びして頑張つていた気持ちとは、雲泥の差だった。

敬介とは、別れようと思つたことなど一度もない。不妊治療で精神的にもダウンーになり、周囲の無言の圧迫を感じていた日々も、敬介が一緒に戦つてくれたから、乗り越えることができた。あの遠い日の、

「女」になつたことでもたらされた絶望に比べれば塵のようなものだ、  
と言ひ聞かせながら。だから、これからもずっと一緒にいたいと思う。  
よきにつけあしきにつけ、私のせいで哀しむ姿を見たくない。この人の  
不幸せな姿を見たくない。だから、もしも希望とは丸つきり反対の事態  
が起きてしまつて、私を捨てることで彼が幸せになれとしたら、それは  
それで甘受できるかもしれない、とさえ思う。

敬介が果てたあと拭つてみると、ティッシュがあちこちに貼り付いて  
とれなくなつた。そのやんちゃな乳白色の液体は、汗とも涙とも違ふけ  
れど、どこか血液に似ている、といつも思う。

「この中に、何億も子供のもとがいるなんてねえ」

と、指にからまつているティッシュの断片を剥ぎながら言うのと、  
「アタシの可愛い分身たち、みんな、一生懸命泳いでいるのよ」  
と、オカマ口調で敬介が答える。

精子たちに感情はないだろうが、こんな少量の液体の中でひしめきあいながら、ゴールめざして一直線に。そして、あっけなく放り出されて、ティツシュにくるまれて捨てられる。

「私は…クジラ」

「え？」

「妊婦が寝てる姿ってクジラみたい、って言われた」

「ふむふむ…確かに、俺の分身ちゃんたちはメダカの群れっぽくて、おまえのおなかの子はでかくって、クジラっぽい」

「だからあ、赤ちゃんじゃなくて、お母さんの方が」

「赤ちゃんだって、水の中で泳いでるでしょうよ」

「そうか、と思う。」

胎内の海。私の中ではいまや、水飴になっちゃってるかもしれない泉。それもまた、血に似ている。



掃除機をかけ、フローリングの床に雑巾をかけていた。長い廊下を端からダーツと拭いていくようなマネはできないから、ペタンと座り込んで少しずつ拭き上げていく。家事を一つ一つ真剣にこなすのは、適度な運動になるし、ストレス解消になる。それに、洗濯物を干すときも、皿洗いするときも、意外と深刻なことは何も考えてない。手元の作業をちゃんとこなしていくことに集中していて、知らないうちに時間が経過している。私のようにじめつと何かを考えることが多い女には、そういう時間ありがたいと、大事だと思う。

「ねえ、そろそろお母さんのところに行かなくていいの？」  
顔を上げると、カンナがソファに体育座りしていた。

「そうだね」

と、手を止めて見つめる。

「行ってあげなよ。寂しがつてんじゃないの？」

「さあね、私に会いたいとか、思わないんじゃないかな」

「そんなこと決めつけて意地張つてると、後悔するよ」

にやにや笑いながらからかうように言ったので、カチンときた。

「いいのよ、これまでだつて、いろいろあつたんだから」

「ふうん」

拭き掃除に戻り、黙々と床をこすつた。カンナはソファから降りて背伸びをした。いつも、半袖の白っぽいワンピースを着ていた。ため池に入つたときの服装だろうか。しばらく出てこなかつたのは、きつと私が涼子といろいろ話したことを知つているからだと思つていた。

何かこちらから投げかけてみようか…と、よぎつて、再び雑巾がけの手を止めた。

「ねえ、カンナ」

「ん？」

口をついて出たのは、

「出産って、そんなに痛いなの？」

…バカか、私は。

だけど、消えちゃう前に、今日は何か一つでも駒を進めたくって、焦って、苦し紛れに出た言葉だった。何も考えないはずの家事の時間が、最も息詰る、手に汗握るスリリングな時間にすりかわっていた。

「そりゃ痛いよ。でも、私はね、すごく軽い方だったよ」

「早かったの？」

「分娩台にあがってからは、十五分よ」

「早っ」

「骨盤がどうのお尻のデカさがどうのってよく言われるけど、骨盤広くても、太ってる人は産道がせまくなってるから大変なの。私は痩せてた

しね」

そして、

「若かったしね」

と、つけ加えた。

「赤ちゃん、かわいかった？」

「うん、めちゃくちゃかわいいよ、最強」

カンナは表情を変えず、つまり、穏やかなまま笑みを浮かべてさらつと答えた。

「自分の赤ちゃんかわいくない親なんて、いないよ。いたとしたら」

カンナはゆっくり背中を向けて、低くつぶやいた。

「そんなの犬猫にも劣る。最低だよ」

私は立ち上がり、またも自分では思いも寄らなかつた言葉をするりと唇から落とす。

「悲しかった？」

今度は、なんの答えも返ってこなかった。カンナの表情は見えない。恐くなった、緊張で、全身の毛が逆立ち、身体がキュツと縮こまるようだった。

しばらくして、カンナが背を向けたまま言った。

「とにかくさあ、お母さんところ行ってあげなつて」

そして、消えた。

午後になってバスに揺られ、犬や猫にも劣る、最低と思われる、母を見舞った。

病室の入り口に、速乾性の液体消毒薬が置いている。それが、切れていた。看護師さんに言った方がいいかな、と考えて見回していると、母と同じ病室の手島さんという婦人が中から出てきた。

私が手にしている消毒薬の容器を見て、

「ああそれ、なくなっちゃってますね」

手島さんは、ミイラのようにやせ細っていて、いつも憂鬱そうな顔を  
していて、重く暗いオーラを撒き散らしている。入院するほどの病気を  
抱えてるんだから仕方ないと思うけれど、できれば長い時間話したくな  
いタイプだ。

「ないなら、別にやらなくてもいいですよ。仕方ないですものね」

手島さんは、ポジティブなのかネガティブなのかわからないことをか  
細い声でつぶやいて、私の横をすりぬけて行った。

母は眠っていた。ベッドの横に折りたたんだ車椅子があった。もう歩  
くこともままならないほど進んだのか…と、ぼんやり思った。

母の皮膚はカサカサで、眼と口は半分開いていて、人形のようなだった。  
息をしているのかもわからなかった。余命は半年と告げられて、四ヶ月

が過ぎていた。まさか、死んでるんじゃない？　と思ひ顔を近づけて見ると、胸のところがかすかに上下していた。

痛み止めが効いているのだろう。起こさずにこのまま帰ろうか、と思つた瞬間、ぱつと目を開けた。

「来てたの…」

「うん」

「ちようど、あんたの夢見てたよ」

出し抜けにそんなことを言われ、ぱあつと頬が紅潮した。母のそんなセリフ、生まれて初めて聴いたかもしれない。

「夢って言うかね、ウトウトしながら思い出していたって感じかね」

「昔のこと？」

「あんたが一歳ぐらいのときね、寝かしつける前にね、あんたに訊いたのよ」

母はゆっくりと身体を起こし、「その水を取って」という仕草をした。早く先が聞きたくてイライラし、荒々しくエビアンのペットボトルを手渡した。

「で、なんて訊いたの？」

「『お腹の中にいるとき、なにしてたの？』って」

「私、なんて答えた？」

母はふざけたように、

「ジャブジャブウ、ジャブジャブウ…って」

絶句した。

腹の中で、赤ちゃんがぐるんぐるんと激しく動いた。混乱して、病室から飛び出して行きたい衝動にかられたが、必死で足を踏ん張った。母は、

「あーあ、頭がボーっとしてる」



と、何事もなかったかのように言って、首をゆっくり回した。

入り口を見ると、手島さんが戻ってきたところだった。私の方を見て、少し大きめの声で、

「消毒、満タンになってますよ」

と言った。急いで入り口に向かい、ポンプタイプの容器をガツガツと何度も押して、消毒薬を手にもふりかけた。つんとした薬のにおいが立ち込めて、鼻の奥をついた。涙が、ボタボタ落ちた。

私たち親子に、そんなに柔らかかで微笑ましい時間があったのか。そして、そんなに感動的で神秘的な瞬間があったのか。けれども、目の前にいる母に返すべきどんな言葉も見当たらなかった。これからもずっと、鬼婆、クソババア、犬猫よりも劣る鬼畜だと、心の中で罵っていたいの

母が逝ったのは、その一カ月後だった。

喪主は私で、葬儀場で一番小さな会場を借りて、小さな葬式を出した。親戚の中には「肩の荷が降りたね」とか「りっちゃんがお産前で大変なときに…」とか言葉をかけてくる人もいた。今さら腹も立たなかつたし、悲しくもなかつた。そんな人たちに、昔も今も何かを理解してもらおうなんて、毛頭思つてない。期待したこともない。へらへら笑いながら

「あなたの顔見てる方がよっぽと胎教に悪いよ」と、返してやりたい気分だった。

苦労したのは、遺影にする写真を見つけることだった。アパートに残されていた写真の束、それはお煎餅の四角い空き缶にバラバラに突っ込まれていたものだったが、まともなものは一枚もなかつた。大半は行方不明の間のもと思われ、赤ら顔で私の知らない人たちとカラオケを歌っていたり、抱き合つてダンスしていたり。その束の一番後ろに、履歴書

に貼られたような、くそ真面目な面持ちの証明写真があった。老けていたから、最近のものだと思われた。三年前に私のところを訪ねてきて一人暮らし始めた頃、人材派遣会社に登録したと言っていたから、そのときのものかもしれない。髪を後ろにひつつめていて化粧は薄めで、普段の母のイメージとは少し違っていたが、結局それを使うしかなかった。

缶の中からは、私や父の写真は一枚もでてこなかった。もちろん、最初から期待もしていなかったけれど。

ふと気づくと、アパートの窓のところに、カンナがちよこんと座っていた。一緒にいた敬介には、やはり見えていないようだった。カンナは、何も声は出さなかったが、顎をしゃくってある方向を示した。そして、

「ひ・き・だ・し」と、唇を動かした。部屋の隅に三段引き出しがついた小さな棚があり、上には鏡や病院に持ってこられなかった化粧道具が乗せてあった。母が鏡台代わりに使っていたものと思われた。カンナが

指示したとおりに引き出しをあけると、様々な雑貨に混ざって、古ぼけた耳搔きが入っていた。竹製で、先にはおたふくみみたいな、日本髪を結った女の子の顔がくつついていた。「ふっ」と、笑いがもれた。

「こんなもの持ってたんだ」

「何？」

「私が昔、修学旅行のおみやげに買ってきたやつ」

「へえ」

「写真一枚も持って出なかつたくせに、こんなもんだけちやつかり持って家出したなんてね……」

敬介は、私の頭をグリグリと撫でた。

「形見にすれば？」

少し考えて、首をふった。

「お棺に入れてあげようかな」

窓辺を見ると、カンナはもう消えていた。

写真と耳搔きを手に、葬儀場へ急いで戻った。身重な私に代わって、敬介がまめに動き、彼のご両親やお義姉さんがいろいろと手助けしてくれた。不思議なもので、亡くなった母のことを考える時より、上辺だけの慰めを言われるより、そういった人たちから気遣ってもらった時の方が涙が出た。そしてなぜだか、参列してくれた涼子の顔を見て泣き、あの手島さんの姿を見つけては泣いた。手島さんは母が亡くなった数日前に退院していたのだったが、「昨日、看護師さんに聞いて来まして」と言った。きちんとお化粧をされていて、病院とは別人のようで本当に驚いた。こんなに綺麗な人だったのか、と。さらに、

「お母さんは優しい人でしたね」

と、意外なことを言った。遺族へのリップサービスなのか、本当に具体的に何かあったのかわからないが、わざわざこんなところまで来たくら

いだから、母とは私が思っていた以上に親しかったのかもしれない。

涼子は、

「最後をみとることはできた？」

と、小さく訊いてきた。

「ううん、主人と駆けつけたんだけど、間に合わなかった」

「最後に会ったのはいつだったの？」

「十日くらい前にね、検診の帰りに病室に寄ったの」

「そのときは話せた？」

「うん、少しだけね」

母との最後の会話、

「出産はそりゃものすごく痛いけど、どうあがいたって、途中でやめられないからね」

私が帰ろうとして、丸イスから立ち上がったときに投げかけてきた言葉だった。

「うん、わかってるよ」

唇の端を吊り上げて、少しだけ笑ってみせた。意地悪な脅迫のつもりではなく、最後ぐらいは娘を励まそうとした、と思いたい。そうでなければ、母のところに戻ってきた意味は、何一つないってことになるじゃないか、と言いついて聞かせていた。妊娠してからの私は、本当に寛大で甘くなつたと思う。

母の死後の諸々の手続きが一段落し、秋の気配が静かに染み出し始めた頃、臨月を迎えた。前に、担当の先生が、

「性別、お知りになりたいですか？」

と尋ねてきたが、敬介と話しあつて聞かないことにしていた。男の子な

ら超音波エコーの映像で、オチンチンがはつきり映って素人目でもわかるらしい。だから、いつもチラチラと見るだけで、あまり目を凝らして探しはしなかった。

でも、カンナはいつも「男の子だ」と言い張っていて、それが医者に教えられるよりずっと確実なようですごく嫌だった。

「もう！ 言わないでよう、楽しみにしてるのに」

「でも男の子が欲しいんでしょ？」

実のところ、なんだかもうどっちでもよくなっていた。

母の人生を貫く「命の管」、そんなものがあるとして、そこにつまっていた錆や垢のような忌まわしいものを、母がその死によつてすべて管の外に放出し、丸ごと消えてしまったとは思えなかった。産みの親より、育ての親：みたいなのは、あくまでも「感情」の話で、「血」は恐ろ



しい。決して逃れることができない、鉄鎖だ。だから、娘の私の命がたどる「傾向」も、母の死によって完全に断ち切られたわけではない：そんな思いを持ち続けていた。ジャブジャブの話聞いても、耳搔きを見つけても、それもまた一瞬の「感情」に支配される小さな美談で、私が母のようにならないという保証は、どこにもない。

敬介がリビングで映画を観ていたので、一人で寝室に入り横たわっていると、カンナが姿を現さず声だけで語りかけてきた。

「ふふん、わかってるくせに」

「何を？」

「育ての親より、産みの親ってこと」

「そうよ、だから何？」

「好きなんだよ。それをちゃんと表現できないだけ」

「意味わかんない」

「ジャブジャブのときのことは、ホントは永久に忘れられないの。『忘れてないこと』を忘れてるだけ。忘れたふりしてる人が多いだけだよ」

そんなことを言われて、私はこの先どうすればいいというのか。

「カンナ、行っちゃうの?」

なんだかそんな気がした。

「そうだね。もうそろそろね」

「どうして私の所にあらわれたの? 何を伝えたかったの?」

堰を切ったように、いろんな言葉が流れ出た。

「心中だったの? 悔いが残っているの?」

そして、

「私もお母さんみたいになっちゃう? お母さんは私のこと、好きだったのかな?」

その瞬間、今までに感じることのない強いお腹の張りがきた。

「いずれわかるよ。私のこと忘れないでね、クジラさん」

そう言つて、カンナは夜の空気に溶けた。

残された私は、目玉まで溶けて流れそうなくらいに、たっぷり泣いた。

赤い目で鼻をすすりながらリビングに入つて行くと、ソファに寝っころがっていた敬介が飛び起きた。

「どうした？」

「別に：大丈夫、ごめん」

テレビでは、おぞましい顔のゾンビが、うなり声をあげて金髪娘に飛びかかろうとしているところだった。

「映画、観てていいよ」

「うん」

敬介は言われたとおりに、座りなおしてテレビに視線を戻した。キッ

チンに水を取り行き、しばらくして、

「死んだ人って、こんなふう生き返ることあるのかなあ」  
とつぶやくと、

「まさか。これはないだろ」

「ねえ、幽霊って信じる？」

「俺？ うーん、信じない。いない」

「へえ、そうなんだ」

「ああいうのは、見てる人の心が作り出すものだよ。情緒不安定なときとか、寂しいときとか、そういう隙間にふっと入り込んでくるもんだ、きつと」

「いやにきつぱり言うね」

「なあんてね、そう思わないと怖いじゃん」

あははと、二人で笑った。

「私、見たことあるよ」

敬介は真顔になり、少し黙っていた。そして、

「お義母さん？」

「そう言うと思ったけど、違うよ」

「ホンモノ？　どんなのだった？」

このゾンビよりは、ずっと綺麗で優しいよ　…と言いかけて、やめた。すると、お腹がぐうつとしめつけられる感じがした。

思えば、この感じさつきもあった。

カンナが消える直前、そしてベッドの端に顔を埋めて泣いているとき　…全部で三回、十五分ぐらいの間隔だった。

ああ間違いない、来たのだ…と確信し、敬介に近づいた。

了



入れ墨の城の姫

海辺柊路

砂漠を越え　はるか西より来たりし異形の旅人

探し求めしもの得て其を持ち帰り　新たなる都を築く

其の都を作りし王　隻眼の魔女と呼ばれ

今もなお恐れ敬われたる



瞳は、暗い炎の色に微かに濡れていた。

本来は王妃が座するところに、姫は母に代わって控え、静かに俯いている。

その姫の瞳が湛える暗みを騎士シヤッコが窺おうとしている間に、半月に一度開かれる御前の議はあらかた終わってしまった。

「では雨期に向けての治水に関しては、まずは音引の関に注力することとせよ。さて残るは——」

ナインス国の玉座につく王が言葉を切り、玉座の間に参じている重臣たちを見渡した。

玉座の間と呼ばれてはいるものの部屋は狭く、王と姫の椅子の他には卓も椅子も置かず、居並ぶ者も十人に満たない。城の奥深くにあり窓がなく、調度はことさら地味に整えられており、本来は衣装部屋とでも呼ぶべき部屋なのだが、王は好んでここを使っている。

この場に控えることを許されるも発言を認められていない近衛騎士団長のシャツコーは、居並ぶ重臣と直に目を合わせることはないように直立不動で視線を下げている。

俯き加減で密かに姫に向けていたその視線を戻し、体の正面に鞘を下にして立てた剣の柄へと、落とす。するとその向こうの毛足の短い絨毯の上で、重臣たちが思い思いに着飾った服の裾を縁取った金糸が、蝋燭の炎の色を帯びて揺れるのが見えた。

シャツコーが盗み見ていた姫の名は、ベルトリオーダという。

齡は十七をすぎ、すでに逝去した母から受け継いだ白銀の糸を無数に垂らすかのような美しい髪を持ち、透けるような白い肌と漆黒の瞳を持つて、民からは雪鷲の姫とあだ名されていた。

無数の灯し火の揺らめきは、彼女の肌に押し黙った夕闇色の帳を落とすとしており、唇は微笑みの陰を作っている。

シャツコーは、遠からずその姫の体に刻まれることになる茨の棘のこ  
とを想うたびに、鈍く焦げる痛みを体のどこかで感じる。それがまた、  
彼の目を姫に向けさせることになる。

「姫の成人の儀は、いつになさいますか」

王が臣下の発言を待つために作った間にどこからともなく、くぐもつ  
た声が滑り込んだ。一同が驚きの表情でその声の主を見る。魔導士長だ。  
齢はすでに九十とも百を遙かに超えたとも噂され、現王の曾祖父以降  
の四代にわたって王の一族に仕えている。ナインス国の持つ三つの騎士  
団と一つの魔導士団のうちの一、王宮魔導士団の長だ。また同時に国内  
にいる全ての魔導士の頂点に立つ。彼が魔導士と認めた者だけが、この  
国で魔導士と呼ばれることになる。

常に全身を漆黒に光る天鵞絨の外套で包み、顔には歪んだ二本角を生  
やす獣のような仮面をかぶっている。薄暗いこの部屋では、闇に魔物の

顔だけが浮かんでいるようでひどく薄気味が悪い。

王の曾祖父の時代からすでに仮面をつけていたと言われており、王すらもその素顔を知らない。おそらく、その父も、その祖父も、ともすれば曾祖父すらも。

今に伝えられるところでは、王の曾祖父の時代には、現在のナインス国の領土はいくつかの国々に別れており、王の曾祖父はそのうちのひとつの王だったという。

王の曾祖父は魔導士長を召し抱えてから大小の戦を勝ち続けて、この地方に現在のナインス国の元となる勢力を築いた。

魔導士長は近習として王の曾祖父に付き従い戦略を授けて勝利に導き、とある戦で矢面に立った際には、その魔術をもって鳥の羽音よりも早く森ひとつを数万の敵軍とともに灰燼に帰したという。

以来七十年余り、ナインスの魔導士を率いる長にある。

魔導士長の性別は男だということだがいくら小柄で、魔導士の呼び名に似つかず一振りの剣を常に帯びていて、時折外套の合わせからその束がのぞくことがあった。

化け物じみた獣人の顔を模したかと思われる仮面に籠もった声は低くかすれて、さながら地獄の亡者が発するうめき声のように、人々を陰鬱で不気味な気分にするのだった。

王の祖父が治めた時代に、海と聳える山脈によって隔絶されたこのナインス地方を平定して以後は争乱も少なく、特にこの数十年は戦と呼べるほどの戦はない。

すでに非常な高齢とされる魔導士長は諸事を部下に任せきっていて、今では身につける仮面が一種の滑稽さを醸して、まるで本物の道化師のように扱われることもしばしばとなっている。

道化師は権力にも金にも栄誉にも色事にも一切の興味を示さず、ただ

諸国より膨大な数の書物を集め、自らの有する書庫に積み上げ蓄えることに腐心しているのだった。

そんな様子でも未だに魔導士長の座にあるのは、ナインス国で本当の魔術を使える者が魔導士長をおいて他にないと考えられているためだ。

この国の魔導士と呼ばれている者は、本当ならば薬師や占い師などと呼ばれるべき者がほとんどで、例えば戦場で多くの敵を屠ることのできるような魔術を使えるとされるのは、魔導士長の他にいないとされている。

ただし、魔導士長が使う本物の魔術とやらを実際に目にした者はこの王城には一人たりともおらず、従ってその力を心から信じている者は皆無と言っている。魔導士長が自身の地位を固めるためにでっち上げた法螺話だと、もっぱら噂されている。

歴代の王を戦において補佐した指南役としての古い功績によって、形だけは重臣に列せられているものの、政に関する実権はほとんど失われ

ている。

政務より離れて久しい魔導士長が御前の議にその姿を見せていることが、すでに極めて希なこと、さらにその彼が口を開いたということへの驚きが、御前に居並ぶ者たちに言葉を失わせた。

役目により連日城に詰めているシャツコーでさえ、魔導士長の声をまともに聞いた記憶がなかった。王や自身の部下からの呼びかけにくぐもった声で応じるのを、微かに耳にとめたことがある程度だ。

「成人の儀か。いつにするのが良いかな」

王もまた虚を突かれた様子で幾らか言葉を詰まらせ、そのまま魔導士長へ聞き返すのがやっとだ。

その声には、一種のおもねりが混じっている。老臣に対する労りにも近いがしかし、それとはまた別個のものだ。声音に薄く塗られた敬意は、畏怖を裏返した侮蔑を覆い隠せずにはひび割れている。

王家に代々口伝えされてきた魔導士長の事跡は、生まれついてより王だつた彼にとつて、ある意味では疎ましいものだ。王は、戦場にでたことがない。

父の先王は魔導士長のことになると同じ文句を繰り返した——必ず、あの魔導士を敵に回してはならない——と。

「来月の星の巡りの良い日に行うのがよろしいかと。例の件も予定通りに進んでおりますので」

王の問いかけに答えたのは問われたはずの魔導士長ではなく、宰相だつた。

戦の遠のいたこの国では剣と力の時代も共に去り、今では国は言と知によつて治められている。剣の腕よりも、算の指、政の目が重用される。「日取りはまかせるぞ。その後の祝賀も、盛大にな。次の議において報告せよ」



王は魔導士長の闖入でしばし微かに乱れた生来の威厳を取り戻し、鷹揚に応じた。

誰もがまるでそこにいないかのように魔導士長を扱い、以降はその道化に一瞥をもくくれることはなかった。

シャツコーは姫の横顔をまた盗み見たが、姫は玉座の隣に無言で座り、時を待つ百合の蕾のように柔らかく俯いたまま、ぴくりとも動かなかった。

\* \* \*

ひとつ役目を終えたシャツコーは部下の騎士たちにいつも通りの指示を出したあと、王の館から中庭を巡る回廊へ出て、北へと城を下った。

せまく薄暗く、その場にいるだけで沈鬱な気分になる玉座の間から開

放され、正装の襟元をゆるめて息をする。今の玉座の間は、本来は姫か王妃かの部屋として作られているはずだが、王の館の奥まった所にある窓がないその部屋が、なぜか儀を開く場となっていた。

重臣たちの間では、悪巧みには絶好だと冗談交じりの話の種になっている。

低い台地に立つこの城の北側の大手には城下の街並みが見え、さらにその背後に遠く山々が空とは別の青をして、地に根を広げている。

シャツコーが歩を進める回廊から望む空は広い。

中庭を囲むように並ぶ石組みの城壁の二階を、シャツコーは時折中庭に目をやりながら歩く。

澄んだ泉の水が、陽光をその身に孕んで揺れて、浅い水底に波紋を輝かせた。

この城の古くは、泉を囲む真四角に角張った小振りの城塞で、最初に

築かれたのは二百年以上も前だという。

先々代の王がここをナインス国王の居城と定め、長年に渡って改築を続けてきた結果、現在の王城は古い部分と新しい部分が混在している。

必要に応じて解体されながら細切れになった古い時代の城壁や、居館の東にそびえる物見塔、大手の城門とその両端の城壁塔は石肌に古色を染みこませている。

先々代の王——現王の祖父が座し堅牢だった城館は数十年前に取り壊され、剛健な作りながらも外観の随所に優雅な装飾を施した、内部には三十もの部屋がある王の館に姿を変えている。

もとの城壁の内側には礼拝堂や兵の詰め所など大小の建物があつたが、今はほとんどがもとの敷地の外側に移されていて、その空いた土地が現在の広く美しい中庭となっている。

現在の王城は、もとにした城塞の土地を二回りほど外に広げるような

形で、成り立っていた。

ナインス国は海と高く連なる山脈に領土の四方を囲まれており、大陸でも辺境とされる地方に位置する、大きくはない国だ。

南の海は幸の恵みが多く、また峻険な山地より流れ来る河は国民の腹を満たして余りある豊かな穀倉地帯を育んでいる。

民は十八に満たない者をのぞき、皆が全身に入れ墨をしていた。

手、足、顔、背、腹、尻——とにかく、墨を入れられるだろうところにはほぼすべてに、だ。

その入れ墨は、この国で護りの紋と呼ばれているもので、単なる土俗的な風習ではない。

確かな記録もないほどの昔にこの地を治めていたある王は、魔の力を忌み嫌い、一帯で魔導士狩りを執拗に行ったと伝えられている。

古くから多くの魔導士が他の民と共に生きていたといわれるが、しか

しその魔導士狩りの際に魔導士は殺し尽くされ、魔の業のほとんどは消え失せてしまった。

そしてその際に火あぶりになった魔女こそが、この地とその民を恨み、全ての民に呪いを刻みつけた者だ。その齢は三百とも伝えられ、魔の力は地を薙ぎ風を焼くほどに強く、燃え尽きゆく魔女の断末魔の叫びを聞いたすべての者がその場で命を落としたとされている。

魔女はこの地を呪い、民を呪い、呪詛の言葉を吐き続けながら焼け死んだ。

その直後より、この国で十八歳の誕生日を迎えた者はことごとく、激しい全身の痛みに苛まれ、のたうち回り、苦しみ抜いたあげくに命を落とすようになった。

人々は魔女の遺した呪いだと恐れおののき、一転して辛うじて生き残っていた魔導士の力と業をかき集め、その呪いに抗うための魔術を組み

上げたのだという。

それが入れ墨として全身に刻む、魔術の文様だ。

ナインスの民を呪って死んだ魔女は、今では呪いの魔女と呼ばれ、その呪いは親から子、子から孫へと必ず受け継がれる。

親の片方が異国の者でも、もう片方がこの国の者ならば呪いは子に継がれ、子はその体には護りの紋を刻まなければならない。さもなければ、十八になれば死ぬ。

十八以上のすべての者が全身に入れ墨を持つ入れ墨の国、それが他国から見たナインス国の姿だ。呪われた地と呼ばれ、呪われた国と呼ばれ、呪われた民と呼ばれ、周辺の王や諸侯がこの地へ持つ領土的な興味は薄い。

加えて他国が海と山に囲まれたナインス国に攻め込むには、海から船で兵を運ぶか、高く聳える山脈を越える強行軍かの、二つの方法しかない。

い。攻め行つてもし勝てなければ、退くにも退けない致命的な負け戦になる。

その呪いと地勢との二つの理由で、ナインス国が他国からの侵略を受ける可能性はもともと低い。

それでも現王の父の時代には、隣国に数度の侵略を受けているが、地の利を生かしてすべての戦において完全に勝利していた。いずれの戦においても、敗れ追われて逃げ場を失った敵軍に対し、さらに播り潰すように執拗に追い寄せて、灰すらも残さぬほどに滅したとされる。

全身に禍々しい入れ墨をした精強で情け容赦のない兵たちが守る呪われた地——つまりは手出し無用の土地とされ、ナインスには長い平和が訪れている。

他国から見れば畏怖の対象となつているその入れ墨も、ナインスでは護りの紋と呼ばれているのだ。

よく見れば、一人一人が少しずつ違った形の墨を入れている。

幸か不幸か、今でも土地には魔導士の血統が残っているようで、民の中には生来より魔の力を持つ者も少なくなき、そういった者は魔女の呪いに耐える力をいくらか持ち合わせていると言われる。それらの者は、体を覆う呪文の量もいくらか少なくすむのだ。

その魔の力の強弱をもとにして、魔導士によってどのような呪文を身に刻むかは判断され、十八歳を前に成人の儀として墨を全身に彫り入れる。

シャツコーは魔の力を非常に強く持つため、その身に刻んだ入れ墨――特に顔面の墨は他の者より少なく済んでいた。実際は顔に墨を入れる必要がなかったのだが、シャツコー自身の望みによってその額と頬には呪文の墨が入れられ、まだ若く子供臭さの欠片を幾分か残す彼の面も、勇猛な戦士のように見せている。



彼の血は遠いながらも王の血脈の一部で、類い希なる魔の力を持ち、また優れた剣の技によつて近衛騎士となつた、ということになっている。近衛騎士団長シャツコー・ヤルモットの父は、北の山脈に近い街を治める領主だつた。しかし父は領主として財を蓄え位を高める前に病で世を去り、長子のシャツコーがあまりに幼く、他に才気ある跡継ぎを示せなかつたヤルモット一族は火が消えるようにその権を失つて、貴族ながらも貧しい生活を余儀なくされた。

燠火のような生殺しの状態に陥つた一族の中で、長じて剣の腕に秀でたのがシャツコーだつた。本来は武門の一族ではなく、その出自は魔導士ともされていた文官の一族から出た、才ある若い騎士だつた。

シャツコーが国王の娘、ベルトリオーダ姫の付き人として幼少の頃から城に上がり、王からの覚えがめでたかつたことは、確かに好運だつた。落ちぶれたといえども王の遠い親族だつたために、ヤルモット家の子息

は王家の側に仕えることを許されていた。

シャツコーが城に登るようになり、姫のベルトリオーダと初めて会ったのはシャツコーが七つの時で、ベルトリオーダはシャツコーの三つ下だった。

ベルトリオーダの周りにいた年の近い子どもはシャツコーだけだったために、少女はシャツコーを遊び相手にしたがった。

少女は幼いときからひどく利発で、子供ながらに人を見抜く目をもっていたものか、へつらう大人には気を許さなかった。大人にとっては扱にくい少女の相手をさせるために、なぜか兄のようになつかれていたシャツコーがいつもあてがわれていた。シャツコーがいると、少女の機嫌が良かった。

少女は六つで母と死に別れたころから、姫として王妃の代役をこなさねばならなくなっていた。父の腕に抱かれ、民に向かって手を振るところ

ろからはじまり、自分の足で立ち民衆に向けて笑いかけ、優雅に手を振るようになった。

シャツコーは姫の世話係を続けながら剣の腕を磨いて、十五で姫付きの護衛騎士として騎士となることを許され、すぐに戦士としての強さを認められて近衛騎士団に転属された。

そして、時勢を得てその力を盛り返したヤルモット一族の強力な後押しと、若い騎士の自分の娘への忠節を見知っていた王の鶴の一声があり、二十歳の若さで近衛騎士団長に抜擢され、今に至っている。

その若さ故に、時折は憎しみにも近い妬みの視線を受けなければならぬ。

戦のない国での近衛騎士団だから、自然と儀礼や式典の席での王族の警護が主な務めとなり、他の騎士団からは姫のお飾り騎士団長と揶揄されていることも、シャツコーはよく知っている。

シャツコーが騎士団長として纏う白銀の鎧は、胸当ても肩当ても何もかももの地金が薄く、そこかしこに豊かな樹木や花を模した精緻な浮き彫り細工を施してあり、武具というよりは工芸品だ。

これではと、シャツコーも自嘲するところだ。

純粋な剣の腕でだけ成り上がったわけでも、人望で推されたわけでもなく、王族の血と権力に与えられた座だ。ともすれば想像もつかないほどにあっけなく失うことになるだろうこの地位に、今は必死でしがみつかなければならない。

胸の中に押しとどめた荷を、胸を張り背筋を伸ばして無理矢理にでも背にそらして、せいぜい自信と威厳に満ちた様子で、できる限り涼やかに歩く。そうすることしか、今のシャツコーにはできない。

城の北側となる大手の城門は前城とでも呼ぶべき規模の砦門だ。門と  
いうより城壁と一体化した砦となっていて、二階までを持ち、同時に数

百名もが起居できる。しかし規模はともかく実際の作りは、防衛よりも騎士たちの詰め所や迎賓の場としての機能を重視しており、主門の両脇に副門が二つという開けた作りで、守るにはまるで向いていない。

一階は正門として石造りの拱門を整えるために天井を高くとり、本来の二階分ほどの高さを一階部分が占めている。加えて屋上には形だけながら防衛のための石壁と挟間がしつらえてあるから、砦門としてはある程度の高さがあった。

その門を外へと出てから丘を緩やかに下りきるまで続く石畳は、城がうづくまる丘陵の周囲を巡らせた低い城壁を抜けて、北正面の外門へ、その先の城下へと繋がっている。

シャツコーは、その迎賓門と呼ばれている砦門に入ろうとしていた時、東側の小庭園に銀色に輝くものをみつけた。

古い城壁の外側には、城で働く使用人たちの住居や、城に付随する建

物が多くある。西側は日当たりが悪くなるため、使用人たちの住居や馬房などがあり、東側には城と関係の深い施設が多く、書庫や礼拝堂などがある。

書庫と礼拝堂は王の居館と繋がっていて、地位が高い限られたものしか利用を許されておらず、実質的に王族か王の近臣、もしくは騎士でも騎士団長級のものでなければ、近寄ることすらできなかつた。

東の門塔の裏手すぐの、大地母神へ祈りを捧げるための礼拝堂と、王の所有する書物を収める書庫の間には古い井戸があり、その周りの一角は小さな庭になっていた。

その小さな庭に白銀の輝きを認めたとき、シャツコーの銀の鎧は軋んで、高い音で鳴った。

\* \* \*

小さな庭に咲く花は、俯いて佇んでいる。

微かな潮の香りを含んで城の丘陵を駆け上がる風は、まばらに立つ低木の間をすり抜けるうちに緑に染まり、礼拝堂を脇を掠めて城の城壁に突き当たり、戯れるように涼やかな声を上げながらその身を振った。

「姫……」

それが風にかき消されるかもしれないほど遠くで、シャツコーは鎧を鳴らしてひざまずき、ベルトリオーダ姫の背中に声をかけた。

草の上に、丸袴の波裾を一輪の春車菊の花のように丸く広げたまま、ベルトリオーダは体をゆつくりと捻り、

「ベルタでいいのよ、シャツコー。この庭では」と、笑った。

風を受けて、銀の髪は乾いて散っている。

ベルトリオーダは、海を見ていた。

彼女の視線の先には、河と湿地帯を挟んで海があり、湾曲して続く海岸の先にはこの国で最も規模の大きいカナルテ港がある。

「何をなさっておいてですか」

「風で聞こえないわ。シャツコー、もっと近くへ」

騎士は迷わず従って一度立ち上がって近寄り、しかし、姫との距離はもとの半分程度でまた片膝をつく。

姫が、騎士の名をまた呼ぶ。今度は座ったまま騎士の方に向き直り、誘うように手を伸ばす。

騎士はそれに従ってまた立ち上がり、姫の手が自分に触れない距離を保ってまた控えた。

姫は、手を伸ばしたままでその騎士を見つめ続けている。

騎士が、立て膝のままでもう一步だけ近寄ると、姫はその指で騎士の



頬に触れた。

この庭でのおきまりの、儀式。ふたりに表情はない。

姫は、俯いた騎士の頬を手のひらでなでるようにして持ち上げて、視線を合わせると、その手を離した。

「これを読んでいました」

ベルトリオーダの膝には、一冊の本が乗っている。なめし革を張ってあり、とりたてて細工はなく、分厚い表紙がただただ頑丈そうな作りだ。シャッコーは言葉が喉につかえ、黙ってベルトリオーダの瞳の輝きを見つめる。

「もとは異国の本なのです。魔導士長の書庫から借りてきたものなのですが。異国の言葉で書かれたものをどなたかが訳して、それを魔導士長が本にしたそうです」

本は、シャッコーの手に渡る。分厚く、重い。

「これは……写本ではないのですね」

「木の板に墨を着けるための文字を彫りつけ、一葉ごとにそれを作るということです。手間はかかりますが、まったく同じ紙葉が何枚でも作れるようになる」と

「……なるほど、それは面白い。しかし何度も言いますが、あの書物の牢獄へ近づかれるのはおやめください」

そういうシャツコーに、ベルトリオードは笑みを返す。

牢獄というのは、比喻だけではない。

魔導士長は、城の地下にあるもとは牢獄だった場所を、その居となしている。魔導士長の側に仕える魔導士たちの詰め所も場所を同じくしている。

地下とはいうものの、今では城の建つ台地を横様に掘り抜いた横穴と繋がってしまっている。横穴は本来は城内から外への抜け道として使わ

れるはずだったものだが、書物の保管のためという理由をつけて、地下まで風が抜けるように魔導士長が隧道を整備してしまったのだ。

一体どのようなにしたものか、地下の書庫には日の光が差す部分までがあるということだ。

そもそも長期の籠城などができるような城ではなく、例え非常時の抜け道としての機能を失ったとしても本気で咎める者がいなかったために、城の地下はいつの間にか魔導士長の好きにされてしまったのだ。

本来の牢の役割は遙か昔に他の城へ移されてしまっている。戦があった時代は、主に戦で捕らえた敵兵の収容と拷問に使うための牢獄だった。しかし、長く平和な国ではもとの目的は失われて、古い武具などの倉庫と化してしまっていた。

魔導士長が空いていた地下階に居を構えてから数十年のうちに、牢獄は大きく改築されていき、今では巨大な本棚が壁を覆い尽くしていて、

その蔵書は王の書庫に収められている蔵書数を遙かに超えているという。ベルトリオーダが楽しそうに語るには、この国にある書物のうちの九割以上は、魔導士長の書庫にあるはずだということだ。

実際にその蔵書によつて、魔導士長は学を求める者たちには一目を置かれている。重臣の中にも、魔導士長が所有する本を頻繁に借りるものが何人もいて、それが魔導士長の書庫をさらに充実させる一因になっている。

ベルトリオーダも、今ではそういった者の中の一人だ。

「魔導士長に尋ねてみたことがあります。何のために、あれほどの書物を集めるのかと」

ベルトリオーダのその言葉に、シャツコーは泡を食う。

「魔導士長と、話をされたのですか」

「あの方は、魔物でも、怪異でもありません」

ベルトリオーダが、可笑しそうに返した。

その親しげな様子にシャツコーは不満を覚えるのだが、しかし建前上は、魔導士長の階級は近衛騎士団長の自分と同格かそれ以上となる。主君の前で、悪し様に言うことなどできない。

ここ数年、ベルトリオーダが魔導士長の書庫に足繁く出入りしていることは、近臣の間で知られていることだ。

はじめは、たまの慰みに読み物を求める程度のもので、それならば王の書庫で事足りていた。

王の書庫は王族が収集している美術品の保管庫も兼ねていて、書物に加えて王が所有する美術品などもいくらか收藏してはいるものの、結局のところそれらのほとんどは蔵したままになっている。

武人の王が興した国の気風か、ナインスの王族は華美をあまり好まない。浪費も厭う。国が安らかな一因に、その気風が税の安さに直結して

いることもある。

それだけに美術品の数は知れていて、まるでただの壁飾りか何かのよ  
うに扱われてしまっている。同様に、書物の数もたかが知れていた。ベ  
ルトリオードには、それだけの書物では不足だったのだろう。

十三の折に、動きづらいというただその理由でその健やかな背に美し  
かった髪をうなじの辺りではっきり切り捨てて、お付きの者たちを恐慌  
の渦に叩き込んだことがある。

侍女たちの中に卒倒する者や泣き崩れる者が出たのは、ベルトリオ  
ードもさすがに当人としても堪えたらしく、それからは二度と自分で髪を  
触ることなどはない。

今の彼女は、王族としてすでに逝去した王妃の空席を埋め、堅牢な城  
の壁に民に向かって咲く可憐な花だ。それでいて早々に王の所有する本  
にあらかた目を通してしまったのは、ただ本が好きだということだけで

はない。

ベルトリオーダの側に長く仕え、さらに近衛騎士団長となり治世というものの舞台裏が幾分わかってきているシヤッコーだ。説教の続きをため息に変えて、先ほどの問いを掘り返す。

「それで、魔導士長はなんのために書物を集めていると」

「それには答えていただけませんでした。ですから、自分で調べてみようかと」

即座に諫めるシヤッコーに、ベルトリオーダが尋ねる。

「魔導士長が交易船に、何人かの部下を送っているのは知っていますか」

「はい」

「その使者の中に、魔導士長本人が混じっているという噂があります」  
ベルトリオーダが悪戯っぽく笑い、シヤッコーが言葉を失う。

「それについても尋ねてみました」

そのまま固まるシャツコーを尻目に、屈託なく続ける。

「否定はしませんでしたよ」

シャツコーは、めったなことはおっしやいませんようにと、そう諭すのがやつとだ。ベルトリオーダはほとんど気に止めず続ける。

「魔導士長の、あの本の話はしましたね」

「他国に、罪人を連れて行ったという……」

魔導士長の手の者が、盗みを働く折りに人を殺めて死罪となった浮浪児を、密かに他国に連れ出した。そして、その者が十八になるのを待ったのだという。

誰かが見たという事実として信じられているそのままに、その罪人はもがき苦しみ始め、痛みにのたうち声が嗄れるまで泣き叫び続けた末に、事切れた。本にはその様が、子細に渡って書かれている。さらにその死



体を腑分けして検分を行っており、その凶録までも付いた本だ。

ベルトリオーダが読んだと聞いてシャツコーも手に入れて読んだが、人ひとりが眼前でのたうち回りながら死にゆく様の冷静かつ緻密な描写に吐き気を催し、すべてには目を通していない。

ベルトリオーダの話では、魔導士長に許可を得て書庫に入れるようになる、同時に本を借り出すことができるようになるそう。シャツコーは、魔導士長の書庫から本を借りるのに自身の一族の者を介した。その際に、魔導士長の書庫に出入りしている者が実際に幾人もいることを知ったのだ。

件の本の作られた経緯について義憤めいたものを抱いたシャツコーをベルトリオーダが宥めるには、それは呪われているのがナインスの大地ではなく、ナインスの民だということの証左を録した本なのだという。

そういった話は昔話のごとく語られていて、巷間であまりにも有名な

ものだ。呪いを恐れて他国に逃げたナインス国の少年が、遠い地で十八になり死んだと、どこへ逃げても無駄なのだと、そういう戒めを示した寓話だ。

その寓話が事実かどうかを確認するために、魔導士長はそれをしたのだろうと、ベルトリオードは言う。

確かに理屈は通るが、シャツコーには得心がいかない。そのようなことを、書に残す必要があるとも思えない。この国の者で護りの紋をその身に受けずに生き残る者など、一人もいるわけではないのだ。本の奥付けに記された魔導士長の署名を、どこか苦々しい気持ちで見た。

この国では民に無用な恐れを抱かせないために、護りの紋の彫り入れは国の施策として行われている。望む望まないに関わらず、善悪にも貧富にもよらず、すべての民が入れ墨をその身に刻むこととなる。そのため、実際に呪いで死ぬ者を見ることは非常に難しいのだ。

「我が国にいる魔の業を用いることのできる者のすべては、異国より訪れたもの。なぜなら、若くして魔の才があるとなわかつた者でも、十八になる前に護りの紋を身に受ければその力を失うからです」

ベルトリオーダはいつの間にか、シャツコーに正面から語りかける姿勢を取っている。

「それは聞いたことがあります。が……、それが何か」

シャツコーは、ひどく素直に問い返す。

と、風が一際強く吹きつけ、二人は目をつむった。どつと轟いた風音が、去るのを待つ。その一陣は、ベルトリオーダの胸中から出でようとしていたものを、吹き戻した。

「シャツコー。あなたに願いがあるのです」

ベルトリオーダは、代わりに取り出した満面の笑顔をシャツコーに見せた。

「私にできることでしたら、なんなりと」  
甘い、嫌な予感がした。

雑踏は、濁った濃い霧のようだ。

その濃厚にまとわりつく霧のような、先が見えない故の不快な緊張を強いる雑踏を、掻き分けながら進む。

城下の街の中心部だ。様々な商いをする店が通りの両側に並んで、人々が石畳を踏む音、語り合う声が幾重にも重なって、どこかぼんやりとした喧噪を生んでいる。

わざと目抜き通りをはずして歩いているのだが、道幅がないためにか

えつて人が多いようにも感じられる。

シャツコーが白地に金糸を刺した騎士団の式服を着て、さらに無駄に派手な細工を束や鞆に施した剣をことさらひけらかすように帯びているため、雑踏のくすんだ色彩の中ではかなり目を引く。ともすれば自然に通りの人波は割れるが、それとは逆に、割れた波間から出てそのまま騎士たちにぶつかってくる者もいる。

そのシャツコーの背後には、頭巾付きの外套を羽織った騎士が四人、頭巾を目深にして、道を行く誰かがシャツコーにぶつかるようにするたびに、さりげなく身構える様子を見せている。

傍目には、名のある騎士か貴族が、部下と共に市井を物見でもしているように見えるだろう。

シャツコーを先頭に小柄な騎士を中央にして、五人が十字の形に並んでいる。

テュルダー家のリオン。それがシャツコーのすぐ後ろに付く、背が低く色白の若い騎士の名だ。一見すると外套にすっきりと隠れる軽装に見えるが、套の下には鎖帷子に重ねて急所を守る兜と甲冑を身につけさせられている。

テュルダー家は十年以上前に血が絶えた、王家に近い家名だ。領地はないが正式に廃絶というわけではなく、家名としては休眠させているというのが正しい。もしふさわしい者——つまり王家に利をもたらず者が現れた場合には、この家名を継がせて王家に組み込むために残してある。そのような家名のうちのひとつだ。

リオンの名は、ベルトリオン——つまりベルトリオーダが男だった時に与えられたかもしれない名をもじっただけのものだ。彼女は自分にそう名づけて、普段は絶対に穿くことのない股引まで穿いて少年騎士に扮している。

ベルトリオーダは母親に似て線が細いこともあり、たおやかに、時に病弱にすら見える。

公の場では父の隣にただ控えていて、口を開くことも少ない。その所作は普段の近習に囲まれているときでも変わりない。そのベルトリオーダが身分を隠して城下を出歩くなど、実際に目にした者でも信じがたいことだ。

シャツコーから見ても、公の場では努めて控えめに振る舞うようにしているのが手に取るようにわかるのに、それでもこのような時には無理を通して、わざわざ仮装をしてまで街に出るのだ。

最初は、ベルトリオーダが十五の時だった。

密かに城の裏手から抜け出し、街道を歩いてカナルテの港まで一人で歩いて行ってしまった。城中が慌てふためいている中にまた一人で帰ってきて、けろりとするには、船を実際に間近で見てみたかったのだとい

う。

そもそもベルトリオーダは、母を亡くした後には、その代役をこなすという意識もあつたのかたびたび王に願い出て、城から街へと下つては民の前にその姿を見せていた。時には民と直接に言葉を交わすこともあり、シャツコーら護衛の者たちに、余分な冷や汗を流させている。

十五の時の港への出奔も、彼女なりに見聞を広めて王の助けになりたいたいという気持ちが高じてのことではないかと、周囲はどちらかと言えば好意的に受け取った。

シャツコーは、そうではなかったが。

そのころから時折、ベルトリオーダは姫として民と親しむこととは別に、身分を隠して街を歩くようになった。

姫としての姿を見せることをやめたわけではない。しかし、騎士リオンとして街へ出る回数が、特にここ一年ほどで急激に増えていた。



ベルトリオーダは完全にお忍びのつもりかもしれないが、実際には近衛騎士だけでも十人以上が警護に付き従っている。他に姫付きの近習も、何人かが離れて付いてきている。

王は渋い顔をしつつも、姫の勝手を認めていた。王が、何をもつてそのようなことを認めるのか、シャツコーには皆目わからない。

名目としては、近衛騎士団の何人かが特に役目に関係なく街を見回っていることになっている。シャツコーが無駄に目立つ式服を着ているのは、もちろん故意だ。

騎士の囲みの中からリオンは辺りを物色しつつ、興味を惹くものを見つけてると、シャツコーの背中をついと引きながら、そちらへ近寄っていく。

ふたりを追って、従う三人の騎士たちも動く。頭巾の下では、鋭い瞳が左右を窺っている。間合いに薄い膜を作って張り詰めた彼らの気配の

固まりが、人の流れにもまれながら刻々と形を変える。

と、人の波間を分けて、何者かが早足にリオンの方へと近づこうとした。

感覚を研ぎ澄ましているシャツコーが反射的にその者の体をひつつかんで覆い被さり、身を預けるようにして上から一息に押しつぶす。

短くあがった悲鳴が緊迫の膜を切り破って、辺りの霧を冷やした。冷えた霧は地に近く下がって、辺りが急にすっきりと見えるようになる。

シャツコーがあらためて自分の下にした相手の姿を認めて、慌てて身を起こそうする。ひどく相手の身が小さい。

かなり小柄な、リオンと同じくらいの年頃の少女だ。

「大丈夫だ……。すまない。ぶつかってしまったな」

シャツコーはあたりに聞こえるように声を出しつつ、相手の身体を力任せに引き起こす。周囲の緊張が、幾分わざとらしく緩んだ。止まった

いくつもの足が、再び歩を刻み始める。

リオンを囲み、三人揃って辺りをにらみつけながら腰を落とした部下を横目に見て、シャツコーは苦笑した。不意の事態が起きた場合は、リオンを護つて逃げろと指示してある。

盾になる気概はいいが、その場にいたままでは敵に弓手でもあればただの的だ。

リオンも驚きで身を固くして、その場に立ちすくんでいる。

シャツコーは片手を高く上げて、周りから走り寄ろうとしているだろう護衛の騎士たちを制す。もう一方の手は、少女の腕を強く掴んでいる。それに加えて少女は、リオンを囲んだ騎士たちの殺気のこもった視線をまともに受け、怯えきつてしまい声もない。

リオンはただ驚いていたが、その丸い目が少女の目と合った。

「おいキーエ！」

胴間声が聞こえ、少女がぴくりと背筋を伸ばす。

人の流れを太い腕で割って、背の低い男が顔を出した。何が染みこんだのか赤茶けたまだら模様になった前掛けを丸い腹に巻き付けている。

酒樽が前掛けをしたような体をした親爺だ。リオンを囲んだ騎士たちがいまだにまもっていた、ただならない気配の残り香を感じ取って慌てる。

「騎士様、娘が失礼を」

シャツコーを位の高い騎士だと認めた親爺の目に怯えが走り、無駄に上下した顎につられて詫びの言葉は震えた。

「いや、少々ぶつかっただけだ。大したことはない」

シャツコーは親爺の萎縮した態度に覚えた苛つきを取り繕い、尊大に応じる。不機嫌か不遜かの違いしか生まれはしなかった。

親爺は一度シャツコーと目があうと視線をはずせなくなったらしく、

そのまま無言でシャツコーへとにじりよって少女の腕を取り、ぐいと胸元に引きよせた。

体を大きく傾がせた少女が、逆らうように足を踏ん張って、拒否の金切り声を上げる。

が、焦っている親爺はそれに構わず力任せに腕をひき、少女は膝から崩れて引きずられていく。あまりに強引なので、さすがにシャツコーは少女の細い腕が抜けでもするのではないかと心配になってしまふ。しばし気をとられ、その脇からリオンがするりと人垣を抜けて、少女のあとを追いかけるのをただ許してしまつた。

気が急いで、小さくしかし激しく辺りに向かって退けと叫ぶと、人の流れはびくりと引きつって、シャツコーの前に道ができた。

通りに面した、肉を商う店だ。

店先に据えられた小さな炭火の上には、羊肉の串焼きが並んでいる。

生の肉に加えて、調理済の軽い肉料理も供しているのだ。

親爺の初めは生成り色だったはずの前掛けのまだら模様は、血と調味料の染みが幾重にも重なったものだ。

「お待ちなさい」

悲鳴を上げながら店の奥に引きずり込まれていく少女を見るに見かねて、リオンが親爺に声をかけた。

親爺が戸惑った顔で振り向き、多少なりとも罰が悪かったのか少女の腕を離れた。少女は横座りにべそをかいていて、リオンは跪くと少女が石畳みにしたたかにぶつけた膝を見てやる。

「私の名はリオン。騎士だ」

リオンが非難めいた口調で名乗り、親爺を軽くにらみつけようとしたところで、シャッコーの手のひらに頭を押さえつけられる。

「勝手なことをするな、リオン」

そのような扱いをされることに慣れていないために、リオンは目を丸くしてシャツコーを振り仰ぐ。何事か言おうとしているのか、口が半開きになったが言葉はない。

そこへリオンの警護にしていた騎士たちが走り寄ってきて、親爺が怯みつつも迷惑そうな顔をした。

小さな店だ。場違いに優雅な装いをしている騎士に加えて、さらに少々妖しげで物々しい四人が店先に並んでいては、商売の邪魔以外の何者でもない。

店の中には申し訳程度に、小さな食卓が二脚だけ据えられていた。シャツコーは親爺に声をかけて、奥の席へリオンと少女を誘う。他の騎士は指示を受けて、店の表と裏に散った。

その様子を奥から窺っていた女が、シャツコーたちのもとへ茶を運んでくる。茶器を差し出す手が、大仰に震えていて、茶が派手にこぼれる。

「すまないな。何か売ってくれるか。表にあったやつでも、ふたりぶんを頼む」

少女の母親らしき、顔中にほとんど隙間なく墨を入れた女のあまりの狼狽ぶりに、シャツコーはさすがに気の毒になり、いくらか気を遣う。すると今度は父親の方が、大仰にばたばたしはじめた。

リオンは腰をおろすと外套の被りを取った。布巻で髪を纏めた上から万一に備えて軽量の兜をかぶっているが、性別は隠せない。

その隣に腰掛けた少女はまだぐずっていたが、リオンが女だと気づいて、まじまじと見つめ始めた。

リオンが少女に笑いかけ、偽りを名乗る。

少女が涙やら鼻水やらで顔を汚していたのを見かねて、母親が薄汚れた手ぬぐいでその顔を拭ってやりはじめた。ちょうど肉料理を運んできた酒樽似の父親と共に、さきほどは失礼をいたしましたと、シャツコー



に詫び始める。

この家族のうち誰ひとりとして、ナインス国の姫の顔を知ってはいなかった。王や姫を遠目に見たことはあっても、顔などよほどのことでもないかぎりわかりはしない。

少女の父も母も、シャツコーの方に畏まっている。それはそれで、無駄に目立つ服を着ている甲斐があるというものだ。だが、薄暗く埃っぽい店の奥で、リオンの存在はシャツコーとは別の意味での異彩を放っているにもかかわらず、少女の両親は見向きもしないのが、シャツコーには少々納得がいかない。

「この子は、怖がっているのです」

ひとしきり娘の顔を拭い、今度は髪の毛を指で梳いてやりながら、母親が口を開いた。

「彫り師さんが言うには、縁の弱いたちだから、たぶん入れ墨の量がか

なり多くなるだろうと」

民の間では、魔の力や呪いといった言葉を使うことは敬遠されている。古くからの信仰と交わって、魔の力は大地との縁の力や地母神の祝福の力などと呼ばれている。

そもそも、魔女の呪いを同じくその源を示す魔の力で防ぐという理屈は、忌まわしい上に飲み込みがたく、好まれるものではない。

長い間に、呪文の入れ墨は護りの紋と呼びかえられ、成人の儀式の一部として、祝い事とされている。

長きにわたって呪いに抗し続けてきた護りの紋は、今はその術を誤ることはない。一度護りの紋を体に入れてしまえば、その後は何の心配もなく生きていける。

この地で生きる者たちにとって、入れ墨を入れ終わることはまさに慶事だ。

「もしま、まだ少しも墨を入れていないのですか」

リオンは、意識して低い声でしゃべっている。それでもあまり低くはないが、もともと少しかすれた、どこかしら父親に似た雰囲気のある声をしていたから、少年のようにも聞こえなくはない。顔を晒した以上、すでに意味はないが、以前から幾度も素性を隠して街を歩いているため、少年騎士を演じることが癖になっている。

「ひどく怖がって嫌がるのが可哀想に思えて、今の今までのばしてきてしまいました。今日こそは彫り師さんのところへ連れていくつもりだったのですが、逃げ出してしまっ」

母親が、少女の頭をなでる。

ナインス国では入れ墨の技が進み、彫るにあたっては子供でも我慢できるほどの痛みしかなくなっている。彫り師は、一応は護りの紋を専門にする魔導士とされているのだが、呪文の文様や量を判断する魔導士以

外は全て手技の職人だ。彼らの腕はおしなべて優れている。

しかしそれでも、全身に墨を入れるには一朝一夕にはいかない。

墨を入れるためには肌に針を入れなければならないのだから、痛みがないわけがなく、当然ある程度の出血もある。専用に調合された塗り薬もあり回復は早いが、あまりぞんざいなことをして悪くすれば命にも関わる。

どれほど急いだとしても、全身に墨を入れるには最低でも二十日程度はかかる。それが、精神的にも肉体的にも人が耐えられる限界だ。

多くの者は、子供の頃から少しずつ彫り始める。子を思う親心もあり、まずは目立たないところからほんの少しずつはじめて、年を取るごとに少しずつ足していき、成人前に顔などの目立つところに彫り入れて呪文を仕上げるようにする場合がほとんどだ。

子供たちも、護りの紋の大切さなどを幼い頃から親などに言い聞かせ

られているのだが、それに倍するほどに、墨を入れる際の痛みだとか怖さだとか余計なものを周囲から吹き込まれてしまう。

「そう心配せずとも、三月も彫り師に通えば終わる。それに、縁起が弱いものの方が辛くはないものだ」

シャツコーは、自分が墨を入れたときのことを思い出す。

魔の力が強い者の多くが、墨を入れる際にひどい疲労感や発熱などを訴える。例えば彫ったあとの肌の傷のせいで発熱したり傷口から病になつたりするのは異なり、はつきりとは理由のわからない体の不調が、新しい呪文を入れたあとにしばらく続くのだ。

彫り熱などとも呼ばれていて、しばらく大人しくしていれば自然治癒するのだが、人によつては、肌に刻む呪文を増やすたびに寝込むことになる。

シャツコーの場合は、彫り入れなければならぬ呪文の量自体は比較

的に少なかつたのだが、一気に増やすとしばらく体調を崩してしまつた  
め、本当に少しずつ増やしていったのだ。少女の入れ墨を恐れる気持ち  
には、感じることもある。

少女が彫り師から縁起が弱いと言われているならば、他よりも多くの  
呪文を身に刻まなくてはならず、針を刺す数も墨の量も多く、受けなけ  
ればならない痛みもまた多い。

縁起の弱さ——つまり魔の力の弱さによつては、頭髪を剃つてまで墨  
を入れなければならなくなることも、ごく希にあるのだ。

「すごく痛いんでしょ」

少女が気弱そうな目でリオンに問い、似た色が差した瞳でリオンがシ  
ヤッコーを見る。

リオンは、まだ一滴の墨をも、その肌に入れてはいない。

身分の高い者の多くは、家に専属の魔導士を雇い入れている。そうし

なくとも貴族などであれば、魔導士長以下の王宮魔導士にも顔が利く。護りの紋を彫り入れるにも、好きなときに魔導士を呼びつけ、好きなときに好きな量の墨をいれることができる。ともすれば順番待ちをしななければならなくなる市井の者たちとは、事情が違っている。

特に良家の娘は、墨を入れるのが遅くなる傾向があった。

すでに世を去った王妃は非常に強い魔の力を持ち、首から上にはただ右目の下にだけ、まるで装身具の代わりかのように、申し訳程度に護りの紋が彫られていただけだった。

民の間では、女が顔に墨を入れないのは忌まれている。魔の力の強さが、呪いの魔女を想起させるためだ。王家よりもさらに古い貴族の家系を継ぐ王妃も同様だったのだが、王妃がその顔にほとんど墨を入れないことを許されたのはその美貌のゆえだった。

その夫——王もその父の血を引いて魔の力が強く、生来より柔和だっ

た面持ちに戦士の面体を作るために、強いて顔に多くの墨を集めている。元来は顔に彫り入れるような呪文ではないものが王の顔にはあると、似たような処置をしたシャツコーは知っていた。

おそらく姫の場合は王妃と同じようなことになるだろうと、シャツコーは予想している。

「皆が皆、我慢できるくらいの痛みだ。慣れてしまえば、彫っている時間を待つのが退屈なぐらいだ」

シャツコーは、できる限り優しく言う。

リオンもまた少女の手を取って、勇気づけ始めた。シャツコーは、皿に盛られた肉に手をつけ、旨味に混じった焦げた苦みを味わいながらそれを見守った。リオンは、自分もまた護りの紋を未だに入れていないことには触れなかった。

シャツコーは、傍らで畏まっている親爺に肉の味を褒める声をかけて



から、その娘に年を尋ねた。十七になつて四月がたったという。小柄で子供っぽく見えるが、リオンより幾月か生まれが遅いだけだ。護りの紋を入れるには、まだ時間は十分にある。

シャツコーの名で、腕の良い魔導士を紹介することにした。ヤルモット家に縁のある魔導士ならば心当たりがある。貴族付きの魔導士は金に汚いところもあるが、少なくともシャツコーの口添えがあれば、少女がぞんざいな扱いを受けることはないだろう。

シャツコーはそのような説明を少女の家族とリオンにして満足させて、リオンを促して店を出た。間際に店の親爺に肉料理の値段を尋ねると、思ったよりも遙かに高い金額を口にしたが、その言い値に余る銀貨を渡しておいた。

店を出ると、通りの人の流れが変わっていた。右手に見える辻の辺りに人が集まっていて、流れが滞っている。

シャツコーはほとんど反射的に反対側へ歩き出したものの、背中のリオンがまったく着いてこなかった。人の壁の向こうに何か動いているのが見え、リオンはそれを確かめようと、一步一步背伸びをしながら近寄っている。

慌ててリオンに駆け寄って、その視線の先を辿る。

「あれは、おそらく神追ですね」

上背のあるシャツコーの目線では人々の頭の向こうに、生気のないばさついた黒く長い毛が不自然なぎこちない揺れ方をしながら、動いているのが見えた。通りを動くそれを見るために、見物人が集まっているのだ。

「神を追うのですか」

言いながら、リオンは通りすぎていったその神の後を追うように人の間をすり抜けていく。より体格の大きいシャツコーは追いかけるのに苦

勞する。離れそうになって、思わずリオンの肩を掴んだ。そのままリオンを横へ押し、人混みを突っ切って通りに入る。

神を運ぶ荷車のすぐ後ろに出た。

荷車には、不格好な獣のような、手足のない人形が乗っている。追われる神だ。

前年に収穫された麦の藁を使って体の芯を作り、それに牛の毛皮を張り包み、馬の鬣と尻尾の毛を頭髮に見立てて付けてある。

神の乗り物としては貧相な古びた荷車はふたりの男に引かれて、石畳みの凹凸に小刻みに揺れながら、ゆっくりと通りを進んでいく。

リオンは荷車にやたらとまとわりつこうとする子供たちに混じって、荷車の横に出たり、おそるおそる前から神の顔——実際には顔はないが

——をのぞき込んだりして、その姿を興味深そうに観察していた。

その動きが目立ってしまったので、シャツコーは体を張って守る

ことをあきらめて、周囲を注視することに集中した。配下のうち二名は荷車の両脇に貼り付け、常に先行させている。

幸いシャツコーたちと同じように荷車の後についていく者たちはかなりいて、式服があまりに場違いなシャツコーが際だって衆目を集めるため、他の騎士たちには人々の目がいかない。

「あれで、神なのですか」

満足するまで神を眺めたりオンが、シャツコーの側へ戻って来て尋ねる。リオンの内にある神の姿の典型とは似つかないのだ。例えばナインスで広く信仰の対象となっている地母神は、太った女性として絵や像にその姿を現していることが多い。

「言わば災いの神なのです。地母神の大小便から生まれたとも、病で死んだ牛馬の魂とも言われているようですが」

シャツコーが以前に住んでいた、父から受け継いだ館の近くでも、神

が追われていく通りがあり、子供の頃には見物にも行った。記憶の中の神には、角が生えていたような気もする。

神の足下——荷車の荷台の中には、花や食べ物などが入っている。

と、通りの脇にいた老婆が神に寄って、その頭の上に一握りの穀粒を撒いた。粒のいくつかが神の頭に残って、白い虫にも見える。おまえに祝福があらんことをと、荷車の引き役たちから大きな声がかかる。祝福をと、見物人から返る声がある。

「災い、ですか」

今の光景を見て、リオンが尋ね返す。

「畑の神でもあるのですが——」

シャツコーが答えようとしたところで、荷車が止まった。荷車の引き手が荷台の方を振り返り、通りの左右に集った人々が自然と黙す。

一人の男が荷車を待っていた。木の枝を切りそろえただけの棍棒を手

にしている。青い顔で神に二三歩み寄ると、棍棒を振り上げて神を殴った。力がなく、ぼこりと抜けた音がして、それが静まりかえった通りにぼんやり広がった。

また殴る。体に力は入っているのに、神の身を打つ力は弱い。あまりにぎこちないのだ。

男の息は荒く、無駄に力が入っている。

また殴り、今度は神の体が倒れる。倒れたところに、棍棒を振り下ろす。藁が潰れて棍棒が荷台を叩く。

さらに殴り、殴る。

殴るほどに男の感情は昂ぶり、その口から唸りが漏れ始める。それで一気にたががはずれて、神とも荷台ともなく、狂ったようにめったやたらに殴りつけ始めた。

リオンは目を奪われ、身を固くして声もない。シャツコーは、こうい

った光景がくり広げられることも念頭にあったが、リオンを放っておいたのだ。

神の体から藁が飛び出て、乾いた切れ端が舞っている。髪の毛はとつくにはずれて、荷台でひとかたまりになって広がっている。

男は狂ったように叫んでいる。

殴るという行為は繰り返しているうちに壊れてしまい、子供がだだをこねる様と同じになっている。わけのわからないことを口にして、泣き叫んでいる様子もまるで同じだ。

ほどなく、男は泣き崩れた。興奮しすぎているのか、小刻みにしゃくりあげているためか、呼吸がまともにできていず、棍棒も取り落としている。

終わったのだ。

泣き崩れた男の脇で押し黙って見守っていたその知人たちは、荷台の

中に倒れてしまった神の体を丁寧起こして姿を整え、真つ赤に開いた蜘蛛百合の花束を供えた。また他の者が酒に指を浸しながら、神の体へ振りかけた。

シャツコーは、大きく息をついたりオンの右耳にささやく。

「ああいった怒りや哀しみをも引き受けてくれる神なのです。不幸があった者は、あの神に恨みをぶつけることが許されています」

不幸とは、例えば事故や病で家族を失ったり、家畜の多くを伝染病で失ったりというものだ。周りの者が気を利かせて、神追を取り仕切る者たちに知らせをいれておくのが、通例になっている。

神にぶつけなくてはならないような、行きどころのない感情を取り立てて持たない者も周囲から不幸があつたと知られていれば、形だけでも石を投げる習わしだ。木で打つても石を投げて拳で殴つてもいい。ただし、刃物は不吉なため、禁じられている。血を流してはいけない。そ



ういった決まりがあるのだ。同じ理由で、神には鳥獣の肉を供してもいけない。

本質的に祀りというよりは弔いだが、災いの神の弔いだったから、あの種の祭りとなつてもいる。

神は街外れの川岸まで運ばれた。街から橋を渡つた向こう側の、岸辺までだ。

結局リオンも付いてきて、同じく川岸に集まつた群衆の中にいる。大人しくなつたりオンを、騎士たちは生真面目に十字の陣で囲んでいる。

同じように街を抜けてきた合わせて四体の神が、先にしつらえてあつた木製の台座に並べられる。米や酒をかけられたり殴られたりしてきた神々は三者三様の姿をして、それぞれがそれぞれに汚れたりくたびれたりしている。

大地母神の祭司が祝詞を捧げ、台座の下に詰め込まれた藁に火を付け

た。乾いた藁が瞬く間に火を広げる。群衆から声上がる。

「あれを焼いた後の灰は、持ち帰って田畑に撒くと次の収穫が豊かになると信じられています。家畜の餌に混ぜるとか、家の壁に塗り込むとか、少々違ったやり方もあるようです」

神々はあつけなく、内側から軽々と燃え上がる。

「災いの神の死骸を、ですか」

「はい。このあと水掛けの儀式が済むと、燃えさしの奪い合いになります。確か昔話にも似たようなものがあつたように思います」

集まつた多くの人々は、見物そのものが目当てでもあり、灰というあらゆる種の御利益が目当てでもあつた。皆の顔は一様に嬉々として朗らかだ。

「あ、メティラとモシンの兄弟喧嘩神話ですね」

リオンの口にしたその神々の名前はあいにくとシャツコーには聞き覚えがなかったが、リオンは納得がいったようだった。シャツコーが目の

前の光景から思い出したのは、竈の精が化身した老婆を麦畑で燃やすと  
いうような話だったが、神追との関わりが自分でも全くわからず、考え  
ることをやめた。

リオンはそこに立ったまま、神を燃やした後の灰に群がる人々に混ざ  
らず、一言も発さず、しかし去りもせず、ただ死骸を荒らされる神を見  
つめていた。

シャツコーは背中に、リオンの思いが張り付き染み通らないものだろ  
うかと少し気にしてみる努力をしたが、やはり徒労でしかなかった。

遠い海に波は見えず、雲間から差した夕日の色を平らかに映している。

姫に付き従つて城へ歸つて来たシャツコーを待ち受けていたのは、姫の婚約者が城に到着したという一報だった。

もう数年も前から噂になつていたことで、そろそろだという噂もまた最近流れていた。ただしそれが今日だということを知つていたはずだと、シャツコーは知らなかつた。ベルトリオーダはおそらく知つていたはずだと、シャツコーは思つた。

姫を自室へ送つた足で、王の元へ参じる。王は二人の近臣と歓談して  
いた。

玉座の間の扉を抜けてすぐの場所で止まり、王に姫の帰城を報告する。  
今日のこの日に姫の外出を許可した理由を尋ねてみたいという湧き上  
がるものを無視して、姫の婚約者が到着していることについて端的に尋  
ねる。

「確かに、到着されている。姫様の婿になられるお方だ」

王ではなく、近臣のひとりが応じた。

御前の儀に参加することを許されているシャツコーが、まるで知らなかったことだ。王と一部の側近のみで、内密にその差配を行ってきたものだとは知れた。

「もつとも、ピジョニアとで婿取りの話が固まったのは、もう一年も前の話だったかな。しかも、そもそもは第二王子を取るはずだったのだ」  
王はすこぶる上機嫌で、舌が滑らかだった。

ナインスとピジョニアは、海運によって貿易を行っている。国同士は地続きなのだが、間に険しい山脈が横たわっているため、陸路は物を大量に運ぶには適さないのだ。

ナインスにはとりたてて輸出できるようなものはなかったが、銀については国内の山地に小規模ながら鉱脈があり、いくらかの余裕があったため、それを貿易の直接的な対価としている。

ピジョニアからは、主に工芸品や嗜好品を輸入している。ナインス国は戦がないため内政に力を入れることができしており、国土は豊かで食料に困ることはなく、これといって物資の不足はない。

ナインスとしては、両国間で国交を持続するための交流手段として、貿易を継続的に行っていると言った方が適切だ。

ピジョニアは今、ナインスの五倍ほどの国土を持つ国で、単純な兵力を比べるならばナインスよりもはるかに強国だ。ただし、ピジョニアは昔からナインスを含めて複数の国と隣り合っており、現在もナインス以外の国とは戦がある。

ピジョニアの戦略上では、地理的に観てナインスは自国の背後にあたっている。そのため後顧の憂いを除く目的で、ピジョニアは四十年ほど前にナインスへ兵を送り込んでいる。しかしナインスの反撃によってその遠征軍を壊滅させられ、ピジョニアがナインスに詫びを入れる形で和

平を成して、その後は友好関係を築いている。

ピジョニアの王子を姫の婿に迎えるということは、姻戚関係を結んで、本格的な同盟国同士となることを示している。

なるほど確かに国のためになる話だろうと、シャツコーは納得している。

「あのようなことならば、姫様の成人の儀を遅らせる必要もありませんでしたのに」

近臣が口惜しげに王へ言ったが、シャツコーはこの場では聞き流す。そのまましばらく、シャツコーがそこにいないかのような王と近臣たちとの会話が続き、シャツコーはひたすら自分に声がかかるのを待った。

近衛騎士団長としてピジョニアの王子に護衛を配するため、王に王子への目通りの許可を得てその居室へと足を運んだが、そこに王子はいなかった。

姫の夫となる男は城壁の上にあった。

「ナインス国近衛騎士団長シャツコーです」

シャツコーは跪き、名乗る。

城下を眺めていたのか、背を向けていた王子は振り向くと藍にたつぷりと乳を混ぜたような灰色の瞳でシャツコーの方をしばし見つめ、恭しく跪き顔を伏せた。答えがないことに戸惑って顔を上げたシャツコーが、その姿を見てまごつく。

ベルトリオーダの足音が、シャツコーのすぐ横で止まった。

シャツコーが王へ謁見していた間はさほど長くなかったはずだから、姫が大急ぎで、リオンの衣装から着替えをし自分の夫となる男に初めて会うために身支度をしてきたことは間違いなかった。

「風の噂と波の報せに聞き及んでおりましたが、ああ、なんとも可憐なお姿。いや、これは失礼。貴女様のあまりの美しさに心がはやり、ご挨拶



拶を忘れてしまいました。どうかお許しを。私はピジョニアを治めます  
ミヨルス王家の第三子、名をカーギヤと申します。以後お見知りおきを  
いただき、願わくば永久に親愛の情を賜れるならば、これ以上の幸福は  
ございません」

姫が侍女に下がるように命じたため、シャツコーも下がろうとしたが、  
姫はシャツコーには同席することを認めた。居残るように命じたと言っ  
てもいい。シャツコーは、再び跪き深く頭を垂れる。

姫は作法通りに挨拶を行った。ぴんと伸ばした背筋から尻にかけての  
曲線は硬い。赤茶の正装には控えめに雛菊の刺繍がほどこされ、胸元や  
袖口などには蝶貝の虹色の輝きが品良く散らばっている。

「貴男様のお兄様がピジョニアの王位を継承されましたことは、私も聞  
き及んでおります。上のもうお一方のお兄様がお亡くなりになられたこ  
とも」

「確かに、私の兄上は先頃ピジョニアの王となられました。我が父が俄に逝去をいたしましたために、めでたくとは申し上げにくいのでございますが、ともかくも兄が王となり国民が大変に喜んだことはお伝えいたしたく、もちろんこの私も兄上が王位に就いたことは心よりの誉れでございます。もちろんそれならば、私はピジョニア国王の弟と名乗るべきだったのかもしれませんが、おそらくは貴女様のすでにご存じでありまして、私という者について、私なりに慮って第三子と名乗らせていただきます」

カーギヤの言葉はよどみなく、語る所作は如才なく優雅だ。明らかに芝居がかっている台詞を並び立てていても、それは全く自然に行われていて、一切の不自然さも嫌みもシャツコーに感じさせない。

どちらかといえば政治に疎いシャツコーも、さすがに隣国ピジョニアの前王が逝去した後起こった、跡継ぎを巡る争いの成り行きの大凡は

知っていた。

ピジョニアの前王が急逝したのは八月ほど前のことだ。王がまだまだ壮年だったこともあり国内に多少の動揺が走った。ただしその直前に第二王子をナインスの婿に出すことが内々に決まっていたため、跡継ぎは第一王子に確定しており、そのまま円滑に王位の継承が行われるはずだった。

状況が一変したのは、第一王子が王位の継承直前に死んだためだ。今では病死ということに落ち着いているが、その時期が時期だったから、病死という話を納得して飲み込んでいる者はいない。

第一王子が急逝して、その後に第二、第三、第四王子による、王位を巡る争いが起こった。ピジョニア国内の争乱だから争いの中身の多くは秘されていて、ナインスにはつきりと伝わっているのは、第四王子率いる一派による蜂起だ。

結果、第四王子は第二王子が率いる軍に敗北して第四王子は戦死した。第三王子は第二王子の王位継承を支持し、第二王子がピジョニアの王位を得た。

「ご聡明な貴女様のことですからすでにご存じのこととは思いますが、私が貴女様にお目にかかりましたのは今この時が初めてでございますから、ひとつだけお尋ねしたいことがございます。私はつい先頃に病にやられました、この目に光を失ってしまいました。目の見えないことにいまだ慣れておりませんので、この者の助けを借りなければ、このような場所にも来られない有様なのです」

年の頃は六十手前といったところの、老齡の男が王子のすぐ後ろに控えている。その乾いた手に一本の杖を携えている。

「ドライス王におきましては、貴女様の成人の儀を遅らせてまで、私にその純真無垢なお姿を拝見させていただく格別のご配慮を賜りましたが、

私の身がこのような無様なことになりましたれば、誠に申し訳なく思っております。私はこの身とこの魂を天地の安寧と民の幸福に捧げ、王と貴女様のご厚情に必ずお答えする所存でございますので、どうかこの愚かな私に、平にご容赦を賜りたく存じます」

成人の儀について、口を滑らせたのではない。シャツコーが話を聞いているのを承知の上で、王子が姫を試している、もしくは見戯のつもりかとシャツコーは足下の石組みをじっと見つめる。

有り体にいえば、王はまず姫と王子との婚儀を済ませてから、姫の成人の儀を行う積もりだったのだ。ナインスの良家の娘の婚儀については、そのようなことが希に行われている。

あわよくば他国の名家とも縁を結ぼうと考えている貴族などにとって、女子の面体に多くの墨を入れることが、縁談においてはある種の障害になることは疑いようもない。だから家柄の良い娘に限って、成人の儀を

行うのが遅くなるか、婚姻が早まる場合があるのだった。

特にベルトリオーダの美しさは、かなり誇張された上で、大陸の端々までに伝わっていた。もともとその母もまた、美貌で知られた王女だったこともあり、その娘は大陸一の美女だとの噂もあるほどだ。

よくある話と言えば良くある話だが、ナインスはその噂を最大限に生かして、ピジョニアから第二王子との縁を引き寄せた。王位の継承権が第一王子にあることを早々に示しておきたかったピジョニアの思惑と一致していたこともあり、本来は難題が山積みだったはずの縁組みがとんとん拍子に進んだのだ。

しかし、その第二王子が予定外にピジョニアの王になったことで、話としてはその王とナインスの姫との婚姻話に変わったわけだが、さすがにそれは成り立たず、第二王子が王位に就いた段階でピジョニアから断りが入れられた。そして、第三王子カーギヤがその代わりに充てられる。

ナインスは、二つの国と国境を接している。ピジョニアともうひとつの国とだが、その残りの一国は険しい山地に散らばっている民族が徒党を組んでいるといった体だ。国としてのまとまりはほとんどなく、益も害もない一地方として、周囲の国からは放っておかれている。

ピジョニアは、ナインスに大敗し和平とを結んだ後の数十年の内に国土を拡大した。近隣諸国の国土を削り取り小国を統合し、その過程で事実上は、ナインスの隣国はピジョニアだけになっている。

ナインスがそれまで続いてきたピジョニアとの友好関係をさらに強化し、兄弟国となることを望んだのは、真つ当なことだ。

しかし、ナインスの王になるはずの男が盲目だということは、さすがに問題とならないはずがないとシャツコーは困惑する。王が知らないはずがないが、しかし、ならば次王は盲目の王となるのか。

「姿形的美醜など、国を治める上で何ら意味を持ちません。そして貴男

様が盲目であろうとも、貴男様の目になる者は数多がおります。王が決して欠くべきでないものは、王としての格です。他には何一つ、代わりが見つからないものではありません」

姫がそう断じる声が、シャツコーに降る。

「おお、さすがは誇り高い戦士たちを率いる国王のご息女。その高貴なありがたいお言葉を、私の矮小な肝に刻みつけておきましょう」

カーギヤは声音に喜色を絶やすことなく、あくまでも涼やかに受ける。それから二人は二三のありきたりな社交の会話を交わし、姫は去った。薄ら寒い居心地の悪さに身を固くしていたシャツコーは、ひとつ息を吐いて顔を上げる。王子は微笑を絶やさず、どこか優美な立ち姿で待ち構えていた。

シャツコーが願い出た、王子に警護の騎士二名を付ける申し出を、王子は柔らかくも固辞した。城内にいる限り必要はないという。シャツコー



―はそれでも退かずに重ねて頼みこみ、居室の出入り口に二名を置くことを王子に認めさせて辞した。

「警護など好きにすればいいものを」

カーギヤは、階下に遠のく生真面目な騎士の足音に苦笑を浮かべる。城壁に寄りかかるようにしてまた城下に目をやった。

海へと落ちていく風が、時折髪をなびかせる。少し離れたところで松明の薪が弾ける音が聞こえた。城壁にいるだろう歩哨の身につけた武器が擦れ合って、その足音を飾る。

「ここが、私の死に場所か」

そう皮肉を口にする王子を、従者が諫める。

「命があるだけ、よろしゅうございます」

その言葉の苦みに、王子の口の端が歪む。聞き飽きたどころか聞きたびに痛みを増す言葉も、自責を忘れる恐怖よりは楽だ。

「父を殺し兄を殺し、妹と母を殺した。そんな私が他国の王になるとは、わからないものだ」

王子は目を閉じ、何かを噛みしめるように微笑む。

「山と空が美しいな。この呪われた地は」

老いた従者は答えない。

辺りはすでに夜の闇に沈み、それぞれはそれぞれの形を失っていた。

\* \* \*

明くる朝、謁見の間で行われた会席において、カーギヤ王子はドレス国王と重臣たちに対して、正式に名乗りを行った。

ミヨルス王家の家紋が入った紺の式服を身につけ、王の前に跪く王子の姿は、華やかな謁見の間にかにも映えた。

謁見の間は狭く薄暗いだけの玉座の間とは異なり、この城でもっとも優美な場所だ。王の居館にあり、広さはさほどないものの天井が高く窓も多いため、明るい開放感に満ちている。窓に見える泉を囲んだ城の中心庭は、この謁見の間からの眺めを最優先にしてしつらえてあり、その景色は謁見の間の一部となっている。

床には磨きぬかれて冷たさを増したかのような白地の大理石を敷き、壁は深紅の布地に精緻な草木の文様が気が遠くなるほどの密度で描かれている。壁の文様は丸天井の中心に寄るほどに金色の輝きを増していき、大樹の上に輝く太陽へと繋がっている。そこには王冠に似た姿をした蠟燭立てが、輝く腕を広げて吊られている。

壁に大きく高く切り取られた窓は、その枠を金細工で飾っている。高窓は水仙や刺草などの草花を模した色図柄の染めガラスが嵌められて、陽光を深緑色に透かしている。

王は中庭に面する窓とは反対側の、部屋の角の方に据えられた玉座についている。警護のことも考えられた様式で、玉座の左脇には奥の間への通路がある。

玉座の右隣にはいくらか小振りな王妃の座が据えられていて、そこに姫の姿があつた。

シャツコーは奥の間へ続く通路の入り口すぐに、半ば身を隠すようにして控えていた。何事か起こった時に身を挺して王を守り、また王を速やかに逃がすために、配下の騎士一名とともにそこに待機している。逆にもし剣を抜けば、容易に王の首を落とせるだろうほどに王に近い。

「初めてお目にかかります。私はピジョニア王の弟、カーギヤ・ミヨルスでございます。百年不敗の騎士団を率いる賢王にお目にかかることができ、本当に嬉しく思います」

王子は胸を張り、その瞳でまっすぐに王を見ている。

「カーギヤ殿、遠路はるばるよくお出でくださった。私もあなたのお出でを心待ちにしていた。本当に嬉しく思う」

王は玉座から立ち上がると、王子に歩み寄る。

シャツコーはそれを見て、ゆっくりと王の方へ半歩だけ近づいた。身につけた鎧が音を立てないように、目立たないように、すり足で注意深く。玉座の向こうに、椅子と一体になったかのような姫の姿がある。

王は王子の手を取って立つように促すと、そこへ姫を招いた。姫は王と王子と並び、居並ぶ臣下たちに向かって柔らかな表情を浮かべる。

「改めて皆に伝えておくが、カーギヤ殿はベルトリオードの婿となる方だ。これよりよろしく頼む」

にこやかな王の紹介を受けて、王子が臣下たちへ挨拶をする。

今度は臣下の者ひとりずつが王子の前へ歩み出て跪き、挨拶を行い始める。次の王への、初めての目通りだ。皆が皆それぞれに目一杯に着飾

り、思いつく限りの王子への賛辞と、姫と王子への祝福の言葉を並べた。誰も、王子の目のことには触れない。

シャツコーは、昨夕に聞いた王子の目の話は、実は王子の嘘だったのではないかとも思った。それほどに王子の振る舞いはまったく自然で、目のことを知っていなければ何の疑問も抱かないように思える。

しかしシャツコーは気づかなかつたが、王子の瞳の色を間近で見た臣下の内の何人かは、その意味に気づき、さらにそのうちの何人かは微かな動揺を目や舌や指先に表していた。

近衛騎士団長のシャツコーが王子の到着がいつになるかを聞かされていなかったように、臣下の中にも王子の目のことについてすでに知っている者と、知らない者がいたのだ。王子の瞳を見てただ異国の者が持つ風変わりな瞳の色だと取った者もいれば、何らかの理由で元の色が濁つたものだと気づいた者もいた。

姫と王子と王は、装い、偽り、試しながら、それぞれが何事もないかのように振る舞い、何事もないかのように目通りは進んだ。

すべての臣下の目通りが済み、王が王子に声をかけた。

「婚儀のことは追々に決めようと思う。民への触れもその際に決めればよい。カーギヤ殿は旅の疲れもあるだろうし、しばらくはゆつくりとなされよ」

王子は丁寧な礼を言うと、大したことではないが後ほどひとつだけお願いしたいことがあると続けた。

シャツコーには、それは王ではなく、姫に向かって言ったように見え  
た。

\* \* \*

魔導士長の瞳は、どのようにしても見えない。普通の仮面ならば瞳の部分には覗き穴くらいはあるものだが、魔導士長のものにはそれが無いのだ。獣の面の瞳に当たる部分に、何か特別な細工でもあるのだろうか、調べた者はない。

まさかあの獣の面が本当の顔でもあるまいにと、嫌悪や皮肉を込めた噂の的になってもいる。

「王と姫に、この地のことを良く知るのは誰かと問うたらば、あなただと」

カーギヤは臆することなく、その獣の目を見つめる。

地下にあるはずの魔導士長の書庫は不自然なほどに明るく、それに比べると、魔導士長の居室は全く暗い。地下牢を改築した部屋だが、風が通っていて地下特有の湿っぽさはほとんどない。

カーギヤには部屋の造りどころか、魔導士長の姿すら見えてはいない。



問いかけて、相手にしゃべらせてその位置と気配を感じ取る術を憶えたのは、つい最近のことだ。

目の前の卓の上に、蠟燭の明かりがある。ただ、それだけだ。

書庫に入ったときに何かの香りを感じ、案内をする魔導士に問うと、本のために虫除けの香を焚いているのだという。微かな苦みを含んだ、甘く萌える若葉のような香りがする。

この部屋も、同じ香りがした。

部屋には書棚はない。もとが地下牢だから当たり前だが、暗すぎて書物を読むには向かないのだ。蠟燭が何本あっても、足りるものではない。

香を焚くのも、虫除けに加えて黴臭さを抑えるためと、暗い地下に暮らす魔導士たちの心を落ち着かせるためだ。彼らの居室も暗く、せいぜい寝台と物入れがある程度だ。それに耐えきれない者も多く、それらの者は城下にある魔導士長の別邸などから城へ通っているのが実際だ。

カーギヤは今、大きくない卓を挟んで、魔導士と向かい合わせに座っている。と把握している。組んだ手の下に触れる卓の表面は、滑らかだ。きしむ様子もなく、しつかりした造りを思わせる。

魔導士長は百歳近くの老人だと聞いていたが、書庫から居室へ向かう足取りはそれを思わせなかつた。段差の多さと不揃いな石を大雑把に敷いた足下の悪さにカーギヤは魔導士長のあとに続くにも難儀して、役に立たない杖をつくのをあきらめて従者の手を借りるしかなかった。魔導士長は何の苦もなく歩を進めて、カーギヤを暗い通路に置き去りにしたのだ。

魔導士長はカーギヤの言葉には応えず、部屋の入り口で控えていた魔導士に下がるように命じた。カーギヤも従者を下げさせる。

まるで音のない部屋だ。

「何かお知りになりたいことがある、と」

魔導士長は砂が流れ落ちる音に似た、抑揚のない乾いた声を出す。

「この地はなぜ呪いの地なのだ」

カーギヤは前置きをしなかった。魔導士長と会うのはこれが初めてだ。謁見の間にも顔を見せてはいなかった。奇妙な面をつけているという話だが、魔導士長が人の姿だろうと獣の姿だろうと、カーギヤにとっては意味がない。

「呪いの地ではありません。王子が呪われることはないでしょう」

「将来、私のものになる土地だ。嘘は困る」

ナインスは魔女の呪いを受けた呪われた地——カーギヤの知識は、その程度でしかない。

ピジョニアにとっては、国境を接する友好国とはいえど、過去に小国と侮って兵を送って大敗を喫して以降は、親しまず争わず、という空疎な関係を保つだけの国だったのだ。

奪つてもさほど得るもののない土地だとわかっていた上で、国の版図を広げようとする際に背後を突かれるのを気にして、いつそ一飲みにと攻め込んだものの手酷く敗れて、軍を立て直すのに数年を要した。

以来、触れられない禁忌に近い存在としてナインスはあり、カーギヤは興味を持つこともなかった。

魔導士長は嘘は口にしないとだけ答え、カーギヤは質問を続ける。

「ではなぜ、ナインスの者は呪われている」

「魔女の呪いのために」

椅子の張り布団が尻に柔らかい。魔導士長の居室は、少なくともひとりの来客程度は意識しているらしい。

「魔女の呪いとは何だ」

「十八歳になると死ぬ呪いです」

魔導士長の声はするが、気配がない。自分の呼吸だけが聞こえる。

「魔女とは何だ」

「この地に古くからいた女の魔導士だとしか、伝わっておりません」

魔導士また魔術師などと呼ばれる者は、ピジョニアにはいない。カーギヤは、全身に入れ墨をしたナインスからの来訪者に何度も会ってはいたが、魔導士などというものが本当にいることさえ信じていなかった。魔導士長と呼ばれる者を目前にする今でも、それは変わらない。

「なぜ魔女は呪った」

「この土地の者が、魔女を殺したからです」

ピジョニアがナインスに大敗した戦では、ナインスの魔導士によつてピジョニアの軍が混乱に陥れられたと伝わっている。ただし、遠征に参加した兵で国に戻った者はほとんどおらず、戻った者も先を争って我先にと戦場から逃げてきた雑兵たちばかりだったという。彼らがもたらした報告は要領を得ず、どのような戦が行われたのか、確かなことはピジ

ヨニアでは知られていない。

「なぜ魔女を殺した」

「この地を治めるために魔女を初めとした魔導士が邪魔だったとも、当時の王がただ魔の業を嫌い憎んだとも」

ナインスへの遠征に失敗した当時のピジョニア王は、カーギヤの大伯父にあたる。その王は敗北のあとに体を悪くして床に伏せり、実権がカーギヤの祖父へ移ることとなった。

「魔女の呪いとは何だ。なぜ人が死ぬ」

カーギヤがさらに矢継ぎ早にそう尋ねたとき、卓の向こうに衣擦れの音が生まれた。暗闇に獣の顔をした人の姿が再び描かれる。その獣が口を開く。

「ひとつ、私の問いにお答えいただきたいのですが」

いくらか虚を突かれて、カーギヤは黙る。再び口を開く前に魔導士が

先に口を開いた。

「なぜ毒を使ったのです」

「王への忠誠を示すために」

間髪を入れなかったカーギヤの答えに、魔導士長は何事かを仮面の下でつぶやいた。

もしかしたら笑った息づかいだったのかもしれないとカーギヤは思う。

「呪いは人を体の内から壊すものとしたか、わかっておりません。どのような頑丈な部屋にいて、どのような鎧を身につけたとしても、防げないものです」

魔導士は、遅れた答えを返した。

「その呪いから、入れ墨でなぜ逃れられるのだ」

「詳しくを記したものはありません。魔女を火あぶりにした王は、護りの紋を編み出した魔導士たちもまた残らず殺し尽くしました。その後の

護りの紋は、それをすでに身に受けていた者たちの入れ墨を真似ている  
ものです」

少なくともその王はまともではなかったのだと、そう解されている。

縁起見と呼ばれる、人が持つ魔の力の強さを計る儀式を行うのも、魔  
導士の仕事だ。その結果に応じて、身に刻む護りの紋の中身と量を決め  
る。それは数百年続けられてきた手法を、丁寧に受け継いでいるだけに  
過ぎない。

「護りの紋とやらも、それが何かわからないというのか」

「その使い方と効き目の他はわかりません」

カーギヤの足下を、微かに風が吹き抜ける。

卓上の月は揺れて蠟の香りを焦がす。暗い牢獄は石造りの樹木が平た  
く立ち並ぶ、深夜の森のようだ。そこに獣が住んでいる。

「護りの紋を身に刻めば、そのあとはなんの災いもないと」



「ただ、子に呪いが受け継がれること以外は」

カーギヤはこの居室にもまるで薄気味悪さを感じない。耳に入る音に意識を集めるようになってから、想像力が働くことが次第に少なくなっ  
ていった。以前と比べて身の回りに不明なものが多くなりすぎて、価値  
が即座に捉えられる事柄以外を気にする余裕がなくなっている。だが魔  
導士長の声には体の在りかがなく、言葉の連なりだけが宙に浮かんでい  
るかのようでカーギヤにはどこか心地よく、静けさから耳鳴りのような  
木魂を生む夜の森を想起させた。

「その呪いをかけた魔女とおまえたち魔導士は違うのか」

「違うでしょう。しかし詳しいことはわかりません」

カーギヤの手段は、会話しか残っていない。

「私はこの国の王になれるか」

「なれません。例えば貴方が王になったとしても、その身に入れ墨のない

王など民に認められませんが。貴方はただ次の女王の夫、さらに次の王の父親となるために、この国に来たのです」

魔導士長の言葉はまるで淀まなかった。

「嘘を言わないというのは本当らしいな」

カーギヤは笑おうとして笑えず、唇を引きつらせた。笑い声も発せず、ただ息が抜ける。魔導士長にはその顔を見られただろうと、思う。

最後に魔導士長にこう問うた。

「まったくの暗闇に、世にも美しい者がいる。さて、その者はどのような姿をしているか」

「美しい姿です。誰も見ず、誰も知らずとも」

魔導士長の答えに、感情は混ざらなかつた。

馬は目を血走らせ口から泡を飛ばし、前のめりに激しくもんどり打つた。数里離れた砦から駆けつけ、城の丘陵を登り切ったところで力尽きたのだ。

落馬の際に肩をはずした騎士は、ぶら下がる腕を残った腕で押さえ、駆け寄る者どもを血走った目で拒絶し、私を王の元へと声を割る。

ナインスの王城に、リビヤルド峠よりおよそ三千の兵が進入との報せがもたらされるまでには、まず狼煙により何らかの変事があったことがわかってから、慌てふためくのに十分すぎるほどの時があった。

リビヤルド峠は北の山々を越えるための最初の峠で、国の北の端にあ

たる。ナインス城から峠の麓まで馬を継ぎ人を継いで夜も昼もなく不眠不休で走り切ったとしても、丸二日はかかる。

狼煙を用いて変事の先触れを行うことは可能だが、城から遠く離れた先端からの細かな報せが入るには、人による直接の伝令を待たなければならぬ。

もし戦であれば、開戦もしくは敵襲を告げるための狼煙が焚かれることになっているが、何事かが起こったというはじめの狼煙よりあとに、何の報せもないことがますます混乱に拍車をかけた。

狼煙を継い報せが城に届いたのが昨日の昼前のことで、一夜が明けて時がたち、すでにまた夜半。

ナインス王が持つ兵は、平時は四千人を超える程度だ。そのうち、騎士級が数百人、兵士が三千人程度で、残りは戦いを主としない輸送部隊などが占める。加えて領内の諸侯が独自に数十から数百人程度の兵を有

しているが、それらを加えても六千には届かない。

建前では王の兵を総じれば三万人以上と謳っているものの、それは戦時の徴兵を最大限に行い、そこに臣下の諸侯が持つ兵を加えてのことに過ぎない。さらに、戦が多かった時代には農民の中にも半農半士でいくらか戦い方を知っている者もいたが、今では鍬を槍に持ち替えただけの雑兵が増えるだけのことだ。

三千の兵が領内に侵入したとの報を聞くと、王は狼狽し声を震わせた。敵襲なのかどうかを確かめようと側近たちに問いたのだが、玉座の間にいるものに答えられるはずもない。

宰相を含め、普段は能弁な者たちが黙りこくりに、それが王の焦燥を増幅する。苛立ちを吐き出そうとしたその時に、魔導士長が口を開いた。

「仔細はわかりませんが、まずは王が自ら、第一騎士団を率いてご出陣を。第二騎士団は守備を固めつつ戦える者の駆り集めに当たらせましょ

う」

王は、出陣と魔導士長に鸚鵡返しをしようとして一音を吐いた後に、のどを詰まらせたかのように言葉を失った。口を半開きにしたまま、魔導士長を見ている。呼吸が止まったかのように、微動だにしない。

蠟燭の炎が微かな揺れを薄暗い部屋に広げて、時が止まってはいないこと教える。

参集が遅れている第一騎士団長の代理で御前に控えた副団長がたまらず、王に出陣の判断を求めた。

数度も呼びかけられて、なんとか気を取り直した王は呼吸も荒く、「第一騎士団はリビヤルド峠に向け出陣せよ。私は、城にて指揮を執る」

とだけ息が足りなくなつた胸から搾り出して、また止まる。

王のあまりのぎこちなさに引きずられて誰も動かない中で、姫が王に、

お父様と声をかけすくと立った。王の側に寄ってその手を取り、肩に手を乗せて労りの声をかけると、向き直って第二騎士団長に命じる。

「三楡城東西の二つの砦に伝令をだし、三楡城に兵をお集めください。

灰髭公と西湖公にも急いで出陣を乞うように。それから、先代の第一騎士団長殿を城にお呼びし、お父様の手助けをお頼みください」

先代の第一騎士団長はすでに城下で隠居の身だが、先王に従い、いくつかの大小の戦を経験している。

王を差し置いて令を発した姫に第二騎士団長はさすがに戸惑い、肝心な王が姫の顔を見るだけで黙っているものの、やはり臣下として姫を諫めようとする。

姫がすつと息を吸い込んだ。

「第一騎士団と魔道士は私に続きなさい。急いで三楡城に入り、もし敵が軍を進めてくるならば、そこでくい止めます。急ぎなさい！」

一喝し、身を翻す。

シャツコートと第一騎士団副長も間をおかず走り出していた。魔導士長は床を滑る影のように玉座の間を去る。

第二騎士団長は王を静かに見つめたが、王は荒い息で見返すだけで、動かなかつた。第二騎士団長は顔色を変えず、宰相に王への助力を促す。

「ひとまず王には戦支度を。その他のことは私にお任せください」

第二騎士団長は、平素と変わらない悠々とした足取りで玉座の間を後にした。

\* \* \*

姫が率いる第一騎士団以下の千人余りが三楡城に入ったのは、姫が令を発してから二日後の夜明けすぎのことだった。その後も、準備に手間



取った部隊や足の遅い兵などが次々に到着している。

北の三楡城と西の緑淵城は、ナインス国の軍事的な要衝を担っている城で、どちらも王の直轄となっている。また双方共に平時から騎士団の一隊が駐屯し、守備を担っていた。

三楡城は小山の上に建ち、そこからは周囲を見渡せる。城壁は申し訳程度だが、それでも王城と比べれば格段に守るに向いている。

城の南には城下町が連なり、町の中央を流れる長帯川沿いは、町から離れても森が切り開かれ、広く耕地が広がっている。その長帯川沿いの街道を城の北へと進んだ先に、リビヤルド峠はある。

王城を出立してから軍を北に進めるごとに伝令が入り、峠で即時に戦闘が開始されたわけではないことがすでにわかっていた。

三楡城より以北は北の山脈に近い森深い土地で、もともと大した兵数も配置されていないため、平時は最低限の情報収集もままならない。た

だ三楡城からは晴れてさえいければリビヤルド峠の麓あたりはなんとか目視できる。その峠までにある北の二つの小砦で、戦が行われている様子は認められない。

姫の軍は守りの堅い三楡城にて戦に備えつつ斥候を放ち、灰髭公と西湖公の到着を待つことになった。両公は国の二大公爵で、それぞれが現王の又従兄と弟叔父とにあたる。自領の主として兵を抱えることを許されていて、ナインスでは王に次いで高い位にある。

午前の中に灰髭公の代理でその腹心が百あまりの兵を率いて合流し、昼過ぎには西湖公の跡を継ぐと言われている長子が三百の兵を率いて合流した。

西湖勢は三百人すべてを騎兵で揃え、さらにはその完璧な戦備えは、とるものもとりにあえず出立して半端な装備になっている騎士なども多い中で、ことさらに見事だった。

西湖公の長子は血氣盛んで、そのまますぐにでも進軍して戦を始める勢いだつた。その彼を劍の師をつとめた第一騎士団長が押しとどめて、なんとか足並みを合わせ、王城に残つた第二騎士団長がかき集めているはずの後詰めを兵をあと一日だけ待ち、進軍を開始することとした。

リビヤルド峠に正体不明の一団が現れてから、すでに少なくとも四日以上が経過している。もし戦いになるとしたら、とうに始まっているはずなのだ。一団の中に武装している兵らしき姿が見えはするもののどうも様子がおかしく、その三千人は麓から少し登つた山中で野営をしている模様だという報せが新しく入つてもいたため、進軍を急ぐ必要はないとの判断が下されていた。

姫は人の目を忍んで街を歩く際のリオンよりもいくらか戦向きの鎧——王家の男子に引き継がれてきている勇壮かつ高雅なものだが——を着込み、戦士の格好をしている。ただ王城を出たあとは、軍の指揮につい

てはほぼすべてを第一騎士団長にゆだねていた。第一騎士団長が策を提示し、それに姫が許可を下す形になっている。

姫に次ぐ地位にある西湖公の長子だったが、物わかりがいいのか力関係になど拘っていないのか、ともかくすんなりと第一騎士団長の顔を立てた。西湖公の軍勢は第一騎士団の下には付かないが、指揮については姫と第一騎士団長に従うとしたのだ。

西湖公の長子本人としては、三楡城に到着した直後の、戦の予感に殺伐とした雰囲気にあてられ、戦に逸った自分をいくらか恥じた部分もある。父の西湖公からは、例え戦となっても功を焦って前に出るなど、しつこく言い含められてもいた。

主立った将による軍議を終えた西湖公の長子は、配下の者の報せを受けて、魔導士長の逗留している部屋を訪れた。

「魔導士殿、お久しぶりでございます。昼間はどちらにいらっしやっ

のですか」

西湖公の長子が魔導士長の前に跪いて頭を垂れた。西湖公が五十を過ぎてから初めてできた一粒種で、まだ若い。魔導士長に礼を尽くすのは、父の戦友の魔導士長と幼いころからいくらか面識があり、また父に魔導士長と共に戦った話もよく聞かされているからだ。

先ほどの軍議に参加していなかった魔導士長は、西湖公の長子に自分の向かいの席に腰掛けるように無言で促した。

「魔導士殿が出陣されたときいて、父も来たがっていました」  
西湖公の長子はわずかに顔を曇らせる。

西湖公は現王の祖父から三代に渡って王に仕えている。同じく三代に仕える魔導士長とは、いくつもの戦を共に戦い抜いた間柄だ。年は七十を越えている。

「常日頃から戦で死にたいと言っていました、もう馬にも乗れませ

ん」

「父上には、寢床で死んでいただくしかないでしょう」

魔導士長のそっけなさに、西湖公の長子はさすがに不服そうな顔になつて、その意図を問う。

魔導士長は部屋の隅に控えていた魔導士を手招いた。魔導士長のものと同じ頭巾付きの外套を身につけているものの、仮面を付けてはいない。魔導士長の脇に立ったその魔導士が若い女だと、西湖公の長子は気づいた。女はどうやら異国の生まれの者のようで、護りの紋が顔に見えない。女魔導士が、そのどこか陰鬱に見える立ち姿に似つかわしくない、張りのある声で説明するにはこうだ。

リビヤルド峠を半月以上かかって山脈を越えた向こう側はピジョニア国だ。三千ものナインスの民以外の人間がいるならば、やはりピジョニアの者に違いないだろう。ピジョニアは王が変わって間もなく、他国の

ことよりもまず国内の諸侯との関係を結び直すことが先決だ。またなによりカーギヤ王子も、婿として公式にナインスに入っている。

この時期にピジョニアが戦を仕掛けてくることなど、まずありえない。実際にすでに魔導士長の手の者がその目で見てきたところによると、三千人との報せがある者たちはやはりピジョニアの者らしく、武装している者はごく一部だという。一団の先頭に武装していた者たちがいたため、軍勢だと見誤ったのだ。

リビヤルド峠の先には、頂を聳やかす山々が高く連なっている。辛うじて獣道と呼ばなくても良いくらいには道らしい山道があり、春から秋にかけては、行商人の一団がピジョニアと行き来することもある。山道沿いには山岳地帯に住む者たちがいくつか小さな村を作っていて、ナインスにもピジョニアにも属していない。そのような険しい上に貧しい土地だから、敢えて領有するほどの価値がないのだ。

そのある種の中立地帯で、三千人以上の何者かが野営しているのだ。どうやらはじめリビヤルド峠を下ってナインスの領地に一旦入りかけて、また山中に戻ったようだ。峠に最も近い砦からかなり山を登ったところにとどまっているため、探りを入れるのに時間がかかってしまい報告が遅れがちだが、少なくとも魔導士長が調べた限りでは、大きな戦になるようなことは考えられない。

話を聞いて明らかに落胆する様子を見せた西湖公の長子に、ただし、と魔導士長が指を立てた。その手も手袋に覆われていて、素肌は見えない。

女魔導士が、後を受けて話を続ける。

西湖公と並ぶ兵力を有する灰髭公に、三楡城へ百名の兵を寄越した後動きがなぜかまったくない。急を要する出陣だったから、まず出せる兵を取り急ぎ送ったにしても、そろそろ本人が後詰めに現れてもいいは



ずだ。灰髭公もそれほど若くはないが、戦に出られないような体だとは誰も聞いたことがない。加えて灰髭公の領地は、王城からよりもこの三楡城に近い。

「ただ遅れているだけならばよいですが、もしこのまま灰髭公が出陣していらつしやらなければ、どなたかに灰髭公の見舞いにでも行ってもらうことになりましたよ」

その魔導士長本人の言葉には、内心で戦を期待している西湖公の長子もさすがに喜びはしなかった。

結局、それから一夜が明けても灰髭公は三楡城に現れず、そうこうしているうちに、第二騎士団の副団長が五百余りの兵を率いて合流した。各地の諸侯や他の砦から参じた兵を合わせて、三楡城の兵力は二千五百を優に超えた。

シャッコーと近衛騎士団も、姫に従って五十名ほどが三楡城に入つて

いる。残りの百名ほどは近衛騎士団の副団長と共に王城に残っている。騎士団の中でも近衛騎士団は、王を守ることを使命としているため、いくら王の娘とはいえども姫に従っている近衛騎士は、王に従っている騎士よりもはるかに数が少なかった。

近衛騎士団と、第一、第二騎士団との大きな違いは、近衛騎士団には騎士しかいないことだ。ナインスではすべての騎士は王によって任命されて初めて、騎士を名乗ることを許される。騎士以外の、騎士団に所属する戦士やその他の騎士団員は、王に直接に口をきくことは許されない。近衛騎士は王族や貴族などの推薦を受けた者が、王に任命されることで騎士となり、近衛騎士団へ入団する。そのため王や貴族の親族も多い。王宮騎士と呼ばれることがあるように、王の居城で王とその家族を守る役目を負っている。王の身边で警護にあたらなければならないために、騎士以外の戦士は近衛騎士団には所属していない。

第一、第二騎士団には、それぞれに千余名の騎士と戦士が所属している。団はいくつかの騎士隊に分けられ、騎士たちの下には戦士たちが配置される。騎士団員になるには、王への忠誠を誓い戦う力を示せば良く、大抵はまずどこかの騎士の下の兵卒になる。その騎士団に属する多くの戦士の中から、団長や副団長など有力な騎士の推薦があつて初めて、騎士となる資格を得て王との謁見が叶う。王に叙任を受ければ、騎士となる。

別に、その他の王族や貴族から叙任を受ける場合もあるが、それはもちろん王の騎士とは認められず格で言えば王の騎士よりも一段下として扱われる。

シャッコーは近衛騎士団長として重要な儀礼の際は常に王の側に控えることになるため、王城にいる普段は見栄えに重きを置いた銀の鎧を常に身につけていた。しかし今は、近衛騎士として不作法にならない程度

に戦向きの頑強な鎧を身につけている。その下に着込んだ鎖帷子も含め、正直なところ重みと動きづらさに閉口させられている。

すべての軍議に参加して状況を把握し、すぐに戦になるようなことがなさそうだと多少は気が緩んではいたが、常に鎧を身につけたままでいる姫の側に控える身としては、着慣れない鎧を身につけ、重い兜を脇に抱えたままに涼しい顔をしているしかなかった。

姫は三楡城に入ってからのはとんどの時間を、大広間ですごした。何の飾り気もなく、石造りの部屋に暖炉と十人ほどが掛けられる卓があるだけのがらんとした部屋だ。壁に古びた剣や槍などが無造作に飾っているのが、目に寒々しい。木戸が開け放たれた窓から傾き始めた日が差し込んで卓の上に落ち、乾いた木目を浮きだたせている。

軍議のために広間に集まっているのは、姫、西湖公の長子と灰髭公の腹心に加えて諸侯がもう四名に、第一騎士団長と第二騎士団副団長、そ

れから魔導士長だ。

魔導士長は三楡城に入ってからというものの、ほとんどの軍議に顔を出していた。王城ではほとんど姿を現さないために、顔を合わせる機会がなかった諸侯などは、珍しかったり面食らったりしている。

魔導士長は、三楡城に十人程度の魔導士しか伴っていない。

騎士団と階級の均衡を取るために王宮魔導士団とは名づけられているものの、実際に団員として魔導士長の配下にある魔導士の人数は五十にも満たないのだが、それにしても出陣している人数が少ない。魔導士というより学者と呼んだ方が適切な者たちが、魔導士長の一存で魔導士としてその配下に多くいるのだ。

護りの紋の彫り師を魔導士として他と区別し、魔の力を扱う許可を王から与える形にしているのは、魔の力に関わることを制限するためだ。

魔導士以外が魔の力に触れることは、禁じられている。

魔導士は魔導士長を通じて許可を得ることで魔導士となるが、魔導士という肩書きを得たからといっても、それで魔導士長麾下の魔導士団に属するわけではない。ほとんどが、市井の魔導士となる。魔導士といっても、一目でそうとわかるような魔の力を使えるわけでもない。街に住む者達からはただ、彫り師と呼ばれることも多い。

魔導士長に従う魔導士たちは長に倣ったものか、多くが屋内でも似通った形の外套を身につけ、半数以上がその顔を隠している。面を付けている者、顔布で顔を覆っている者、頭巾を深くかぶり面体を陰にする者。おかげで個々の区別が付きにくい。

不思議なことに魔導士たちはシャツコが軍の移動中に認めていた人数よりも、三楡城に入ってからの方が人数が増えているようだった。

普段の彼らは王城の地下に籠もっているため目立つことはないが、この三楡城内では頻繁に魔導士の姿が見られ、衆目を引いている。街にい

る彫り師と呼ばれるような魔導士たちは、他の市井の者と大差のないありふれた格好をしている。だから普段から王城に出入りしている者以外にとつては、王宮魔導士の姿を見るのは初めてだ。

ここに至つて、魔導士長が西湖公の長子に語つた懸念は、さらに無視できないものとなつていた。

灰髭公は出陣の報せすらなく、第一騎士団長に灰髭公の先発の兵を率いてきた部下が詰問される事態となつている。その者は灰髭公の腹心として名のある者なのだが、率いてきている百人ほどの兵は武装が余りにぞんざいで、何か意があつて雑兵を揃えているようにしか見えなかつた。その灰髭公の腹心にしても、公の命によつて指揮を任され出陣したもので、本隊の指揮に従えとの言葉以外は何の指示も受けていないという。

第二騎士団長が王城に残つたのも、灰髭公の動きを警戒してのことに他ならぬ。

灰髭公の持つ戦力はざっと見積もって平時は五百、最大で千五百程度と考えられる。それと比べれば三楡城へ送ってきた兵があまりに少なすぎるという疑念があるのだ。

仮に謀反を企てるしても、すでに戦になりそうにもないことはある程度伝わっているだろうし、それならばそれで今すぐに王城を急襲するなりしなければ手元に兵を温存している意味がない。

にもかかわらず、灰髭公には何の動きもないのだ。ただ何もせずじ間に稼ぎをしているだけとしか思えないため、その意図が全く読めず、不可解で不気味だった。見過ごすことはできない。

リビヤルド峠に急ぎたいのは山々だが、軍を峠へ進めた後に、もしも灰髭公が王城を攻めるようなことがあると対処のしようがない。

議が長引くことになったのは、灰髭公が裏切るといふ可能性を織り込んで策を講じることに、ほとんどの者が尻込みをしたためだ。王家の者



を相手に謀反の疑いを口にするには、例えば姫に代わって実質的にこの軍の指揮を執っている第一騎士団長といえども難しかった。

これまで口を開くことはほとんどなかった魔導士長だけが、仮面に籠もった聞き取りづらい声で灰髭公の謀反の可能性について姫に語り、姫がそれを受けてまた皆の意を尋ねることとなる。

最終的には軍を二つに割って、西湖公の長子を灰髭公の見舞いに出すこととなった。もしも仮に灰髭公が謀反の兵を挙げた場合には、王城に残っている兵力ではあまりに心許ない。そこで三楡城を完全に空にする形で軍を二手に分け、西湖公の勢力三百をそのまま灰髭公の迎えとすることとした。それに第一騎士団の副団長も同道する。

西湖公の長子は決して自分から灰髭公へ戦いを仕掛けてはならないと、姫に命じられている。その補佐として、第一騎士団の副団長が付けられた形だ。西湖公勢は騎馬を揃えていて隊の足も早く、その格から言っ

も灰髭公と直接に交渉するのに不足がない。

日が沈む前に、二隊は三楡城を立つた。

リビヤルド峠に最も近い砦は街道沿いにあり、国の関所の役割を果たしている。

姫が率いる軍は夜を徹して進み、明け方に関所砦へ到着した。

\* \* \*

灰髭公が王の御前で跪いたのは、姫が北の関所砦に入ってから、十日近く経ってからだった。

第二騎士団長の強い勧めで重い腰を上げた王は、すでに三楡城に入っていた灰髭公と西湖公の長子と合流し、総勢で四千を超える兵を率いて関所砦に到着した。姫の率いていた先発隊と合わせると、二十日程度で

八千人の軍を編成したことになる。そのうち灰髭公の手勢は二千にも及び、西湖勢は先着の三百名に後発の七百名程度が合流して千を超える程度だったから、灰髭公は改めてその力の大きさを示した形になった。

三楡城を立つた西湖公の長子が率いる隊が灰髭公の領地に入ると、灰髭公自らが西湖公勢を出迎えたのだ。灰髭公は、突然の病のために床に伏せつてしまい指揮を執ることができなかつたと真摯にわびた。

その灰髭公の言葉を、西湖公の長子と第一騎士団の副団長は、皮肉の一つも言えずに受け入れるしかない。そもそも灰髭公を正面から叱責できるのは、今では西湖公ぐらいのものだ。灰髭公は国の政には積極的に口を挟むことはなく、専ら自らの領地を豊かにすることに注力している。その手腕は確かで領土は潤い、また才のある者が望んでその下に集まるほどの人望もある。そして王の次に、多くの兵を抱えている。実際に、灰髭公はすでに二千弱の兵を整えていて、多くても千人程度と見積もつ

ていた西湖公の長子を驚嘆させた。

灰髭公が待つていたのは、機会だ。現王の首を取る機会ではなく、自らが王になる機会だ。それは同じことのようにだが、灰髭公にとっては異なるものだった。だからこそ、ただ好機を待ち、結局は機会は訪れなかった。

灰髭公は西湖公とともに三楡城へと立ち、その報せを受けて、王も澁々ながら王城を出た。先発してリビヤルド峠に到着した姫が率いる軍から、王に出陣を求める使者が再三にわたり到着していた。

王城に集まった兵は、主に城下などから急いでかき集めた兵で、その数は二千に達していた。城下に住む一家族が数ヶ月暮らせるほどの支度金を目当てにした、武器を初めて握るような者がほとんどだが、とにかくも第二騎士団の指揮下に数として組み込んでいる。第二騎士団長が、先発隊の後詰めに副団長に兵五百を付けて出したあとも、灰髭公の動き

を睨んで兵の雇い入れを続けて行ったものだ。

灰髭公が三楡城へ向かったのを確認して、王は第二騎士団長と共に王城を後にし、王を含めて王族の中でも特に力を持つ三人が、三楡城に集結した。

王は御前に跪いた灰髭公におもねりの色を見せて、遅参を不問に付すだけにとどまらず、病について労りの言葉を掛けさえした。王にとって灰髭公は、最も頼りになる親族だということと同時に、最も敵に回したくない相手なのだ。また年が近いこともあり、幼少の頃からお互いに親しんできた間柄でもある。

灰髭公は頭を垂れ、入れ墨と髭に覆われた面をひたすら陰にしつつも、この男より長生きさえすれば自分が王になれると内心でそう確信したが、同時にその自分に苦笑した。本当に日和ってしまっている。出陣を遅らせた件にしても、まさに日和見をしながらただ機会を待つだけだったの

だ。

リビヤルド峠から入った軍勢に、王の率いた軍が負ける。もしくは痛み分け程度でも構わない。うまくいけば、黙っていても自分と王との力関係を逆転することが可能だったはずだ。しかし峠を越えてきた一団はどうやら軍勢ではなく、しかも迎撃に出た軍を率いたのは姫だった。読み間違いも甚だしい。

それでも、王が手薄な王城に残ったことで王の首を取る機会は生まれただ。しかし、どうしてもそれを行う気にはならなかった。王位への野心はあつたがしかし、現王への不満がない。自分の領地は豊かで、国も安らかに治まっている。王を討って国を割ったところで、何の得もないのだと考えてしまった。日和つたのでないなら、年をとつたのだ。

「今回の失態は、潮時のように思います。姫様の婚儀が終わりましたら、息子に領地を譲りたいと考えています。その際は、どうかお許しを」

含みのある自分の遅参を例え王が許そうとも、他の有力者たちの反発は避けられない。半端な欲に半端に流された結果の独り芝居にせめてすつきりと幕を下ろすため、身を退くことを灰髭公は決めた。

灰髭公の振る舞いに茶番めいた空々しさを憶えた者もいたが、王と西湖公の長子がそれを受け入れた以上は、口を挟めはしなかった。

西湖公の長子は、自らの分をわきまえて灰髭公の沙汰を棚上げにしただけだ。もし仮に王が灰髭公の領地を没収するなど言えば、戦になることは目に見えている。少なくともこのリビヤルド峠の一件が片付くまでは、立つ波風も静めておくべきだ。

そうして王の軍勢は三楡城で一夜を越し、翌日の夜には北の関所砦に到着した。

その時には、砦付近で野営を続けていた姫が率いる軍では、兵たちに配られる食料が数日前から半分に減らされていた。

ピジョニア峠を越えてきた一団は、ピジョニア国前王の息子、第四王子の領地から来た元領民たちだった。一団の正確な人数は、実際には五千に近い。山中にいたため、少なく見えていたのだ。一団は一旦ナインスの領内に近づき関所砦を確認した後、争いを避けるために砦を離れた山中に移り、その代表者が関所砦の守備隊と接触を試みた。しかし関所砦の守備隊は、恐れをなして別の砦に撤退していたのだ。

姫の軍がその何日か後に到着する前に、山中で野営を続けていたピジョニアからの一団が所持していた食糧はほとんど尽きていた。すでに険しい山地を半月近くかけて越えてきたのだから、当然だ。

姫の軍としては、王の判断を仰ぐまでは隣国から来た民たちを飢え死にさせるわけにもいかず、糧食を分け与えるしかなかった。

砦付近には、ナインスの兵とピジョニアの一団を合わせて八千人ほどがいたのだ。姫の軍は、王城から携えて来た糧食に三楡城の蓄えなどを



加えていたが、すぐにほとんどを消費してしまった。

王城を出る際にとにかくまず出陣することを優先して糧食の運搬を疎かにしたことと、三楡城に国で三番目の規模がある城の蓄えとしては余りに少なすぎる量の蓄えしかなかったことが主な原因だ。

正規の輸送部隊が維持する兵站に加えて、姫の名を使ってまで食料を各地から掻き集めていたものの食料は減る一方だった。

そこへさらに王が合流したことで、一万三千人分もの食料が必要になった。王が率いた軍が王城にあった蓄えをほとんど携えて来たとはいえ、この砦に長居をすればするほど、ただただ食料が減るだけだ。

姫を初めとする先発隊の面々はすぐにでも、合流した王との軍議を行うことを望んでいたが、王は挨拶もそこそこに行軍の疲れを訴えて休んだため、軍議が開かれたのは次の日の昼前だった。

関所砦はもともと、二名の騎士の下に十名弱が常駐している、小規模

な砦だ。しかし砦とは名ばかりで、森を抜ける街道の両脇に煉瓦積み  
の古びた建物が、主に兵たちの宿舎としてあるだけだ。一応の関所として、  
街道を通る者たちの素性を検めることを主な役目としている。

その砦の南には、木々をまばらに切り倒して幾分拓けた場所が作られ、  
大小いくつもの天幕が設置されている。王や諸侯のために、木組みと布  
で円錐形に組み立てた、野営のための簡易住居だ。作りようによつては  
中で火を使えるようにもできる。それを遠巻きにして、七千もの兵が森  
の木々の下で野宿をしている。

カーギヤは、自分にあてがわれた小ぶりな天幕から出て、訪れた案内  
に従い王のもとへと向かう。

足元には木々の根の作った起伏が連なり、落ちた枝が散らばり、荒れ  
た肌をした石が顔を出している。それらの上に落ち葉が厚く、時に薄く  
かぶさって、探る杖先を迷わせる。従者の手を借りてさえ、なかなか足

を進めることができない。

カーギヤは、王の軍と共に関所砦を訪れた。もちろん、物見遊山に来たわけではない。

王城に、リビヤルド峠の一団がピジョニアの者だと知らせが入っていたため、関所砦への同行を求められたのだ。カーギヤよりもピジョニアの情勢に詳しい者など、ナインスにはいない。

カーギヤが王のものと思われる天幕に入ると、乾いた黴臭さの中に、かなりの人数の気配が感じられた。中の広さに余裕を感じない。

光を求めるが何も見分けられず、立ちすくみそうになるすんでのところで、従者に背を押され前が出る。背中に受ける合図で跪き、王に挨拶を述べる。すぐ右側に、自分の名に反応を示した、何者かの息遣いを感じた。

宰相が口を開き、一団を率いるこのピジョニアの者たちをご存知かと

カーギヤに尋ねる。

視線が集まったのを感じたが、カーギヤは黙っている。宰相はそれと気づき、カーギヤの隣に控えていた者に、名乗るように促した。

天幕に呼ばれていた二名はピジョニアの騎士と貴族で、それぞれが名乗ったその名に、カーギヤは心当たりがあった。

騎士の名には直接の覚えがないが、語った元の所属についてはよく知っている。第四王子の配下だった部隊だ。もう一人の貴族の方は名に覚えがある。おそらく何かの会合などで数度は会っている筈だ。ただ思い出せる顔はなかったから、すくなくとも自分と親しくはなかっただろう。第一王子派だった、下級貴族の何者かだ。

カーギヤは、この砦までの道すがらで得ていた情報と合わせて事態を把握する。哀れ、と思うと同時に、怒りがあった。

「流民を率いてきた主だった者たちを、すべて斬り捨てるのが第一かと

考えます。この者たちはピジヨニア王を裏切った罪深い者たちです。首をすべてピジヨニアに届けましょう」

愚か者、と。

「次に民たちも、すべて斬り捨てるべきかと考えます。あの者たちもまた、ピジヨニア王を裏切ったことに変わりはありません。見逃せば禍いを実らせる無花果の木となりましょう」

哀れな、と。

貴族の男がたまらずカーギヤの名を呼んだ。慌てて哀願する中にも、どこかたしなめるような声音が混ざる。王の息子に対する、年長の貴族として教え諭す態度が残っているのだ。

「主を裏切った野良犬が私の名を呼ぶな。下がるがいい」

右耳から入る貴族の言葉に見向きもせず、カーギヤは言い捨てる。

それでも貴族の男はカーギヤに取りすがってきた。そしてここまでに

十分に推敲していただろう台詞を口に始める。第四王子の家族がどれほど新王に非道な扱いを受けたか、第四王子の旧領が今どれほど荒れ果てどれほど民が苦しんでいるか、自分がどれほどピジョニアの新王に冷たい仕打ちを受けたか、ナインスへ来ることになったカーギヤの気持ちなどがどれほど良くわかるか。

早口で一氣に、しかし切々とまくしたてた貴族の男は、ひとしきり言葉を吐き出し終わると、自分をまつすぐに見つめているカーギヤに気づいた。そして呼吸が荒くなり、しだいに体が震え始める。

絶望を見たのだ。

貴族の男にとっては、自分と同じく反新王の気持ちを持っているだろう、カーギヤこそが頼みの綱だった。ナインスを頼るつもりだったわけではなく、次のナインスの王となるはずのカーギヤを当てにしていたのだ。そもそもピジョニアの民にとっては、ナインスは呪われた不吉な土地

でしかなく、そこに望んで行く者などいない。しかしカーギヤ王子のいるナインスに行くことは、第四王子の領民にとっては、別の意味があった。

ピジョニアは国土を広げる中で、王族たちに領地を分けあたえて、一族の王権をより強固にしていた。前王の四人の息子——四人の王子もそれぞれが領地を持ち領主となり、その才覚で領地を治めることを許されていた。前王にしてみれば、後継者を試す意味も当然あったろう。中でも第四王子は若いながらうまく領地を治めて、領主になってから数年で名領主と呼ばれるほどになっていた。それが第四王子が王位を狙って蜂起する理由のひとつにもなる。

第三王子カーギヤもまた、第四王子の領地と隣り合った土地の領主として、その隣の土地ほどではないものの善政を敷いていた。

第四王子の元領民たちは、第三王子カーギヤの領地が住みよい場所だ

ったことを知っていた。農民をはじめほとんどの民は土地に括りつけられた財産として、他の土地への移動を厳しく禁じられていたが、しかし生き残るためにも他の領地の様子は耳に入れておくものだ。商人などの行き来が少なからずある以上は、他の土地の噂は必ず流れってくる。領主の悪政のために生活に行き詰ることがあれば、生きるために他の土地へと密かに脱出する民も少なくない。その中で、第四王子とカーギヤの領地が住み良いことは、民の間ではよく知られるものとなっていた。

また第四王子とカーギヤが母を同じくする実の兄弟として親しくしていることも、二人を良く知る王侯貴族たちの間では知られていたことだった。商人たちが、二つの領地間を行き来することが、他の領地同士と比べれば容易だったこともその裏づけと考えられていた。

ただ、第四王子が蜂起した際には、カーギヤは第四王子の側には付かなかつた。



それでも、第二王子が第四王子を破り新王に即位した後に、カーギヤがナインスへ身ひとつで婿に出された形になったこともあり、やはりカーギヤが第四王子の側に近かったことは間違いないものと思われている。一団を率いてきた者たちは、それらのことを第四王子の元領民をそそのかす材料に使ったのだ。

第四王子の軍に加わっていた者たちのうち、主立った者たちは討たれたが、それでも生き残ってピジョニアに潜んでいた者たちもいる。もちろんもし新王に見つかれば、残党として捕まり処罰されることになる。

また第四王子が軍を起こした際には、第四王子の側にも対する第二王子の側にも付かなかった者たちも少なくなかった。第一王子を支持したまま義理立てして、どちらにも組みしなかつた者たちや、兄弟による王位を巡った争いに対して、趨勢を見極めてうまく勝ち馬に乗ろうと時間を稼いでいた者たちだ。

しかし一度の戦で敵将の首を取り王になった第二王子は、自分と共に戦わなかったものたちに対して、冷徹だった。

新王に追われているか、新王にかしづくにはすでに遅すぎて先が暗い者たち。しかし全てを捨てて他国に行く覚悟もできない。そんなはぐれ者たちが捻り出したのが、第四王子の元領民とともに国を出奔することだったのだ。

はぐれ者たちは、土地を追われた哀れな民を率いる体を取って同情を誘い、同時にナインスの軍に対する盾とし、場合によってはその五千人の奴隷を手土産にしようと目論んだ。そしてあわよくば、ナインスの新王となるはずのカーギヤに取り入り、ナインスで再びその民たちの上に立とうと策を弄した。これまで第四王子の治めてきた土地の領民は、王が第四王子を憎む新王に変わったことで激しい迫害を受けることになると、まことしやかに吹聴したのだ。

その領民たちにとって不運だったのは、実際に第四王子を慕う者が多かったことだ。また第四王子とその家族は皆殺しにされ、それどころか第四王子の肩を持ったその母つまり前王の妻も殺されていて、同情を集めた。加えて、第四王子が討たれた直後に、その領地で第二王子の手のものによる略奪がなされ、豊かだった土地は無残に荒れた。

生きるためにはぐれ者たちに従うより他になかった民も少なくなき、それに同調する形で土地を捨てた者たちが加わり、一団は新天地をナインズに求めてやってきたのだ。ピジョニアから呪われた土地へ出されるという仕打ちを受けたカーギヤ王子であれば、自分たちを救ってくれるだろうという期待がそこには当然あった。

しかし、カーギヤはすべてを拒んだ。

あえなくすべての目論見がはずれた貴族の男は、その身を震わせて放心していたが、兵に両腕を抱えられると正気に返った。カーギヤから引

き剥がされ引きずられていきながらも、カーギヤの名を呼び救いを求めた。

もうひとりのピジョニアの騎士は名乗って以後は黙っていたが、天幕の外に出される寸前になって、

「あなたを慕ってここまで来た者たちも多くいるのです」

そう叫んだが、すぐに入り口は閉じられて姿は見えなくなった。貴族の男が発していると思われる、鼻から抜けるような間の抜けたうめきともなげきともつかない声が遠ざかっていった。

カーギヤの言葉は、この場ではピジョニア王の弟の言葉としての重みを持つ。宰相が、一団を率いてきた二人を捕らえておくように命じたことで、その処遇はすでに決まったも同然だ。

指導者たちを失うことが決まった流民たちについてのカーギヤの進言に、強行に反対したのは第一騎士団長だった。五千人を斬り殺すなど誰

がやるのだと、王の名も穢れると主張する。それに首肯するものも多い。宰相は折衷案として、彼らを奴隸としてピジョニアから買い付ける案を提示した。

しかし、諸侯は突然の招集によって出陣し、姫や王からの要請によりかなりの食料をその蔵から吐き出している。もちろん王も例外ではない。奴隸としてピジョニアに対価を払って買い取る上に、さらに奴隸として食わせなければならぬのだ。

奴隸は例えば新たな耕地の開墾のための働き手となるはずだが、開いた畑にまともな収穫があるまで、主となる者の負担は小さくない。仮に王から奴隸を無償で分け与えられたところで、場合によっては民から搾り取れる税収が目減りしてしまい、ありがた迷惑でさえある。

宰相はそうやって自分の案についての問題をつらつらとあげて見せた。お得意の、判断を王に任せ、自身の責任を避けるやり方だ。しかし、宰

相としてなまじ発言が力を持つだけに、今は王をさらに迷わす効果しかなかった。

まず流民をただナインスから追い返すことすら難しい。流民たちの食料はすでに尽きているのだ。かと言って、五千人が再び山地を越えてピジョニア領に戻るまでの半月程度に必要なだろう大量の食料を、ナインスが用立てるわけもない。

もちろん、気を利かせて五千人を捕らえてピジョニアまで馬鹿丁寧に送り返すようなことをしては大損だ。ピジョニアは礼こそ言うだろうが、相応の対価を払うようなことはないだろう。

よしんば流民たちが自力でどうにか食いつないで運良くピジョニアに戻れたとしても、国を捨てた裏切り者に対する苛烈な処罰が待っているだけだ。死か、もしくは最下級の奴隷として一生を送ることになるだろう。元の土地に戻るはずがない。

流民たちに残された手段は、せいぜい山間部に住む民族の村を襲って住処から命まで、丸ごと掠め取ることくらいだ。しかし成功する可能性はほとんどない。加えてナインスにとっては、山岳民族を下手に刺激するのが面白くない。

流民たちは、八方ふさがりだ。

だからといって、流民をナインスで受け入れたとすれば、これはピジョニアに恥をかかせたことになる。加えて、民は土地と同じく最も基本的な財産だ。それがごつそり他国に移ったとなれば、ピジョニアが黙っているはずもない。おそらく、奴隷としての取引となるだろう。五千人ともなると、対価も生半可なものではない。

カーギヤが、流民の全てを殺すべきと答えたのは妥当ではある。

最も望ましいのは、流民たちが今すぐ消えてなくなってしまふことだが、もちろんあり得ず、議が続けば続くほど、論はカーギヤの答えに近

しくなつていった。隣国からの侵入者として始末するのが、最も後腐れがない。

しかし、五千人を殺すのだ。

相手が敵兵ならばともかくも、他国の民とはいえ戦う力がないどころか長旅と食料不足で困憊しきっている老若男女の五千人を皆殺しにする役目となると、誰しも貧乏くじを引かされるとしか思えない。さらに五千人もの無辜の民を殺したなどという二つ名がついてしまつては、たまつたものではない。

さすがに軍議の席に居並ぶ者が皆、他の者の出方を見ようとして腹の探り合いのようになる。各々が当たり障りのないことを言い始めると、王はまたそれに迷う。王にしても、自分の名を冠する騎士団が血に穢れることを望みはしない。

平和が数十年続く中で、敵兵の血さえも間近で見たことのない者がほ



とんどになっている。騎士などは、無闇な流血を避けることが美德とすらされている。

腰の退けた堂々巡りが始まりそうになる中で、軍議が始まってからずつと押し黙っていた魔導士長が、私がと名乗りを上げる。私が、皆殺しにしましょうと。

「入れ墨屋風情が」

第一騎士団長が顔を歪めて吐き捨てる。魔導士などと名乗っていても、入れ墨を入れるしか能のないやつらめが、と。

「いかがでしょう」

魔導士長は、動じずに王に重ねて問う。

王は隣の宰相に意見を求める。宰相はしばらくの間沈思し、そもそも魔導士長殿にそのようなことができうるのかなのがわかりませんと顔色を変えずに答えた。

他の貴族も何人かがそれに賛同する。第一騎士団長は苛つきを隠さずに、魔導士長を黙ってにらみつけている。

「お任せいたしましたよう。一度、魔導士殿のお手並みを拝見したいと思っていました」

本心で推すのは、西湖公の長子だ。魔導士長を信じて、疑う様子すらない。

「では、魔導士長がお気を変えることがあれば、私がその役目を承りたく思います」

第二騎士団長が、間をおかず続いた。そもそもが、王の役目なのだ。諸侯に任せてよいことではない。王が王として、またこの軍の大將として、騎士団に命じるべきだったのだ。それが望めないならば、せめても騎士団長が言い出すべきだった。

だが宰相が流民を奴隷になどという案を口にしたことで、二人の騎士

団長は自ら願い出ることを躊躇してしまった。今は仮にもいまだに戦場の体裁をなしているため騎士団の影響力も大きいが、王城に帰ってしまえば、宰相は騎士団を超える権力を取り戻す。宰相の機嫌を損ねたくはなかつた。宰相は、責任を負わないように逃げ道を常に残すものの、軽んじられることを極度に嫌う人物だ。

灰髭公は自重してるのかこれまでもほとんど発言がなく、場にいる諸侯に発言を待たれたのを察してやっと口を開くと、王にすべてお任せしますとだけ言った。

そこまで来ればさすがに王も腹をくくり、まずは委細を魔導士長にまかせ、もしもの時は王の騎士団で対処をするとの結論を出した。

魔導士長は、ちょうど頃合がよろしいようですので、と他のものによくわからないことをいいつつ、明後日に殺戮を行うことを宣言すると、そのまま素っ気なく立ち去る。

宰相がこれは見物ですなと呟き、それを口火にして残された一同は魔導士長がしくじった場合に騎士団でどう五千人の始末を付けるかを話し合い始めた。西湖公の長子は、席こそはずさないものの仏頂面をして、ただ黙ってそれを聞いていた。

カーギヤは王に乞われて、その後の酒宴まで同席を続けた。ナインスの酒は思いの外に口にあつて、次々に勧められる杯をすべて干したカーギヤは、したたかに酔った。

\* \* \*

翌日、騎士の一部は戦の備えて雇い入れた者などを引き連れて関所砦を立った。諸侯の一部も自領への帰還を許され、灰髭公や西湖公の長子が率いてきた手勢の一部なども関所砦を離れた。それにより砦に残った

軍勢の兵は四千を越える程度に減っている。

五千の流民を制するのに、必要な兵力だけを残した形だ。

砦を離れた兵の多くは元の城や砦に戻ることにしているが、一部は三楡城の付近で訓練を行うことになっている。この機会に、掻き集めた農兵を多く含んだ軍勢で千人規模での演習を行い、少しでも用兵と個々の練度を上げておくのが狙いだ。すでに支度金を前払いしているのだから、その分の元はとらなければならない。

別に王城へ戻る隊は、六つの塩漬けにした首を携えていた。殺害したピジョニアからの一団を率いてきた者たち、貴族や騎士など百十九人の内からカーギヤが選んだ名のある六人の首級が、カナ―テ港より海路でピジョニアに送り届けられるのだ。その者たちが率いていた二千の軍勢は、ナインスの領土を侵したためすべて討ち取ったとの報告と共に。

残った流民たちには、指導者はピジョニア新王を裏切った者なのだから

ら処罰したと説明を行って、減らしていた食料を幾分か増やす処置がなされている。自分たちの明日にも途切れるだろう行く末を知り、恐怖に追われて散り散りに逃走でもされては面倒なのだ。

魔道士長は自ら指揮を執り、街道からかなり離れた山中で木々を切り倒しはじめた。どこから湧いたのか、百名近くの男たちがそこで斧を振るって働いている。よく見れば、その中には樵が何人かいて、作業の音頭をとっているのがわかった。

王が臣下に調べさせた所によると、魔道士長は山中に広い道を作らせているとのことだった。おそらくだが、目立たない山中に流民を集めた後の仕事を容易にするためだろうと、臣下たちの口からは語られる。

これについては、真つ当なやり方だと評価するものがほとんどだった。木々が茂る山中では視界が悪く状況がわからず、また兵に指揮がうまく伝わらないことも多い。五千もの屍を生む以上は、それなりの準備が必

要だ。

ただ、魔導士長がどのようにことを行っていくかについては、これと断言できるものはいなかった。そもそも、魔導士長がそれを為しとげると信じているものもない。魔導士長に兵らしい兵はないのだ。呆けた老人の見栄から来た戯言ぐらいにしか思っていない。

高みの見物を決め込んだ王と臣下たちは、ああでもないこうでもない、と、魔道士を酒のつまみにしながら酒杯を酌み交わしているのだ。せいぜいそれなりの格好を付けた後に、兵が足りないから貸してくれとでも頼んでくるのだろうか、その時は笑ってやるのだと、すでに大笑いしている。

西湖公の長子は流民たちの監視を買って出ており、その酒盛りを離れ、配下と共に街道沿いの山中にいた。

流民たちは、険しい山を越える長旅の末にまたさらに山中での野宿を

余儀なくされて、皆一様に疲れてきつっている。話に聞くには何度か山岳民族と争いになることがあり、また疲労や病から山中で歩けなくなるものも多くいて、ピジョニアを出たときと比べれば、人数はかなり減っているはずだということだ。

指導者を失った流民たちは、今はただカーギヤ王子を信じている。それ以外に頼みにできるものはない。配られる食料が増えたことが、彼らの希望を確かに膨らませていた。その希望の核をなしているはずのカーギヤは、朝から二日酔いを訴えて自身の天幕にこもっている。

西湖公の長子が、どこかやりきれない陰鬱な退屈さをもてあましていると、そこへ姫が馬に乗って姿を見せた。大柄の馬に、近衛騎士団長と二人でまたがっている。

姫とは三楡城で何度か会話する機会を得たが、馬に一人で乗ることを王から禁じられているとのことだ。姫本人はひとりでも乗りこなせると



強弁していたようだが、近衛騎士団長がこぼすには、姫は城の中で常に馬を引く者がいる状態でしか馬に乗ることを許されていないため、まだまだ危なっかしいとのことだ。

燈が二つ下がっている特別な鞍を使い、姫が近衛騎士団長の前に座つて手綱は任せてもらっているようだが、いざとなれば近衛騎士団長が手綱を取るのだろう。

姫と近衛騎士団長の戦装束は、無骨一辺倒となる他の騎士たちとは違って軟弱だが、しかし同じ鎧や兜にしてもそれぞれに贅が凝らされ、頭からつま先までが王宮風に洗練されている。姫のためにか、馬具までもが見事にしつらえられていて、人目にさらされることになれているふたりの優雅な所作も相まって、絵になっている。

目を移せば、二人の姿に目を奪われている流民たちの、体ごとボロくずになる一歩手前のみすぼらしさが、西湖公の長子の目にまた思い切り

飛び込んでくる。

王が合流して以後は、当然ながら姫は軍議に参加しなくなっていた。時折、数人の近衛騎士を引き連れて、砦の周囲を近衛騎士団長と馬をめぐらせている姿が見られていたただけだ。

朝の軍議で、王から姫に帰還の許可が出たが、姫は強く願い出て関所砦に残った。

近衛騎士団長シャツコーは、貴族や他の騎士団が王の側に控えているため、今は姫の警護に重きをおいている。王宮は近衛騎士団の縄張りだが、ここでは違う。ありていに言えば、王の側から追い払われた形だ。

姫は馬を下りると西湖公の長子に挨拶をし、流民の様子を尋ねた。

西湖公の長子は、さすがにひどく疲れていてこれでは逃げ出すことなど無理でしょうと、そのようなことを答える。

姫は、しばらく流民たちをじっと見つめていたが、魔道士長に会いに

行くと言ひ残して去つていった。

西湖公の長子は魔導士長が馬では容易に行けない山中に居ることを知つていたから、その美しい装束が汚れますという言葉が口をつこうとしたが、それが本心とはいへ、やはり嫌みに聞こえるかもしれないと飲み込んだ。

自身の父、西湖公は体は弱つたが頭は耄碌していないし、嘘を言うよきな男でもない。魔導士長が父から聞いている通りの優れた者ならば、おそらくことをやり遂げるだろう。

しかし、一朝一夕で片付くとはとうてい思えないのだ。魔導士長には、手持ちの兵がほとんどない。何か助力できることはないかと魔導士長に尋ねたが、ではもしもの時はお願いしようと言うばかりで、まるで意に介していないようだ。

部下に様子を見に行かせているが、まだ木を切っているばかりだとい

う。

やはり、万端準備を整えたところで、諸侯の内の誰かに力を借りるつもりなのかと予想してしまう。それはそれで手際としては案外まずくないのかもしれないが、軍議であれだけの大口を叩いた割には、あまりに期待はずれだ。とどのつまり、魔導士長は手を下さないではないか。

西湖公の長子がやきもきしている間に日は暮れ、その夜が明けて魔導士長がことを行おうと言った日の朝が来る。

低い雲が垂れ込めていて、登ったはずの朝日は見えなかった。

朝早くから魔導士長の命で流民たちは峠を下らされて、魔道士長が準備を行っていた山中へと移動させられた。

そこへ王と主立った臣下、また貴族たちが揃って見物に顔を出す。深い山中のため軍勢は率いて来ず、近衛騎士団のみが警護に付き従っている。

山中に敷物と酒食を広げて、物見遊山でもするような様子だ。

流民たちは、その王たちから見て正面となる森の中に集められている。岩の多い森は古く、太く高く成長した木々がお互いに広げる枝の間隔を広く保って生えているため、山中の割には明るい。晴れてさえいれば、差し込む日差しも多かつただろう。たださすがに森の奥までは見通せず、手前の方にいる流民たち以外は、五千人がうごめく気配が感じられるのみだ。森のどこかで、子供が泣き喚く声がする。

切り株や背の低い下草を残す急ごしらえの山道は、道と言うには余りにも粗雑だ。ただ少なくともその山道が続く部分は、手前から森の奥の方へと傾斜が上がっているのも相まって、ある程度は見通しがきく。

魔導士長は、山道によって山中から森ひとつを切り取ったのだろうと、王へ臣下が述べる。どうやら山道は、流民達を集めた森をぐるりと囲んでいられるらしい。魔導士長が立っているとところから左右に大きく弧を書い

て、森の端で内に回り込んでまだ続いているようだ。

武器を携えた男たちが、その道なりにほぼ等しい間隔で並んでいる。男たちの顔ぶれはこれまで木を切っていた者たちとほぼ同じで、不揃な装備だが、武器の扱いになれている。山賊か傭兵か、もしくはその両方を生業としているか、といったところだ。

今は傭兵として魔導士長の下に付いているだろう男たちは、獲物を探すように抜き身の武器を揺らして全身から殺気を放ち、囲んだ森から流民が出てこないように常に威嚇している。

流民たちは早朝の起き抜けに命令をされ、傭兵たちに追い立てられるようにここまで連れてこられた。さらになけなしの荷物を携えることを禁じられたため、明らかに不安を覚えている様子だ。

さきほどから魔導士長は何やら指示を出して、流民たちの一部を奥から呼び寄せたり、逆に奥へ追いやったりして、何事かを行っている。

やや待ちくたびれてきた王が、何をしているのかを尋ねる。

「乾いていて、よく燃えますので」

魔導士長の声がかすかに弾んでその獣面を震わせ、その響きを耳にしたものは一様に背筋に冷たいものを感じた。年寄りを手前に集めているというのだ。

火を、付けやすくするために。

その魔導士長に、配下の魔導士が駆け寄り、準備が整ったことを告げる。魔導士長は、ゆっくりと王に近づいて跪く。

「もしものは、お下がりください」

魔導士長の声はすきま風のように、獣面から漏れ聞こえる。

そうして流民の森へと振り返ると、山道の端にまで真っ直ぐに歩を進める。黒衣をまとった不気味な獣面の男が近寄って来るのを見て、流民たちは森の中へさらに退く。

魔導士長は外套から右腕を差し出すと、素肌の拳を握り、広げた。

その掌から小さな灯火が揺らめきながら宙へと飛び立ち、力ない羽虫のようにゆつくりと地に落ちる。

一点——ぽつと土そのものが燃えはじめたかと思うと、次には炎がごとと深紅の音をたてて大きく弾けた。火は魔導士長を扇の要にして風に勝る早さで地を走り、刹那の間に森へと燃え広がる。

瞬く間に森一帯に沸き立った猛火に、似通う姿もまた様々な五千本の薪がなすすべもなくくべられる。

炎は人の足からと言わず全身を一飲みにして燃え上がり、恐怖と激痛に悶え踊るそれぞれを火種にして天を目指して舞い狂う。立ち上がり、捻れ絡み合う、無数の火柱が凶暴に踊る炎の森となる。

そこに木が立っていないようにと人が立っていないようにと岩がうずくまっていようと、何があろうとなかろうと大差がない。大地そのものが燃え、そこ



から立ち上がった炎がまた激しく燃える。

天へ巻き上がる炎が風を冒す音が唸り、炎の嵐の中で人が声ではないものを口からはき出してのたうち回る。皮膚に移った火を消そうとしているのか、地を転げ回っているものもいるが、そこもまた灼けた土が波打つかのような烈火の海だ。人の身は暖炉の中で転がる薪にすぎず、転がるたびに火の粉を巻き上げて、肉が炭に変わって身からはがれ落ちていく。

時折、森から火だるまになった者が転げ出てくる。全身に炎の衣をまとい、肉が燃え毀れる痛みに四肢を振り回すように体を揺らして、吊られ損なっている繰り人形のようなだ

山道でそれを待ち構えるはずの傭兵も、その多くが炎の森を目の前にして腰を抜かしている。中でも何とか持ちこたえている傭兵が自らを奮い立たせるためのどこか滑稽な奇声を喉から絞り出しながら、燃えるそ

れに駆けよつて力任せに止めを刺す。

森で、肉が燃え盛る。灼ける風の叫びと人の断末魔が混ざり合つて、炎はさらに凶暴に激しく輝く。

地も大樹も岩も人も、何もかもが炎が延べる形のない臂力によつて繋がれて、森は天に向けて盛り上りささくれだった一個の丘のようだ。沸き上がる煙は、朱に染まつた根本から身を振るようにながら空へと向かつて、低く垂れ込めている雲へと連なる。

魔導士長は最初の火を手放した場所から一步たりとも動いていない。焰は何らかの力によつて全くに制されている。本来なら簡単に燃え移つているはずの、叢が残る山道にも炎はまるで見えない。

ほんのひとときで、森にあつた無数の薪はいくらか複雑な形をしているだけの炭に変わつて、地に横たわっていた。もう、炎の他には動くものが見えない。ただただ、地の奥底から寄せ続ける波のように、炎が地

から間断なく吹き出し続けている。

時折、足下を焼き尽くされた大木が巨体の支えを失って、ばりばりと音を立てて炎の中に倒れ込む。どっと火の粉が巻き上がり、その下で無数の炭が砕け散る。

暗い空から灰が降り始めた。森と五千人の、なれの果てだ。

それを追いかけるようにぽつぽつと雨が降り始め、すぐに天の水盆を返したかのような土砂降りになる。しかし森の火勢は弱らずにかえって雨滴を焼いて、辺りを真っ白な水煙が包み始めた。水煙は森を包み込むように火照り、そこへ落ちる無数の雨滴が炎を映して輝く縦糸を引く。

王と臣下たちは、物見する彼らのために整えられていた敷布の上にはすでにいず、荒れ狂う炎に気圧されて何十歩も離れたところまで退いていた。よほど慌てたのか、並べてあった簡素な椅子や、各々が手に持っていたと思われる酒杯や食物、果ては剣までもが敷布の上に残されて散

乱している。

姫だけは唯一人で敷布に座り込み、白い肌に揺れる炎の影を写しながら、目を見開いて森を見つめている。

魔導士長は平然と王に歩み寄りかきこまり、一切を燃やし尽くします。なので本日はこれでお帰りくださいと、進言した。

未だ呆然として、左手に鳥肉の食べさしを握りしめたままの王が言葉を発せずにいると、

「ご心配には及びません。あとには何も残りませんので」

炎の森を背にする獣面の頬に、朱色の笑みが揺れた。

荒れ狂う炎に目を奪われていた近衛騎士団長が激しい雨に打たれてようやく我に返って、独り取り残されている姫に駆け寄る。

遅れて頭が回り始めた王は、いかにも何事もなかったかのように装うと、では全て任せると魔導士長に言い捨てて、きびすを返した。手に持

ったままのものに気づき、慌てて手を振って捨て去る。

臣下達も後を追ったが、西湖公の長子をはじめ幾人かは、それからもしばらくはその場に留まって、雨に打たれ続けた。

山中の炎は強い雨を受けながらも夕刻まで燃え続け、しかし他に延焼することもなく、厚い雲の陰で日が沈むだろう頃にはぴたりと治まって、細い煙をたなびかせるのみとなった。

翌日には、リビヤルド峠の辺りで山火事が起き山岳民族の数百人が焼け死んだとの虚報が、ナインスの各地に流れ始めていた。

その扉の鍵穴は、外側にはない。

シャツコーはひたすら毎日、扉の前に立ち続けている。

リビヤルド峠から王城へ戻った王と重臣たちは、六つの首を送ったピジョニアからの返事を待つことなく、さらに交渉に長ける二名を送り出した。そのうちの一人は、宰相だ。

ナインスのカナルテ港からピジョニアの王城までは、海路と陸路で十日以上がかかる。往復ならばほぼ丸一月だ。馬鹿正直に返事を待ち、帰ってきたのがピジョニアからの遠征軍ではたまったものではない。万全を期してカーギヤにピジョニア王への取りなしの筆を取らせるために、王自らが頭を下げんばかりに頼み込むことまでした。

その上で騎士団は戦の備えを解かず、諸侯にもまた同じく戦支度を怠ることのないようにと、触れが出されている。

そのような状況の中で重臣たちが肝を冷やしたのは、何度計算しても、有事に備えて蓄えられていたはずの食料の量が記録と合わないことだっ

た。特に三楡城の備蓄は、記録に控えられていた数字よりも圧倒的に少なかった。他の貯蔵地にあるべきはずの食料も本来の量へはまるで届かず、不足のすべてを合わせるとあるべき量の四分の三以上にも達していた。一万の兵を、軽く二月近く養える量が消えていた。

備えとしての余裕分が本来の四分の一もなかったせいで、王の倉は平素の王城で費やされるべき食料までも吐き出すことになり、王は自身の騎士団を次の収穫まで維持できないという屈辱的な事態に陥った。

宥め役の宰相がピジョニアへ赴いて不在だったこともあり、事態を知って怒り狂った王によって即座に臣下の内の数人に、苛烈な処分が下された。食料の横流しなどについて調べを尽くす前に、事情を良く知るはずの者たちを十把一絡げに処分したために、その後の調査は全く行いがたくなってしまった。

そのしわ寄せで、食料庫の警備を受け持っていた多くの騎士が、命ま

では取られないながらも地位を失った。大半は弁解の機会も与えられず、有無を言わせず任を解かれたのだ。最終的には、第二騎士団の副団長までが自ら騎士を辞し、他の元騎士と共に西湖公の元へ身を寄せる事態となった。

王が本来は持つべき食料の不足を補うために、内々で灰髭公から食料が譲られることが約された。それによって早くも灰髭公はその隠居の前に王への借りを返し、灰髭公の代替わりが円滑に行われることも完全に定まった。

そもそも灰髭公は、何か正式な位階を王から与えられているわけではない。王族として、また自領の領主として、王や諸侯から王に次ぐ地位を実質的に認められているものだ。

その領地はほぼ独立自治に近く、ある意味では、王国の中に独立した自分の王国を持っているのに等しい。



そのすべてを自らが子に譲るといえば、誰にも止めることはできない。灰髭公がその息子を跡継ぎに指名し、王の内諾も受け、正式な継承は姫の成人の儀のあととされている。

その灰髭公に西湖公の長子が父からの言葉を伝えるには、王が王でなくなるのは剣を捨てるときだけなのだから隠居など好きにするがよく、もしそれで暇が増えるようならば盤戯でもお相手しよう、とのことだった。

灰髭公は、伝言役となった西湖公の長子を前にして声を上げて笑った。西湖公の長子は灰髭公とその跡継ぎが王へ謁見するのに合わせて、王城を訪れていた。父の代理だ。用件の一つは灰髭公の跡継ぎに会い祝辞を述べること。もう一つは魔導士長に会うことだ。

魔導士長は、関所砦から王に数日遅れて王城に戻り、すべての始末をつけた旨を王に告げたあとは、まるで姿を見せていなかった。御前の儀

にも、姫の成人の儀について口を開いたあの日以降は顔を出していない。西湖公の長子は関所砦の陣を払う際に魔導士の元へ立ち寄り、領地を訪れ父を見舞ってくれるようにと熱心に頼み込んだ。魔道士長はそれを断つたが、ある物を西湖公へ渡すことを約束をしていた。

何日かの後に王城を訪れた西湖公の長子は、王への挨拶もそこそこにわざわざ地下の牢獄を訪ね、魔導士から古びた鉄の盾を受け取った。長方形を刀傷で崩し、鏑で覆われた大盾だ。その盾にどのような意味があるかは魔導士長から西湖公の長子に語られず、ただ西湖公に渡せば本人には伝わると、魔導士長は素っ気なかったという。

西湖公の長子が下城する前に物見高い貴族たちに囲まれ、渋々ながら魔導士長とのやり取りなど話すところによると、そのようなことらしい。それからまた日が経ち、宰相はナインスを離れてから一月半後に王城へと戻った。そのときには先んじて、吉報がもたらされていた。

ピジョニアは一切を不問にし、棒金貨六本と銀貨二千枚を、始末の謝礼とした。

金は産出量が少なく、大陸の一部の国では高価なものとされているが、ナインスではあまりに流通量が少ないため逆に価値が失われている。貨幣のような価値があるものとしてではなく美術品のように扱われていて、言わば絵に描いた餅のようなものだ。金貨を溶かして、宝飾品の金細工に使うなど、そのような使われ方をするだろう。

銀貨二千枚は、ナインスではせいぜい騎士数百名の一月分の給与ほどにしかならない。国同士の間では、まさに手間賃といったところだ。

ピジョニアはピジョニアなりの情報網があり、ナインスの報告を鵜呑みにしているわけではない。しかしピジョニアにとっては、民の逃亡は自国が荒れていることの明らかな証左にもなり、話が広まるのは面白いことではないのだ。形だけは礼をするから、あとは黙っていると、つま

りはそういうことだった。

ナインスはようやくに戦支度を解き一息つくことができるようになる。御前の儀で、姫とカーギヤ王子との婚礼の日取りについても、再び話題に上ることとなった。

カーギヤ王子が、婚礼を姫の成人の儀の後に回したいとの態度を示したために、それが入れられた。

リビヤルド峠の一件以降のごたごたのせいで、姫が十八になるまではあと二月弱しか残されていない。先に護りの紋を入れ、婚儀を後回しにするというのは、ここに至っては致し方のないことだ。婿になるカーギヤがそう望んでいるのだから話は早い。

王にしても、ただ時が過ぎるのを手をこまねいていたわけではなく、姫の躰にどのような護りの紋を彫り入れるかについては、すでに王宮魔導士たちによって、定められていた。

事前からある程度は予想されていたとおり、姫は魔の力が強く、その入れ墨の量は非常に少なくなるということだった。二月という期間でも、王宮魔導士たちが力を尽くせば、十二分に間に合うことは確かだった。

姫の墨入れは、元の王妃の部屋にて行われることになった。ちようど王の居館で空いていたのがその部屋で、広さにしても不足がなかった。

王妃の部屋は、主の死後は長い間に渡って使われていない。男子がないために王には後妻を取る話もあったものの、具体的にはなんの話も進んだことがない。本人があまり乗り気でなかったのだ。

姫は護りの紋がその身に完全な形をなすまでは、王妃の部屋に籠もることになる。

貴族の間には、成人の儀の途中で半端な護りの紋を人前にさらすことが一種の恥のように考えられているところがある。それは魔導士を独占することができるところの、貴族が持つ見栄も含まれている。

姫の場合は、夫となるカーギヤが城内にいることもあり、またあまり余分な時間がないこともあって、墨入れが終わるまでの間は王妃の部屋に籠もり、余人を遠ざけることとなった。

何より今回は急いで墨を入れることもあり、体力が落ちる姫を護るため、病などを近づけないためにも、人の出入りをできるだけ限ることとされた。もちろん、姫自身が部屋から出歩くことも禁じられている。

魔導士長が珍しく気を利かせて見繕ったのか、姫の墨入れに立ち会う魔導士は半数以上が女で、魔導士たちすべてが白を基調とした簡素な揃いの服を身につけていた。

その中に、魔導士長自身は含まれていない。魔導士長が自ら墨入れをしたことは、これまでに一度もないとされている。王も、先王も、魔導士長から墨を入れられてはいない。部下の魔導士がいるからと言えばそれまでだが、不可解なこととも思われている。

地下に籠もっていた魔導士長も姫の墨入れの段取りのために王からの呼び出しを受けて、一月以上ぶりに御前の儀に姿を現したものの、それ以後はすべてを部下に任せてしまったのか、準備のために働く魔導士たちの中にもその姿は見られなかった。

侍女達も食事を運ぶ時などの、ごく限られた用件を除いては出入りを禁じられている。部屋へ出入りをするときも姫と直接に顔を合わせることはなく、代わって数人の女魔導士が姫の身の回りの世話などを行っている。

王が訪れる時でさえ、姫と薄絹の垂れ幕越しに言葉を交わしたただけで、直接に顔を合わせることは姫自身の言葉によって拒まれた。

日取りに余裕があるとはいえ、ほぼ一日おきにも彫つていかなければ、間に合わない。仮に体調を崩してしまっても、多少のことであれば彫り続けるしかないのだ。

姫の躰に対して細心の注意を払うことに、誰の異議も挟まれることなかつた。

シャツコーはその扉の前に、一日の中でほんのひとときであつても立つようにしていた。

すべてが終わつたときには、姫が十八を迎えるその日まで四日を残していた。万事がうまくいったということだ。

ただ姫に彫り熱がでているとのことであつて、そのまま数日の間は王妃の部屋に留まることとなつた。

その日の、前日まで。

\* \* \*

朝の鮮やかな傾きを残した日差しは、謁見の間に敷かれた大理石に窓



型を明白に形取る。石は磨かれた肌深くにあばたの跡を残して、身に受ける光に微かにその肌の濃淡を映しながら天井へと折り返しつつ、澄んだ明るさを柔らかかに散らばらせ続けている。

謁見の間は姫を待ちわびる慶びに、ざわめいている。

王、灰髭公とその跡継ぎに西湖公の長子、その他の諸侯とその妻子、二人の騎士団長、そしてカーギヤ。この場にいるべき、すべての者が揃っている。

姫は玉座の脇——シャツコーが常に控えている通路から現れる。

姫は、半ば蕾のまま花開かずに項垂れてしまった青い牡丹一華にも似た、濃紺の礼服を身にまとっている。その紺は、陽光の照り返しを浴びることで初めてそれが紺だとわかるほどに色が深い。

姫の頭を包む白銀で編まれた冠帽は無数の宝石の光で飾られ、冠から豊かに広がる紺に金糸を刺した薄絹が、ゆるやかに垂れている。薄絹は

姫の胸に浅く背に深く下がって、相貌と髪とを覆っている。歩むたびその青い闇に、姫の鼻筋や頬が幽かに白んで見える。その他には、姫は素肌を晒していない。この日この時のために、上から下までを揃いで仕立てられた衣装だ。

喜色満面で歩み寄った王に誘われて、姫は部屋の中央へと進み出る。その姿を一同が目で追う。唯一人、それをできない者を除いて。

姫が歩みを止めて、正面に向き直るのを合図に皆が息をのみ、音が消えて静まる。

姫は無言のまま、冠帽ごと持ち上げるようにして顔の覆いを取る。礼服の襟ぐりは深く開き、首から鎖骨までの肌も露わになる。

その肌は、姫が王妃の部屋に籠もる前と何一つ変わらず、微かに血潮を透かした乳白色をしている。

それは、異様だ。

そうであつてはならないのだ。この、入れ墨の城では。

ただ俯いたままの姫の姿に目を奪われて、一同は言葉を失う。ゆつくりと顔を上げた姫の唇には微笑が浮かんでいた。

その姫の瞳が、射した陰で曇る。次には陰は姫の全身を包むように広がり、陽光に澄んだ窓の玻璃が薄く尖った音をして破られ、激しく散らばる鋭い輝きを供にしたひとつの影が謁見の間に飛び込んだ。

黒い獣——魔導士長だ。

「お許してください。私には、墨をこの身に入れて生きてゆくことはできません」

姫はその美しい首を折り頭を垂れて、地に向けて侘びを口にす。そして、姫は魔導士長に駆け寄った。

魔導士長は姫の腰を抱くようにすると、背後へふわりと跳ぶ。その身体の重さがまるでないかのように、破ってきた窓枠を飛び越えて庭へと

降りると、素早く身を翻した。

謁見の間にいた者たちが驚愕に腰を抜かすか呆然と立ちすくむ中で、シャッコーがひとり庭へと飛び出す。

「血迷ったか」

中庭にも十人近い近衛騎士が配されていたが、魔導士に大人しく従う姫の姿を目にとめて躊躇する。姫は声も上げず、両腕で魔導士の躰にすがりついているのだ。

追うシャッコーが捕らえよと声を上げるのを聞いて慌てて剣を抜こうとするが、すぐに追いかけることはできない。

魔導士は姫の躰を抱えても、さほど速度を落とさずに走っている。老いているどころか、およそ人とも思えない獣じみた力だ。それとも何らかの魔術か。全力で追うシャッコーが、何とか中庭の端——城壁の手前で追いつく。

獲物を追つて頭に血が上ったシャツコーは、姫の身を気遣うことも忘れて駆け寄る勢いのまま、力任せに魔導士に斬りかかる。

魔導士は身を翻すと常から身に帯びていた剣を片手で抜いて、シャツコーの渾身の一撃を受け止める。シャツコーが魔導士の頭を縦に割ろうと繰り出した剣撃は魔導士の獣面から生えた角一本を切り飛ばすも、やや流れて魔導士の肩口に食い込む。

シャツコーは剣を引かず、魔導士の軀を弾き飛ばし一気に斬り捨てようとしたが、気合いを込めた体当たりを真正面から受け止められる。魔導士は、そこからびくともしない。

魔導士は拮抗した鏢迫り合いの最中にも、まだ自由に使っていた左手を地に向けて振る。

左右の地面から炎が沸き立った。シャツコーの加勢に駆け寄ろうとした騎士たちが炎に行く手を遮られて踏鞴を踏む。

「なんのつもりだ魔導士」

半身になった魔導士の背後に隠れた姫と、叫んだシャツコーの目が合う。姫の瞳に、怯えの色はなかった。

「姫の望みだ」

魔導士が息も切らさず平然と応じ、シャツコーが息を呑む。

不意に強烈な風が足下から巻き起こり、シャツコーは弾かれて宙を飛んだ。全身を地に打ち付けて這いつくばりながらも顔を上げると、魔導士は姫の躰を抱え城壁の上に立っていた。

魔導士に抱えられた姫が真っ直ぐにシャツコーを見ている。その瞬間に、姫の瞳から読み取れそうになった何かをシャツコーは無意識に断ち切って、魔導士を罵る叫びを上げる。

城壁の二人は走り、物見塔と呼ばれている塔へと姿を消した。

古くは城の四隅に四つの塔があったが、ひとつはここを現王の祖父が

居城と定めた際の改築ですでに取り壊されていて、今は三つしか残っていない。

物見塔は六つ角の方形塔で、二階建ての城壁と比べて倍以上の高さがある。もともとの一塔のみが、砦の物見の塔として一際高く作られたものだ。南に広がる海から、北のナインス国土までの全方位が見渡せる。しかし、王城の周辺に動きを見張らなければならぬような敵はすでなく、かなり昔からほとんど使われなくなっていた。

塔は、一階と三階に入り口がある。ただし一階は一つ上がるとそれより上への階段がない。一度別の階段で城壁の上に出て、そこから塔へ入らなければ上がれない造りになっている。

どうやら、塔の二階までは城の中、それより上は城壁の一部という意図で造られたようなのだが、現在ではただの不便な造りだと思われ  
ていない。

シャツコーが吹き飛ばされた衝撃から立ち直り、部下に追跡を命じつつ再び走り出そうとしたとき、足下が揺れた。

物見塔の周囲の地面が、激しく火を噴いたのだ。塔の近くにいた騎士の躰が巻き上げられた土塊と共に、軽々とシャツコーの頭上を飛んだ。追つて空から、多量の土砂が狂った雹のように降って来て肌を叩く。

塔に繋がっていた城壁は足下から吹き出す炎に包まれ、足場の土砂を失ったせいで沈むように撓んだかと思うと、外側に向かって捻れ始め、壁を形作っていた石がそれぞれの繋がりを失って乾いた音と共に崩壊する。

沸き立った土煙に大量の火の粉と煙が混じって辺りを包み、その中で騎士たちの悲鳴と怒号が錯綜する。

城は一瞬にして混乱に陥った。

塔の周りから吹き上がる炎はそこに留まらず、ゆっくりと地を這い進



んでさらに燃え広がり、残った城壁をもさらに焦がす。

王の居館にその触手が届く寸前で、炎の歩みは止まった。それ以上、少しも広がらない。

肌を焼かれてなすすべもなく後退していた騎士たちが、それを見て微かな安堵を覚えたとき、塔を囲んでいた炎がさらに高く大きく燃え上がった。

物見塔は分厚い炎の壁に完全に囲まれる。さながら、炎の竜がそこに巣をかけたかのように。

中庭に姿を現した王の姿を認めて、シャツコーは王の元へ走った。魔導士が姫を連れて物見塔に立てこもったことを報告する。

王が命じる前に第一、第二騎士団長が指揮を執り始めて、すぐに火を消す試みが始められた。

中庭の泉から大量に水が運ばれてきて、炎にかけられるが、水は火に

触れた瞬間に真っ白な水煙となつて膨らみ、その熱で水を掛けた者の顔の皮膚を焼いた。痛みに地に倒れこむその者が医師のもとに運ばれる頃には、顔がただれている。

肌に刻んだ護りの紋が崩れるほどの者には、応急の手当てが済んだ直後に、彫り師が別の入れ墨を慌てて追加する羽目になる。怪我で腕や足を失つた者が、傷そのもののせいではなく、墨が欠けたせいで息を吹き返した魔女の呪いで死んだと思われる例がいくつか知られているのだ。

呪いは封じられているだけで、護りの紋で完全に消されるわけではない。塔を囲む炎が造る壁の根元は底が見えないほどの深さまで土がえぐれて、炎で満ちた堀のようだ。初めの爆裂で飛び散つた土の一部が、塔の壁へと盛り上がっている。

地に穿たれた堀の縁は土が灼けただれて真っ赤に輝き、そこからは外に向かつて背の低い炎が地を這つて広がっている。まばらな下草はすで

に燃え尽きてそこにはすでに土しかなく、燃えるものなどありはしないはずなのだが、炎は消えることなく息づいている。

塔の周囲にはもう燃えるものがないために、すでに煙はほとんどあがっていない、ただ、そこに地から立ち上がる炎がありつづける。いくら水を掛けても水煙が上がるのみで弱まりもせず、燃え続けている。

尋常な炎ではないのだ。

興奮のあまり顔を蒼白にする王は、なんとしてでも姫を救え、薄汚い魔導士を捕らえて殺せと騎士たちを叱咤する。

しかし、物見塔へ上がるにはそれまで城壁と繋がっていた、塔の三階の高さにある入り口に昇るしかない。そこまでには低い炎が地に広がっている上に、最後には炎の壁が待ち受けている。

試しに騎士の誰かが手前で低く燃えている炎に兜を投げ込むと、兜は火の粉を上げて転がるうちに真っ赤に色づく。さして間を置かず、黄色

く輝いていた真鍮の部分が溶け始める。

とにかく鎧でもなんでも重ね着して、上から水をかぶって炎を突破しようとする準備を始めていた者もいたが、それを見て敢えなく取りやめとなる。

いくら水をかけても効果がないことをさとり、次には崩れた城壁の煉瓦を燃える土の上に置き始める。これは功を奏して、煉瓦を十個ほどの高さまで積むと、低い炎の上に道を造ることができた。

それを塔に届くまで続けようとするものの、敷いた煉瓦は地に触れた辺りから次第に燃え始めると、その形を失っていくのだ。燃え崩れて地面と一体になった元の煉瓦は、やはり周囲の土と同じくそれ自体が燃える。

積み上げた煉瓦はそうにして、ほどなく炎に包まれた小山に変わる。

よく見れば、塔から離れて燃える地面は、雨の日に水たまりが造られるように次第にくぼみを造り始めている。土の中の何かが燃え尽くされるのか、ひどくゆつくりとだが、嵩を減らしているのだ。

それは、塔を囲んだ炎の堀も同じで、ほんの少しずつだが穴が広がっている。

王の居館の屋上からその堀をのぞき込んだ者達は、炎の底では土が溶けて赤く燃える泉のように見え、ぐつぐつと沸き立っていると報告した。王を始め誰もが焦り業を煮やしているとは言え、炎の泉に飛び込めと命じるような愚か者はいなかった。この場で指揮を執る者のほとんどが、リビヤルド峠で魔導士が五千人を焼いた炎を目にしているのだ。

目先を変えて城の魔導士が招集されたが、すでに何人かの魔導士が姿を消していた。もともとどのような者が魔導士として地下に潜んでいるのかも、塔に籠もったその魔導士以外の者はほとんど把握していなかった。

たのだ。

ただはつきりとしていたのは、王城と城下に残っていた王宮魔導士たちの中に、炎を消すような魔術らしきものを使える者は、ひとりたりともいないということだ。

時が経つにつれて、王は次第に半狂乱となり、姫を救えと喚き散らすようになるが、誰も塔に近づくことすらできない。

ついには一人の騎士が志願して防火のために着ぶくれた躰で炎の壁に挑み、ひとまずは塔の一階にある入り口に飛び込もうと試みた。しかし炎の壁に飛び込んだ次の瞬間には燃え立つ火勢に弾き返されていた。

勢いよく手前に転がった時には炎を纏い、全身がすでに焼け焦げて顔かたちもわからないようになっていて、他の者は呆然とそれを見つめるだけだった。しばらく後には燃えくずと、それが身につけていた鎧の残骸だけが炎の中に、潰れていくがらんだ丸みを残した。

炎の壁は誰の目にも信じられないほどに高く燃え上がり、塔の最上階にあるはずの窓は、厚い炎の壁の向こう側に形すらも見通せない。

弓矢を用いて塔の窓と頂上へ縄を掛けることが何度も試みられたが、炎の壁が巻き上げている風によつて矢は浮き上がりの的をはずしてしまふ。急ごしらえした鉄の矢も使われたが、どのような縄も塔へたどり着く前に燃え切れる。引いた長尾を炎に焼き切られて身軽になつた矢は、塔へ当たつてひどく乾いた立てた。縄を鎖に変えてはみるものの、今度はどのような大弓を使つても、炎の壁の上に辛うじて望める塔の最上階に開いた窓へは届きはしない。

そうする間に日が沈んでも炎は燃え続けて、煌々と城を照らして赤黒く染めた。それは城下の街から見られ、城で何事かがあつたことは容易に人々に知れた。

王の名で姫の生誕の祝いのために松明が焚かれているという触れが出

されていたが、夜通し明々と燃え続ける炎と、その朱に染まる王城の異様には不吉が揺れていた。

早々に姫を救う手段を失っていた王城の者たちは、それでもなお働きをやめなかつたが、短い夜がすぐに明ける。

太陽が高く昇った頃、塔の頂きから獣の声が降り始めた。

それが姫の悲鳴だと思われたのは、ほんの一瞬のことだけだ。あとは、おそらく生き物が発する声だろうということしか、まるでわからなくなる。

青空さえも紅に染め抜くかのような、絶叫。喉から血を迸らせるかのような、濁り尖った獣の吠え声。

そこには、痛みも哀しみもない。

ただただ音の出る何かを、意志もなくひたすらに渾身の力を込めて打ち鳴らすかのような、強烈な音だ。およそ、人がそれほどの声を出せる



のかを確かめようもないのではないかというほどの大音声が、塔の頂上から発される。

人が人でなくなつたかと思える純粹に激烈な叫びは、それを聞く者の心を単純に殴りつけて、激しい衝撃を与える。

そして、それはほどなく途絶える。

あまりの叫びに姫の喉が裂けるのだと思われた。声が割れ、さらに喉を引きちぎる音が残酷にかすれる。

あとには炎が風を巻く音だけが残り、そこに誰もが終わりを悟るが、しかしまた数刻が立つと、姫のものだろう絶叫が城の空を切り裂いた。

それもまた、すぐにやむ。

それが繰り返される。満ちる失望の水底に、安堵と落胆の浮沈が交互に訪れる。

まだ日が高いうちに、耐えかねた王が中庭を去った。何の指示も残し

てはいない。それを受けて、騎士団は囲みを造りながらも、物見塔へ進入する試みをやめた。

姫がまだ生きていると知れば微かな希望が生まれるが、まるでなすすべはない。そうするうちに、また心を慄かせる叫びが頭上から降り始める。

そして、王城は静まりかえる。

静けさを媒介にして、声にならない苦痛の呻きが細く高く、風の音に混じって、微かに鼓膜に忍び込む。それは次第に、王城のどこからも聞こえるようになる。

靴底が石畳みを擦る音。鎧がきしむ音。誰かのささやき声。鳥のさえずり。風が起こす葉擦れ、草鳴り。そのすべて、ありとあらゆる音に姫の苦痛が移り、死の靴音となって王城に暮らす者たちの耳に届いた。ともすれば耳をふさいでも、その掌と頭蓋との間から。

城の女たちは、怯え泣き惑い、城の男たちは、許されずにただ震える。塔を護る炎は昼も夜もなく燃え、見るものの心を揺さぶり続けて、さらに狂気を呼んだ。

多くの者が気も触れんばかりとなり、王城の外へと遠ざけられた。貴族も騎士も貴賤も男女もなく、恐怖に取り憑かれた者は、王城から密かに逃げ出した。

王は何日も自室に籠もりきりなっている。

さらに静かになった王城に、時が来れば獣の咆吼が満ち、またすぐに空っぽになる。その合間に、中庭の泉が時折微かな水音を立てて揺れる。もう、その陽光に澄む水を無数の手桶で奪われることはない。

炎が燃え始めてから七日目の夜半、女の悲鳴がまた途絶える。

払暁の薄闇の中、物見塔の最上階の辺りから一匹の蝙蝠が飛び立った。羽ばたくことなく、ついと空を滑って城を離れていった。

数十人の騎士が塔の周りを固めていたが、炎の踊りに目を奪われ、あるいは疲労に目を眩まされ、誰ひとり気づくものはいなかった。

東の空から明るみが射す頃に、塔を囲んでいた炎がすべて消える。女の叫びはその前からしばらく聞こえていかなかったが、それを望んでいた者たちは不確かな安堵を憶えても、疑念の抱くことはなかった。

シャツコーは城壁にぐったりと寄りかかり、うつらうつらと櫓をこいでいた。頬のほてりがなくなり、あたりの気温が下がったことで変化に気付く。

何日も風呂も寝床を使わず痛みきった身体を無理矢理に引き起こすが、目眩を覚えて地に倒れ込んだ。降り積もった細かな灰が手の平に柔らかに感じられ、誰かが自分の名を呼んだ気がする。

自分を叱咤する声を上げ勢いをつけて立ち上がり、物見塔へ向かって走りだす。すでに他の騎士たちが動き出している。

構わず真つ直ぐに疾走して、炎の壁が残した穴を飛び越えようと跳躍する。鎧を脱ぎ捨てている分の身軽さでなんとか塔の側へ躰が届く。熱を浴びて素焼き煉瓦のように固まり、塔の壁へ盛り上がった土に爪を立てて食らいついた。

素早く塔の石組みの隙間に短剣の切っ先を突き刺す。それを取りかかりに、腕力で躰を持ち上げ、さらに常から帯びていた剣を抜いてそれも塔の壁に突き刺した。皮膚が裂けるのを承知で剣の刃を掴む。

自らの剣が自分の躰を傷つけるのも構わず、剣にすぎるようにして這い上がり、また短剣を上突き刺しなおす。そこからは石の隙間に半ば爪をはがすようにしてねじ込み、攀じ登って塔の上階への入り口にたどり着いた。

まだ夜暗に冷えたままの螺旋階段を駆け上がり、最上階へ達する。

姫の姿も、部屋の床の石畳みも、シャツコーの目には映らなかつた。

床は不気味に波打っていて、壁にうがった明かり取りから差し込む日の光を浴びた部分が、紅玉に似た色をした波頭を鮮やかに見せる。壁は波飛沫を受けて、同じ色に暗く染まっている。

床一面の血溜まりがあつた。何かの破片や糸状のものを無数に含んで密度を増し濁りきつたそれが、幾重にも重なって盛り上がっている。

シャツコーが足を踏み出すと、まだ乾ききつていず粘りつく血に足首近くまでが沈む。足を上げ下げするたびに皮膚を剥ぐかのような身の毛もよだつ音がした。

——べざり。

つま先に、血に浸った銀の糸がまとわりつき、歩くたびにぷつぷつと千切れている。そこら中に、肉体が散らばっているのだ。

血溜まりに、何か白いものが見えた。どろりと凝り固まったものの中から、両手で掬い上げる。潰れたそれは、ベルトリオーダの瞳の色をし

ていた。

シャツコーは、掌上のそれにひれ伏すように崩れ落ちる。

なぜだ、ベルトリオーダ。

そのかすれた呻きでは、血の水面に波紋が立つことはなかった。





其の国の姫　白鷺と呼ばれし美貌をして

魔を避ける呪を身に刻む儀を憎みて拒み

魔の呪いにより苦しみ抜き　泣き叫び醜く死す

王と民の哀しみ　まことに限りなし

己の美しさを傲りて命を失いし愚者として

永く名を残したる







もう入れ墨は見えない。王もなく、騎士もなく、姫もない。無慈悲に生に割り込むはずだった死も、その死への抗いもその身にはない。

緑に続く森の向こうで三楡城が小山の上であり、さらにその奥には王城が風と大地の境目に溶けて、地平をなぞっている。

東に目を向けると、焼けて緑を失った灰褐色の一角が見える。日が昇る前から半日以上をかけて歩き続けて、哀れにも炎に選ばれた数百の者達が命を落としたその場所の、すぐ脇を抜けてきたところだ。

「ついて来られるか」

そう尋ねる男の声は、低く若い。

「はい。体はしつかり動きます」

後ろを振り返り足を止めていた女は、向き直って応えた。しかし語尾がかすれて軽く咳き込みながら、また歩きはじめる。喉が本調子ではな

いのだ。

峠道を進むその男女は、二人ともに旅装束をしていた。しかし、その出で立ちとは裏腹に、さほどの荷を背負うこともなく、女にいたっては杖を一本手にしているだけだ。

男は、頭巾の付いた砂色の外套を羽織っており、深くかぶった頭巾の下は、幅広の襟巻きをして顔のほとんどを覆っている。

「慣れるのには時間がかかる。気をつけるがいい」

その男に名を呼ばれた女の顔は、左半分が布帯を巻き付けるようにして覆われている。また逆に露わにしている肌は以前に深く抉れたと思われる、無数の醜い傷跡で占められている。鼻梁は歪に波打って、なんとか削れ残った鼻頭にはまともに繋がってはいない。

ただ、女の唇だけは美しい。そこからまた、言葉が生まれる。

「その名を持つ者は死にました」

男はそれを聞き、では魔女殿とでも呼んでおこう、と興味なさげに一瞥を投げて再び歩き始めようとする。

女は左目と共に、手足の指を何本も失った。足を踏み込むと、足先から歩むための力がどこかに抜けてしまうような感覚があり、まだ慣れない。加えて一度は骨まで抉れた無数の傷跡が体中を覆っているため、うごくたびにどこかしらの肉が引きつれる。

「もうひとつお願いが。あなたのお顔が見たいのです」

男は足を止め、言葉を発することなく無造作に頭巾と襟巻きを取りその顔を陽光に晒す。

そこには、空から落ちる日差しに少しだけ目をすがめた少年がいた。その肌に、護りの紋の入れ墨はない。

「私は年を取らない体だ。これもまた呪いだが」

その男が噂通りの年ではないのだろうことはすでに察していた。

だが、そのあまりの若さにさすがに驚く。男は塔に籠もる間も、その後、女の躰が癒えるのを待つ間も、その獣の面を取ることはなかった。ただ、年寄りじみたるのろとした身のこなしは、いつしか抜けていた。その少年の顔を、言葉を失った呆けた様子で見つめている女に向かって、少年が口を開く。

「おまえの曾祖父に呪いを解いてくれと頼まれ、それから百年近くも調べ続けたが、私にできたのは、おまえをそのような姿にして生き長らえさせただけのこと」

女を見つめる少年の瞳は、漆黒の深みを湛えている。その声には、詫びる響きがあつた。

「いえ、あなたのお力がなければ、私は――」

自分の左目をいつ失つたのかさえはつきりとは憶えていない。ただ朱に染まった視界で、血肉にまみれた獣面がずっと自分を見ていたことだ



けは、脳裏に焼き付いている。

「先の見えない中で、よくも七日も耐えた。魔女の呪いを退けたその身で、お前の望みを叶えるがいい」

その声が、生と死の往還を刻んだ記憶に吞まれかけていた女を引き戻す。

少年はまた装うと、歩を進めようとする。

「私を愚かだと思いませんか」

女が、離れようとした少年へ早口で声を投げる。

少年はゆっくりと振り向き、頭巾の影の中から女をしばし見つめただけで、もう口を開かなかった。

終



狭い仲間内で始めたお遊び話が、十余年経って完成しました。奇しくも未曾有の大災害と若干かぶる内容もありますが、まあ、それはそれという事で。あの頃の仲間すべてに、本作品を捧げます。

鈴木カラス

先日、ちょっとお高いカメラを購入しました。本格的なカメラを扱うのは初めてなのですが、思いどおりの写真を撮るため試行錯誤しているうちに愛着がわいていました。良き相棒になってくれそうです。一緒に廃線めぐりの旅なんて、いいじゃない。

とべないぼうし

小説書き&フリーライターとしてぼちぼちやっています。誰か一人でも「あなたの書いたものを読んでよかった」と言ってくれたら本望です。最近、回りくどいのが好きじゃなくなってきました。年のせいかな？……いや、もともとそういうタチでした（笑）

こみやま蘭子

今の自分の属性をどう説明しようかと考えてみました。素人物語作家ってというのが一番しっくりくるようです。

今作では、自分の書きたいものを書きたいように書きました。最終調整にご助力いただいたカラスさんにこの場を借りてお礼を申し上げます。

海辺柊路

## 参加作家（五十音順）

海辺柊路 UMIBE Shuji

こみやま蘭子 KOMIYAMA Ranko

鈴木カラス SUZUKI Karasu

とべないぼうし Tobenaiboushi

コウタリ・リアル 03

---

2012年8月 初版発行

著 者 コウタリ・リアル

編 集 渡辺ジェット

W e b <http://オリジナル同人誌.net/>

---

○造本には十分注意しておりますが、誤字脱字などは、犬に噛まれたと  
思ってあきらめてください。